
カノン

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノン

【Nコード】

N0180M

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

中学三年の井上かのんは、ジャズ奏者の樹生を父に持つ明るい少女。音楽とは無縁の生活を送っていたが、ある日、父の親友と名乗るピアニストの伊織高臣が現れてから、彼らの温かくも平凡な家庭に僅かなひびが入ってゆく。

ピアノ講師の母、美沙子と樹生、そして高臣らの間に何があったのか。

音大生であった彼らの過去と現在が複雑に絡み合い、その波はかのかんを飲み込んでゆく。

モリス＝ラヴェルの佳曲『クープランの墓』が流れる中、かのんは自らの未来と、すべての大人たちを救うために歩き始める。
青春クラシック音楽小説。

< 前編 >

#イントロダクション

闇を切り裂くようなピアノの強打が打ち鳴らされる。 モーリス＝ラヴェル。

もう二度と聴くことなどないと思っていたのに。

樹生^{たつき}の心に深く刻まれた傷跡から、血が噴き出してくる。

ぐっと握りしめた手が、白くなるほどに強く。

それでも樹生は、ステージ上の高臣の姿から目が離せなかった。

カエツテクルナ、マダハヤスギル。

キズハマダ、コレツポツチモイエチャイナイ。

曲は無情にも続いてゆく。

樹生は止めていた息を、たまらずに吐き出した。

#1

「ふわあああ」

思わずあくびが出てしまう。午後一の音楽なんて、起きていろっ方がどう見ても無理。

かのんはそれでも教師に見えないように、窓の方を向いて大口を開けた。

窓の外は快晴。まだ新学期も始まって間もないというのにとっても暖かくて、制服のジャケットがいらなくらいだった。

四階にある音楽室には選択音楽を選んだ三年生が押し込められてい

た。キライじゃない。でも別にそんなに好きでもない。まあ一部熱狂しているヤツらもいるけれど、それだって決してクラシックじゃないだろう。ましてや受験科目にはない教科。誰もがどこかねじの外れた方向に意識が飛んでいた。

かのんにとっても、音楽は別に特別なものでも何でもなかった。両親は音楽関係の仕事をしているとは言え、特に強制されることもなくここまで来てしまった。だいたいかのんの所属している部活はバレ―部と漫研で、音楽のおの字もない。

かのんは頬杖をついて、窓から見える遠くのビル群を眺めていた。

「……かのんさん、井上かのんさん！」

「ねえ、かのん！あのセレブ講師に呼ばれてるよ！」

隣りに座っていた真由につつかれて、あわててかのんは立ち上がった。

思わず口元を右手でぬぐう。寝てはいなかったから、そこまでは酷くないと信じたい。

「はい！わかりません！」

元気よくそう答えたかのんに、クラス中が笑い声を上げた。

巻き髪と濃いマスカラのせいでセレブ講師とひそかに呼ばれている新任の若い女性講師は、口元をゆがめつつも目だけはこれっぽっちも笑ってはいなかった。

「そうではなくて、これからわたくしがアリアを歌いますから、あなたにピアノ伴奏をお願いしたいのですがよろしくて？」

「はあっ？」

何を言い出したのか、かのんにはとっさに理解ができなかった。それまで全く授業を聞いていなかったのだから当然と言えば当然だけど、何であたしが、伴奏？

「あの先生？私、ピアノ弾けないんですけど……」

おずおずと口にするかのんに、今度は講師が目を見開いた。眉がひそめられる。何で怒ってる？かのんの頭に疑問符が充満する。

「あなた、サクソ奏者の井上樹生たつきの娘なんでしょう？お母様はピアノ講師をなさっていると聞いていますけれど、あなたが弾けないわけがないじゃないの？」

そんなむちゃくちゃ言われても、弾けないものは弾けない。お母ちゃんにピアノを教わったことなんて生まれてこのかた一度もないし、第一うちにはピアノすらないのに。

「私が弾きます」

代わりに学級委員の大島が手を挙げる。かのんにほんの少し冷ややかな視線を送りつつ。勝手にライバル視されているのは知ってはいたけれど、かのんは何も気づかないふりをして大島に手を合わせた。サンキュ。彼女はふん、と横を向いてピアノへと歩き出した。

「なんじゃそりゃ！今時そんな先公おるんかいな。お父ちゃんが学校に抗議に行ったる！」

珍しく早く帰った樹生にその話をすると、父はいつもみたいにでたらめな関西弁でまくし立てた。

「お父ちゃん、一応大阪生まれなんですよ？何でそこまでブロークンな関西弁なのかなあ？」

かのんは横を向いてため息をついた。

「あほ、突っ込むところはそこやないで！その教師にぎゅうと言ってやらんと」

「いいから標準語でしゃべってくんない？お父ちゃんとしやべると気が抜ける」

娘からの冷やかかな抗議に、さすがの樹生も鼻白んでちょっとだけ黙った。

三人で夕食を囲むなんて、久しぶりだ。樹生の全国ツアーが一段落ついて、次の仕事が入るまでは打ち合わせやら何やらで、しばらくは早く帰ってこられるらしい。

二人のやりとりを微笑んで聞いていた美沙子は、樹生の好物をテーブルに並べながらそつとかのんに言った。

「ごめんなさいね。お母ちゃんがなまじピアノなんか教えているから、かのんにイヤな思いさせちゃって」

母はいつものように穏やかに言った。そんなことないよ気にしないし。かのんは明るく答えた。

「でもさあ、なんでウチにはピアノがないの？お母ちゃんだって家で練習とかしたいとは思わなかったの？」

何の気なしに訊いたつもりだった。けれども父も母もほんのわずか

その表情を硬くした。
気づけないほどのかのんも鈍感じゃない。でも、あえて気づかないふりをした。

「おれはな、生ピアノってヤツとどうも相性悪くてな」
しばらく黙っていた樹生が、吐き捨てるように言った。家にあるだけで気分悪くなる、それも付け加えた。

「大人げないなあ。アレンジとかの仕事のときはどうすんのよ」
わざと冗談めかしてかのんは言葉をつないだ。家にはキーボードすらないのだ。

「何のためにおまえにピアノ力を買ってやったと思ってる！」

「はあ！？ちょっと待ってよ、まさかあたしの小学校時代のピアノ力、勝手に使ってんじゃないでしょうね！？」

「勝手も何も、金を出したのはおれだ。使って何が悪い」
悪びれた様子もなく、樹生はビールを口にした。かのんの顔がどんどん険しくなる。

「信じらんない！きもいからやめてくれる？天下のジャズフュージョンバンド・ダイバージェンスのリーダーがさ、ピアノ力でアレンジしてるなんてファンが知ったら、泣くよ？」

二人の掛け合いを半ばあきれ顔で見ていた美沙子が助け船を出す。

「かのんちゃん、歌口はちゃんとお父ちゃん専用につて新しいの買

「つたんだし、あなたは今さら使わないでしょう？」

それでもぶつぶつ言うかのんの皿に、美沙子はそつとエビフライを載せてやった。

かのんの顔がにつこりする。単純なヤツ、つぶやく樹生に、お父ちゃんに言われたかない、と思わず反論する。

実際、家で仕事をする樹生を見たことはほとんどなかった。ツアーが始まれば家に寄りつかないし、曲作りのときはダイバージェンスの事務所にこもりつきりだ。

それでも、かのんは父が大好きだった。一緒にどこかに出かけると言っても母に連れられてツアーのお供くらいだったけれど、父も母もかのんをとて愛してくれているのがわかる。めちゃくちゃ忙しいだろうに、かのんの誕生日にだけは必ず一緒に過ごしてくれる。ポンポン言い合うその中にも、かのんは心があつたまる思いを感じていた。

#2

「なあ頼む！一回でいいからやらせてくれ！」

二限の終わった教室で、恭平が手を合わせてかのんを拝む。周りは何事？というよりも、また始まったという薄笑いで二人を生温かく見つめていた。

「あのさあ、恭平さん。その、誤解されやすいものの言い方止めてくれない？」

かのんの通う聖上学園中等部はそのまま高等部に進むこともできるが、クラスの半数は外部受験組だ。もっと高い偏差値の高校へ。そ

ういう連中は今からもう既に気合いが違っていた。彼らにとっては、いつものかのんたちのじゃれ合いもうつとおしいものなのだろう。視線の冷たさにかのんは思わず小声になった。

「だからいつも言ってるでしょ？お父ちゃんはさ、家でサックスなんか吹かないの！第一うちみたいなあんなちゃっちい家で楽器なんか吹いたら、近所中から怒鳴り込まれるよ？」

「じゃあさ、オレがスタジオ代出すから、一度井上樹生の生音聴かせてくれよ。それでついでにオレのアルトも聴いてもらってさ。君すごいね。中学生でそれだけ吹けるんだ。どうだい？次のツアーからダイバージェンスのサポートメンバーっていうのは？とかさ」

勢いづいてまくし立てる恭平に、かのんはこれ見よがしに大きなため息をついた。

「はいはいはい、妄想はそのくらいで満足しましたあ？ホントによく毎回飽きないよね。お父ちゃんは弟子も取る気ないし、他人のレッスンなんかもしないし、だいたいそんなあんだみたいな中学生の演奏なんか、聴く暇ないんだから」

同じクラスの恭平が、高等部の連中とバンドを組んでいるのは知っていた。初等部からサックスを始め、なぜか進学してからジャズやらフュージョンやら、そっちの方に進んでしまったのも知っていた。イヤんなるほどの腐れ縁で、同じ班になるのもこれで何回目だろう。

「恭平はさ、本気でサックス奏者になるつもり？」

当たり前じゃん、ふてくされた顔で彼がそう答える。

「だったら、真面目に音高だとか音大だとか、そういう道を自ら切り開いて地道にだね……」

言いかけたかのんにわざとらしく指を振り、わかってないなあと恭平は言った。

「この世界はさ、実力がすべてだって。若いうちから実戦で鍛えた方がいいに決まってるだろ。矢野沙織なんか14才でデビューだよ？」

その実力があなたにはないんじゃない。かのんはかろうじて口の中だけでぶつぶつ文句を言った。

「あら、でも井上樹生はG大を出てるんじゃないかなかったですっけ？」

ふいに横から大島が口を出してきた。上から見下すような嫌みな視線。こいつは知ってて言ってるんだよな。かのんは相手にしたくなかったが、しょうがなく愛想笑いで答えた。

「大島さん、こないだはありがとね。助かったやつたあ。それからうちの父はG大出てませんから。ええ、そりゃもう立派な中退ですから」

あんなバカ高い学費なんか払いきれるか。お父ちゃんは冗談めかしていつも言っていたが、実際は在学中にかのんが生まれたからだ。今でこそ珍しくもない学生同士のできちゃった婚ってやつ。これはちよつと音楽業界に詳しいヤツなら誰でも知っている。どこの世界にもマニアってのはいるもんだ。

かのんと大島の視線が微妙にぶつかり合う。女同士のプライドをかけたにらみ合いに、さすがの恭平も黙り込んだ。

「かのん！セレブが呼んでるよ！」

真由が廊下を走ってきたのだろう、息を切らせてそう叫んだ。
きよとんとするかのんに、いいから早く呼んで来てって言われてんだから！と真由は大声を出した。有無も言わず彼女の腕を引っ張り、四階まで連れて行こうとする。

「ちよ、ちよつと真由、何したん？」

「何だか知らないけど、有名なピアニストが来てるんだって！その人がかのんを連れてこいつて言ってるんだって！もうセレブったらものすごい剣幕で、早く井上さんと呼んでらっしゃい！！ってぶち切れてんだから！」

有名ピアニストという言葉に、なぜか大島と恭平までもがかのんの後をついてきた。かのんはもう、逆らうこともせずに、訳のわからぬまま階段を駆け上がった。いった。
廊下から漏れ聞こえるピアノの音。

「セレブが弾いてんの？」

真由のつぶやきに、かのんはゆっくりと首を振った。

「違う、セレブの音じゃない。あの人にこんな音出せない。こんな……」

思わず自分の口から出た言葉に、かのん自身が一番驚いていた。いつもと違う様子に他の皆も黙り込んだ。かのんの表情が険しくなる。こんなピアノの音、聴いたことない。でもどうしてこんなに惹かれ

てしまうのか。

まるでガラス玉を転がしたかのような、キラキラと光を受けて輝く音の粒たち。

なんという曲か知らない。けれどそれらの音符一つ一つがきらめく美しい宝石のようで、クラシックなんて聴いたことのないかのんでさえ、引き込まれてしまった。

自然と足が音楽室のドアに吸い寄せられるように、かのんは部屋へと入っていった。

黒くつややかに光るグランドピアノには、一人の男性が座っていた。瞳を閉じ、ゆっくりと首を振りながら、旋律の流れに身を任せている。

わずかな範囲でうごめいていた音たちは、そのうねりを高音域にまで広げ、切ない和音を響かせた。そしてまた、ゆっくりと戻ってゆく。ひっそり添えられた左手の対旋律が、それをさらにきらびやかに装飾する。

誰もが何も言えずに、彼のピアノに魅せられていた。

ふっと、音が途切れる。

ピアノストは、優雅な仕草で顔をかのんたちの方へと向けた。

色の白い端整な顔立ち。やや切れ長で目尻の上がった特徴的な目が、まっすぐかのんを見つめた。前髪を横に流し、その栗色は柔らかく彼の輪郭を囲んでいた。

そつと立ち上がる仕草までもが、まるで映画のワンシーンのようで、みな言葉をなくした。

かのんは、なぜだかわからないけれど、彼の方へと一歩踏み出していた。

ほんの少し淡い茶色の瞳と、かのんの意志の強い視線が重なる。

「君が、樹生の娘？」

背の高い彼が、ベルベットボイスでささやくようにそう言った。
かのんは、うなずくこともできずに彼をただ、見つめ続けていた。

#3

「君、名前は？」

その落ち着き払った声色に、なぜだかかのんは無性に腹が立った。
中学生のかのんが見てもわかるくらい高そうな細いストライプの仕立てのいいスーツに、カフスボタンが光っている。

ピアノistrしく背筋を伸ばし、優雅にただずんでいる。

華奢なその身体はどこから、あんな音を出していたのだろう。繊細ではあるけれど決して弱々しい音ではなかった。

まるでこのぼろい音楽室が、コンサートホールのように響くくらいのはっきりとしたその音色。

細面の整った顔立ちに薄い唇。それらは透き通るかのように白く、日本人離れしていた。ハーフなのかも知れない。どこかでそんなふうに思った。

「あなたこそ誰なんですか？父となんか関係あるんですか？あたしに何か用が！」

だんだんと声が大きくなるかのんをセレブ、音楽講師の相原があわてて止めた。

「井上さん、失礼なことおっしゃらないのよ！この方はね、世界的に有名な音楽コンクールで入賞された日本を代表するピアノストの！」

その声をさえぎるように、彼が相原に向かって手を差し向けた。相原は思わず黙る。

視線をかのんに戻して、彼は微笑みながらこう言った。

「これは申し訳なかった。大切なお嬢さんに礼儀を欠いてしまったね。君のお父様の友人で伊織高臣と申します。よろしく」

優雅にかのんに向かって右手を差し出した。握手をするつもりなのか。かのんはわざとそれを無視すると、顔をきつと上げた。

「井上かのんです。父が大変お世話になっております。それじゃ失礼します！」

彼女は踵を返すと、そのストレートで細い栗色の髪をひるがえして部屋を出て行くとした。かのんのやはり白くて陶器のようなつややかな頬が今は感情の高ぶりのせいで赤く染まっていた。

「かのん！」

「井上さん！」

みなが口々にかのんを引き留めようとするが、彼女はどうしてもそこから逃げ出したかった。この人はイヤだ。危険すぎる。そんな警報が身体の奥底からわき上がってきていた。近づいてはいけない。

なのに、音楽室のドアのところではかのんは立ち止まった。

高臣がまた、ピアノを弾き出したのだ。あのガラス玉のようなきらびやかな音で。

魔法にかけられたかのようにかのんは動けなくなった。

なぜ、どうして、この音にここまであたしは引き付けられるのだろ

う。ピアノなんて、何も知らないのに。

コロコロと転がる音の珠たちは、鍵盤の上を軽やかにはね回り重なり合い、決して混じり合うことはなかった。

一つ一つが輝く珠玉。高まってゆく旋律に背中がぞくつとする。耐えきれずにかのんは振り返った。

今度は高臣は目をつぶってはいなかった。かのんを見つめる微笑みながらも冷たい瞳。

視線を彼女から外すことなく、彼は曲を弾き続けた。

まるでハープをかき鳴らすかのようなエンディングを終えると、かのんが訊いたわけでもないのにまるで心を見透かすかのように、高臣はこう告げた。

「モーリス＝ラヴェルの『クープランの墓』という曲だよ。樹生に聞いてごらん？彼が一番好きだった曲だ」

かのんは、知らず知らずのうちにその大きな切れ長の瞳から涙をこぼした。

あまりの音の美しさに、耐えられなかった。

そのまま彼女は、みな制止を振り切って、部屋を走り出ていった。二度と聴きたくない。

あの曲は聴いてはいけない曲だ。

自分の中で誰かがそう叫んでいる。誰が？わからない。心かどうにかなってしまいそうだった。

階段を駆け下り、上靴のまま外へ。

誰も来ないお気に入りの時計台下へ潜り込むと、かのんは顔を押しさえて涙をこらえた。

『クープランの墓』

題名の響きだけがかのんの心に深く刻み込まれ、もう自分は決して忘れることはできないだろうという思いで彼女はいつぱいになった。

4

教室の端で恭平がこちらを伺っていることには気づいていた。でもかのんはとても相手にする気も起こらなかった。頬杖をつき、窓の外を眺める。

どうせかのんは内部進学の手定だから、よほど定期テストの点が酷くなければこのまま大学まで進める。古文なんてまともに勉強する気も起きない。

どうしてお父ちゃんもお母ちゃんも、あたしに音楽をさせなかったんだろう。

かのんの心にほんの少し芽生えたかすかな疑問。セレブ相原だってあれだけ驚いたのだ。

樹生のバンド「ダイバーゼンス」はテレビ等の露出こそ少ないが、全国ツアーを組めばアリーナ級の会場をいっぱいにするほどの人気インストバンドだ。今時歌も入っていないジャズフュージョン系で、それだけの人員を集められるグループはそうない。若手の実力派を集めたリズム隊と、樹生の個性あふれるサックスが人を惹きつける。ずっとそう言われ続けてきた。アルバムだって出せば必ずジャンル別のベストには食い込んでくる。ずっと音楽で食ってきたのだ。中退とはいえ、G大なんて普通の実力じゃ入れない。

母だってそうだ。お嬢さま音大のピアノ科を卒業して、それ以来大手の音楽教室に所属して講師として働いている。父の人気が出るまでは母の収入がすべてだったと聞く。今だって母を指名してくる生徒さんだって多い。

けれど、二人ともかのんにはこれっぽっちも音楽を勧めなかった。幼稚園こそ近所の公立に通ったが、あとはエスカレーター式に進学できるこの聖上学園にかのんを入れた。しなくてもいい苦労なんてしない方がいい。酔ったときにそう口にした父の気持ちは本心だったのかも知れない。両親にとって音楽は、辛いだけのものなのだろうか。

「かのんにはね、誰よりも幸せになって欲しいの」

母が抱きしめながらいつも言うセリフ。くすぐりたいのと今では照れくさいのとで、すぐにその腕から逃げ出してしまうけれど、かのんはその言葉を聞くのが好きだった。あの日までは。

『クープランの墓』

あの音を聴いた日から、かのんの心が少しずつ乱れてゆくのをどうしても止められないでいた。

なぜだかわからない。わからないことがイヤだった。父の友人を名乗る男。ピアニスト。

お父ちゃんは生ピアノが何よりもキレイなのに。

「井上さん、相原先生が呼びよ」

顔を上げると大島が立っていた。この間の非礼を叱られるのか。かのんは思いのほか素直に立ち上がった。ついて行こうか？心配そうな真由に大丈夫と答える。

頭がうまく働かない。大島のあとをのろのろとついて歩く。彼女は四階の音楽室ではなく、階下へと降りていった。理事長室。

思わず大島の顔を見つめる。どういうこと？

「私は相原先生に頼まれたただだから、それでは失礼」

一人残された形になったかのは、しばらくその重厚なドアの前で躊躇していた。理事長室なんて入ったことない。一般の生徒にはおそらく全く縁のない部屋。

それほど、あのピアニストは怒っていたということなんだろうか。名前もよく覚えてない。背の高い、日本人離れした、冷たい瞳。かのはごくつと息を飲むと、扉を控えめに叩いた。すぐに開けてくれたのは相原だった。

「待っていたのよ、井上さん。早くこちらにいらして」

なぜか相原は機嫌がよかった。いつもはめつたに見られない笑顔で彼女を迎える。その向こうに座るのは、式典のときにしか見かけない理事長か。

彼は苛立たしそうな神経質っぽい表情を精一杯なごませているように見えた。金縁のメガネが、きらりと光る。

「伊織高臣氏がね、我が校の聖上記念講堂で特別記念公演をしてくださると申し出てくださってね」

伊織、誰よそれ。かのは不審そうな目に理事長は眉をひそめた。しかしすぐに笑顔に戻すとかのんを落ち着かせるようにゆっくりと話し出した。

「君が先日お会いしたピアニストの伊織さんだよ。聞けば君のお父様とは昵懇の中だというじゃないか。それでね、先方の希望でぜひ君に……」

「謝ればいいんですか？あたしが！」

耐えきれずにかのんはそう叫んだ。

あのときに飛び出した彼女をその伊織って男が怒っているというのだろう。謝らなければ演奏会をしない、そんな子どもじみたことを言っているんだろう。かのんはむかつて仕方なかったが、必死に耐えた。大人の事情があるのだろう。謝れと言うのならいいわよ、いくらでも謝ってやるわよ！

しかし理事長は驚いた顔で相原と目を合わせるばかりだった。彼女が苦笑いしつつその言葉の後を引き継いだ。

「そうではないのよ、井上さん。伊織さんはね、あなたにステージに上がってもらって花束がもらえるのなら、あなたのお父様への恩返しに無償でミニコンサートを開いてもいいっておっしゃってたさっているのよ」

「……！？」

かのんには相原が何を言っているのが全く理解できなかった。花束？恩返し？何のこと？

かのんは伊織という名前も今ようやく思い出したくらいだった。もちろん樹生にはこのことを話してもいない。話してはいけない。心の中の何かがめいっばい警報を鳴らしていた。

「イヤです、あの人には会いたくありません」

思わずかのんの口から言葉が飛び出した。相原がなだめすかすように声をかける。それをかのんは激しくさえぎった。

「父だって、そんな人のこと一言だって言ったことありません。父の友人にそんな人いません」

「伊織さんはね、ずっと海外で活躍されていて、十五年ぶりに初めて日本で演奏会をされるのよ。その初演を特別に聖上記念講堂でやってくださると言ってらっしゃるの」

「もちろんこちらとしても、それ相当の出演料をお支払いするつもりでいたのだがね、あちらのご厚意で井上樹生の娘さんがいるのならば、わざわざ言ってくださったんだ」

もうかのんには何も言う気持ちもなかった。二度と会うつもりなんかない。あの人と会っ

てはいけない。それだけはかのんにはわかっていた。

「井上さん、あなたがなぜそんなに頑なになるのかわからないけれど、伊織高臣と言えば世界的に有名なラヴェルの演奏家なのよ。それが日本初リサイタルともなればマスコミもたくさん来るわ。あなたが断ることで、お父様にご迷惑がかかるのではなくて？」

「そんなこと……引き受けたら余計に父のことをいろいろ書かれて迷惑です！」

「お父様と伊織さんはG大の同級生と伺っておりますのよ。もしあなたがこの学校にいるのに伊織さんの申し出を断れば、マスコミはお二人の間に何かあるのかと勘ぐる人も出てくるのではなくて？」

相原はなぜか薄笑いを浮かべてかのんを見た。背中がぞくつとした。彼女の考えではないのではないか。直感的にかのんはそう感じた。あの男が、伊織高臣が。

大人の事情。それを自分に飲み込めと言うのか。

かのんは唇を噛みしめた。

5

聖上記念講堂は、学園五十周年を記念して作られたという、規模の割には音響的に優れたホールだった。決して知名度は高くはないけれど、その良さを知る海外の演奏家などもこのホールをツアーに組み込むよう指定してくることがあるほどだと言われる。普段は式典にも使うから、かのんたちにとってはなじみのある場所でもあった。

しかし、彼女の表情は今日は硬く、笑顔の片鱗さえも見せることはなかった。

皆の並ぶ三年C組の列ではなく、挨拶をする生徒会長と共に職員席に座らされたかのんは、身じろぎもせず、ステージをにらみつけていた。

耳栓でも持ってきてくりやよかった。

本気だった。

もう二度と伊織高臣のピアノなど聴きたくもない。

しかし、期待度の高さはその講堂の前後を埋め尽くした望遠レンズのカメラたちによって、示されていた。テレビカメラさえそこにはあった。

なめるように、ただ行儀良く座っている生徒たちを撮る連中もいる。どこかのシーンに挿入するつもりなのだろう。だからどうだというのだ。そんなにネームバリューがあるとは思えない。

かのんはわざと、高臣のことを調べようとはしなかった。今時PCを使えばある程度の知識は手に入れることなどすぐできる。でも、関係のない人だ、そう思い込みたかった。

ましてや、井上樹生と伊織高臣との関係がどうであるかなど、一番知りたくはなかった。

あたしの役目は、このきつい匂いを放つ派手な花束を、あの男に手渡せばいいだけのこと。それで、この男の出演料がただになるのなら安いものなのだろう。理事長も校長も、相原もかのんに気を遣って笑顔を見せていた。

プロの司会者なのだろう、しゃべり慣れた口調で若い女性が高臣を紹介する。ロン・ティボー国際ピアノコンクール二位入賞。へえ、一位じゃなかったんだ。バカにするつもりはさらさらないけれど、それがほんの少し意外に感じた。

優雅な足取りで高臣が中央のベーゼンドルファーに向かう。漆黒のコンサートサイズのグランドピアノ。音楽室にある国産のぼろいヤツとは値段のけたが違う。

生徒たちは申し合わせたように身じろぎ一つしない。配られたパンフレットさえ、開く者はいなかった。それだけの威圧感と緊張感を、高臣は醸し出していた。ただ一人で舞台の中央に立っただけなのに、司会者の簡単な曲目紹介。世界的に知られたラヴェルの演奏家。ならばおそらく今日の演目もすべてラヴェルなんだろう。

そう思い込んでいた生徒たちに向かって、高臣はほんの少し頬をゆるめると聴き慣れた旋律を弾き出した。

これは、あたしでも知っている。「子犬のワルツ」だ。

原題で言われたから気付かなかった。子どもでさえ知っているありふれた曲。クラシックなぞ知らないガキばかりだと思ってバカにしたのか。

しかし、その音はかのんの知っているどの子犬のワルツとも違っていった。音が一つ一つはつきりと際だってきて、澄んだ響きを奏でている。コロコロと転がる様が普通なら流されてしまいがちなのに、どれも存在を主張して、それでいてぶつかり合うことなどない。なんてクリアで美しく、そして鋭い音。

他の生徒たちには、もしかしたら気付かれなかったのかも知れない。みんな知っている曲にどこかほっとしたような表情を浮かべていた

から。でも、かのんだけは息ができなかった。こんな音、聴いたことなんてない。

聴き慣れたエンディングで拍手が起こる。鳴り終わる前に高臣は、ダーンとフォルテシモを響かせた。

曲目紹介ももうない。しかし生徒たちはその和音に思わず引き込まれた。

たたみかけるような超絶技巧。ここからでは指先が見えるはずもないが、腕の動きで高音部から低音部まで、フルに音をとらえているのがうかがえる。スケルツォ。アルペジオ。音楽の時間に習ったかろうじて残っていたかすかな記憶が、頭に蘇る。

そして、唐突に曲は終わり、ほうつと高臣は息を吐き出した。

今度は深く呼吸を整えると、目をつぶり、しばらくじっとしていた。

「亡き王女のためのパヴァーヌ」

相原にオーケストラで聴かされたことがある。確か冒頭はホルンの切ない旋律。

なのにピアノでは、なんてはかなげで消え入りそうで、それでいてどこまでも届くようなしつかりとした音なのだろう。

アンコールがかかる。本当ならここでのんはステージ上で花束を渡さなければいけないはずだった。そういう手はずになっていたのに、高臣はだんどりを無視するかのように椅子に座り直し、すぐさまピアノに手を置いた。

そう、あの曲を。

相原に背中を押され、ステージ袖で待機していたかのんだけにおそらく聴かせたいがために。

かのんにはわかった。高臣の思いが。彼の淡い瞳がかのんをとらえる。

クープランの墓のプレリユード。小曲集だから前奏曲自体はとても短い。演奏はあっという間に終わり、それでも耐えきれずにかのん

の大きな目からは涙がこぼれた。

だからイヤだったんだ。この曲だけは聴きたくなかったのに。機械になったかのように感情を殺して舞台中央まで進んでゆく。カメラのシャッター音が激しくなる。かのんがダイバージェンスの井上樹生の娘であることは、もうとつくに皆に知られていることだろう。宣伝好きの理事長の考えそうなことだ。でも、そんなこともうどうだっていい。早くこれを渡して、袖に引っ込んでしまわなくては。

足の止まったかのんに、高臣は満面の笑みで近づいていった。右手を差し出す。それに花束をつっけんどんに手渡す。左手に素早く持ち替えて、懲りずにもう一度手を。仕方なくかのんは自分の右手を突き出した。

思いがけず強い力で、高臣は彼女の手を握った。そのままそつと身体を引き寄せる。

かのんの目が大きく見開かれる。

「ほら、笑って。カメラが僕たちを狙っているんだよ」

わざとらしくゆっくり高臣がそつささやく。ふざけんなこのセクハラじい！

三十半ばには到底見えない高臣にじいじはどうかと思ったが、かのんは思わず心の中で毒づいた。

誰が笑顔など作ってやるものか。早く手を離してよ。焦るかのんに彼は冷たく言い放った。

「君は樹生の愛娘なんだろう？だのにちつとも樹生には似ていないんだね」

何を言い出したのか、とっさにはわからなかった。つい彼を見返してしまふ。

「あの女に似たの？平凡なあの女にさ。そうとも見えないけれどね」
かのんは頭ががんがんにして、何を言い返してやればいいのか必死に考えを巡らせた。でも結局は何も言えず、唇を噛みしめて思いきり高臣をにらみ返すのがやっとだった。
心からの侮蔑を込めて。

何が父の友人だ。こんな失礼な男、許せやしない。

「どうするの？怒ったの？僕をここで殴ってみせるかい？格好のマスコミの餌食だね。井上樹生の娘が、親友の伊織高臣に、とね。話題提供に一役買うかい。僕はそれでもいいけれど」

親友？その言葉がさらにかのんを激高させた。しかし、精一杯の理性を保つと、彼女はまだ握られていた手を振りほどき、走るように袖に逃げ帰った。

本当には聞こえないはずの高臣の嘲笑の声が幻聴のように響いて、かのんはその場に泣き崩れた。

6

テーブルの上の皿が飛び上がるほど、樹生は力を込めてこぶしを叩きつけた。

美沙子が何事かと振り向く。かのんは何も言えずに、長い髪をたらしながら下を向いていた。

「何で黙ってた！？ 何でおれに一言も言わなかったんだ！」

樹生の怒りは治まらない。目の前にはどこかでプリントアウトして

きたのであろう、画像の荒いネットの写真。伊織高臣が満面の笑みで聖上記念講堂のステージに立つ姿。その横に硬い表情で立ちつくす井上かのん。

かのんはしばらく黙ってはいたが、それでも顔を上げると父親をにらみつけた。

「あたしはこんな人知らないし、学校に、理事長と音楽の先生に頼まれたの！井上樹生の娘だからって！何でお父ちゃんが怒るの？あたしがなんか悪いことした？」

大声を出すつもりだった。でも意に反して、かのんの声は枯れていた。

その言葉の響きに思わず樹生はたじろいだ風に見えた。でも、どうやっても沸き起こるたぎる思いが、樹生の言葉をどうしてもさえぎることはできないでいた。

「おれはな、誰がおまえに目立つことをしろと言った、と言っているんだ。そりやおれはこういう仕事をしているし、人にもある程度知られている。でもな、それはおまえには全く関係のないことだし、こんなことで図に乗るようじゃ！」

「図になんか乗ってない！あたしは何度も断ったし、やりたくないってさんざん言ったし！でも断ったらお父ちゃんに迷惑かかるって、この人が！」

樹生は黙った。息が荒い。自分を、荒れ狂う自分を必死に抑えているのが端で見えてもよくわかった。美沙子がそつと言葉を添える。

「お父ちゃん、かのんには何の関係もないことでしょう？」

母が樹生の肩に手を置く。いつもの優しい仕草。母は、美沙子はいつもそうだ。穏やかで落ち着いていて、まるで魔法のようにみんなを鎮めてしまう。

でも、今日はとても無理だった。かのんにとっては、その仕草さえ気に障って仕方なかった。

言わずに、言っではいけない、心に閉じこめておいた理性が、なぜかその瞬間バチンとはじけ飛んだ。

「お父ちゃん、やっぱり伊織って人知ってるんだ？あの人、井上樹生とは親友だつて言ってた！よく、本当によく知ってるって。仲良かったんだね。どうして今は会いに行かないの？ケンカでもしたの？あたしもしかして、そのとばっちり？それって酷くない！？」
ようやく声が出た。かのんの叫び。脳裏に浮かぶあの冷たい爬虫類のような肌。

樹生が手を振り上げた。叩かれる！かのんは目をつぶった。

今まで樹生が彼女に手をあげたことなんてない。叱られたことはもちろんあるし、お置きだとさんざんくすぐられたことだってある。でも、今はきつと殴られる。そうかのんは覚悟した。

しかし、振り上げられた手はいつまでも下ろされることはなかった。かすかに目を開けたかのんに見えたのは、白く握りしめられたこぶしがわずかに震えている様だった。

なんて、辛そうな樹生の顔。初めて見せる険しい表情。

家にいるときの樹生はいつもだらけててだらしくなくていい加減で気が抜けてて、ちっとも父の威厳なかなかった。かつこいいミュージシヤンの顔なんて見たことも聞いたこともない。眉が下がって眠そうで、パジャマかスエットか、他に着るものないのかつてくらいおっちゃんくさくて。

そのどれとも違う樹生の真剣な目に、かのんはたじろいだ。

言葉にしてはいけなかったのだ。激しく後悔したがもう、手遅れなのだろう。

伊織高臣。

その人の名が、確実に井上の家族たちを切り裂き、ずたずたにしていくのが感じられた。

「ごめん……なさい」

目に涙をためてかのんはつぶやいた。その彼女を見て、はつとしたように樹生は唇を噛んだ。息を無理矢理飲み込む。きっとものすごく複雑な感情をも、一緒に。

「いや、ごめん。そうじゃねえんだ。かのんがおれの娘であることで、人に騒がれたり注目されたり、そういうのが心配なだけなんだよ。だから公立じゃなくて私立に入れた。おまえにはできるだけ静かな生活をさせてやりたい。それがおれたちの望みなんだ。学校にはおれが文句を言ってくる。止めるなよ、これはおれの問題だ」

「ダメ！言わないで！」

今度はかのんが必死になって声を上げた。父も母も驚いた顔で彼女を見つめた。

「もう、関わりたくないの。この人だって、このコンサートが終わればもう学校には来ないでしょ？それで終わりにしたいの。イヤなの。キライなの。こういうタイプ苦手で」

かのんは自分の感覚のせいにとしようと、今時の言葉で何とか言葉をつないだ。そう、嫌いなだけ。こんなナル、キモイだけ。手なんか握ろうとしたんだよ。止めてよね。ナル系バンドのボーカルでもないくせに何気取ってんだか。歳考えてよ。気持ち悪いよ。

心にもない汚い言葉を、両親に向かって並べていった。今時の若者を精一杯演じた。心のどこかで感じた危険信号なんて、絶対に悟ら

れてはいけない。きっとそれは二人を酷く傷つけるものなのだろうから。

かのんは繊細な直感で、そう思った。だからこそ、卑近な言葉で高臣をおとしめようと思ったのだ。

美沙子は黙ってかのんに近づくと、その両手をそつと握った。

「疲れたでしょう？お風呂入る？」

こくんとわずくと、かのんは素直にリビングを出て行った。樹生は無言だった。それが自分を抑える精一杯だったのだろう。

かのんはなぜか、ありがたいなと思った。そう、本当に心から。

かのんが部屋を出ようとドアを開けたとき、樹生はこらえきれずに椅子にへたり込み、頭を抱えた。身体がほんの少し震えている。

彼女はわざと気付かないように、そつとそこから離れるように出ていった。

長い長い夜は、まだ終わりそうもなかった。

#7

「伊織くんのこと？知りたい？知ってどうするの？もう日本じゃ終わってる人よ。そりゃあのルックスでロン＝ティボー入賞で、政治力も営業力もあるからそこそ客は集まるでしょうけど。まあ、入賞した時点で凱旋公演でもすればかなり人気は出たでしょうけどね」

和奏わかはそう言うと、カノンのために新しく開けた外国製のジュースをそつと差し出した。

「別に知りたいわけじゃないけど、何でお父ちゃんがあんなに怒る

のかな、って。こんなことと和奏ちゃんにしか訊けないし」

神崎和奏はかなり年上のかのんの友人だった。友人というか、本当のことを言えば母の美沙子の音大時代の同級生。今は都心のマンションに恋人と住んでいる。今時といえはかつこいいけれど、何の保証もないのよね、和奏はそう言つてよく笑った。

「太郎先生は？今日も遅いの？」

「太郎ちゃんもねえ、それなりに仕事忙しいらしいよ。G大の若き准教授。新進現代音楽作曲家。顔だけ見てるとそうは思えないんだけど肩書きはすごいからねえ」

思わずかのんは、和奏と顔を見合わせて笑った。

太郎の姿を思い浮かべる。丸顔であごもないくらい丸々とした体型のんびりとした口調にほんの少しお姉言葉が入るのがおかしくて、かのんはよく美沙子や樹生には黙って、坂峰太郎とこの神崎和奏の部屋に遊びに来ることがあった。

子どもの教育上よくねえって樹生は怒っては見せたけど、太郎とはそれこそG大時代からの大親友で、家族と言つていいのなら彼らとはそういう家族ぐるみの付き合いだった。

「有名だったわよ、G大時代の伊織くんと言えば。彼ね、フランス系のクォーターでね、エキゾチックな顔立ちに、国内のコンクールは総なめの実力に。もてたもてた。入学当時は女の子ひきつれてさ、よく構内を練り歩いてたもの」

「お父ちゃんとは、井上樹生とは親友だったって」

「誰がそんなこと言つてたの？わかった、伊織くん本人でしょ。あ

の人ね、思いこみ激しいから」

「そう……なの？関係ないの？」

「まあ、たっちゃんとはたっちゃんてG大の有名人ていうか問題児だったし、彼もまあよくいろんな人に知られてたからねえ」

和奏は自分用にワイニンググラスをテーブルに置くと、そっと茜色の液を注いだ。

好きなときに頼まれて講師をしたり、どこかのラウンジでピアノを弾いたり。暢気な生活よね、と自嘲気味に言うこともあるけれどもかのんにとってはとても頼りになる憧れの人だった。

首のあたりで切りそろえられた黒髪がエキゾチックで、外国客には好評なのだと、自分からそつと教えてくれたこともあった。くつきりとした大きな瞳がまるで日本人形のように、彼女のイメージを形作っていた。

おとなしめ、もつと言えば地味めな美沙子とは対照的で、なぜ和奏と親友なのか、かのんも不思議に思ってたことがあった。太郎と一緒に暮らし始めてもう十年以上になるという。それでも結婚は考えてないわと笑う。

「だってそれを言ったら、太郎ちゃんとたっちゃんなんてもつと全くイメージ合わないじゃない」

確かにそうだけど。

坂峰太郎はG大学院作曲科を首席で出たバリバリのクラシック畑だし、お父ちゃんと来たら、大学の授業がとにかくクライで課題はやらないし練習もしないし、試験にはいつも遅刻だったと、これも何かの雑誌に書かれていた。

なんで音大なんかに入ったのと訊くと、

「じじいの野郎が、大学にも入れねえヤツが職業音楽家になんぞなれっかってキレイがって。無理矢理だよ」

父はそういつて毒づいたが、おじいちゃんは何だかんだ言ってもお父ちゃんの夢を応援してくれたんだね。かのんの言葉に照れくさそうに笑った顔が忘れられない。

「あの頃特にね、大学構内でたっちゃんと伊織くんに会つのは至難の業だつてもっぱらの噂だつたのよ」

少し酔いが回ってきたのだろうか、ほんのり頬を染めた和奏はぞくぞくとするほど美しかった。かのんはほんのちよつとうつとりその横顔を見つめた。

「どうして？」

「だって、たっちゃんは外のライブハウスとハウスバンドとよその大学のビッグバンドにはっかり顔を出していたし、伊織くんはもうすっかりコンクール荒らしで有名で、もうすぐに留学するだろうと言われていたし、偉い先生にばかりついて回っていたから」

「太郎先生は？」

「結局は、太郎ちゃんがいけないのよねえ。彼がああ二人を結びつけてしまったんだわ」

聞こえないと思ったのだろう、吐息のようなささやき声。でもかのんにはその言葉がなぜかくつきりと耳に飛び込んできた。

「ねえ、本当に伊織って人はお父ちゃんと……」

「たっちゃんに、お父さんにちゃんと訊きなさい。私が言うことじゃないわ」

「でも、お父ちゃんは何も言ってくれない」

下を向いてしまったかのんに、和奏はそつと髪へ手を置いた。

かのんの栗色でストレートなさらさらの髪。

寝ぐせのような樹生とも、直毛で量の多めな美沙子とも違う。

まるでハーフのような陶器の肌と切れ長の瞳。かのんの美しさは和奏とは対照的だった。

性格だけはお父ちゃんに似たかな。ふざけてそう言うことはしよっちゅうだったが、

かのんが井上樹生の娘だと知ると、誰もが驚いた。

「かのんちゃん、たっちゃんはあなたがかわいくて仕方ないのよ」

和奏の微笑みに、なぜかかのんはくすぐったい気持ちで目を上げた。知ってるよ、って言いたかった。今までのかのんならすぐに言えた。でも、歯車は少しずつずれてきているのだ。それはいくらかのんでさえもわかっていた。

すべては……あいつのせい。

かのんはまるで自分のジュースにもアルコールが入っているかのように、苦みさえ覚えるその液体をぐいと飲み干した。

8

「本当に大丈夫なんでしょうか。ボクはあとでしこたま井上くんに叱られそうですが」

太郎はそう言うと、ふくよかな身体をわずかにすくめた。かのんは心細さから思わず太郎

の手をぎゅっと握ると、唇を噛みしめた。後ろから、心配そうな恭平の顔。今日は珍しくご自慢のアルトサックスを背負ってきてはいなかった。著名な音楽家に会えるとなれば、まず自己アピールを忘れないくせに。だが、彼はかのんの背中をじっと見つめるばかりだった。

「だいたいさあ、何で恭平までついて来んのよ。関係ないでしょあんたには」

「だって、電話もらったときのおまえの顔、普通じゃなかったもん」

ふてくされたように恭平がつぶやく。その言葉の奥に隠された優しさに気付いて、かのんは黙った。

あのコンサートからしばらくして、かのんはまた相原に呼び出された。無言で差し出される携帯電話。二十代のくせにデコレーションつき？そんなことを気にできたのも一瞬だった。

電話の向こうから聞こえてくる機械的な声。伊織高臣だった。

リハーサルをG大ホールでやるから見に来ないかという誘いだっただけ関係ありませんと即切りしようとしたかのんに、見せたい物がある、と高臣はささやいた。

…樹生には内緒だよ…

その言葉に吸い寄せられるように、かのんは行くことを約束してしまった。あとで怖くなり断ろうとしたが、とても電話をかけるだけの、というか、相原に連絡先を訊くことすらとてもできそうになかった。

思わずかのんは、G大なら、と坂峰太郎を呼び出した。多忙だろうに、彼は快くボディガードを引き受けてくれた。もっとも腕力に關してはどちらもたいして差はないだろうが。恭平までついてくるとは思わなかったが、とにかく三人で大学でも一番価値のあると言われているピアノが置いてある小ホールへと向かっていった。

もう高臣はピアノを弾き始めていて、指馴らしなのか小難しそうなエチュードをこれ見よがしに高速で練習していた。

ふと、自ら引き寄せた観客たちに気付いたのか、手を止めてこちらを振り向いた。

相変わらず色白の整った顔立ちに、ずっと切れ長の美しい瞳。陶器を思わせる肌。

とても三十も半ばを過ぎた、父や太郎と同年代の男性には見えなかった。

「僕は、井上かのんを招待したつもりだったのだけれど」

冷たく言い放つ。それに太郎はむっとして言い返した。

「お久しぶりです伊織くん。凱旋コンサートをされたそうで、ずいぶん急な話ですね。全

国ツアーはなさらないんですか？」

いつもの穏和な声とは違って棘のある言い方で、太郎は高臣をにらみつけた。

仲が良かったのではなかったのか。ふとかのんの胸に思いが浮かぶ。どんな間柄だったんだろう。和奏の話だけでは到底想像がつかなかった。

「全国へは、このあと回る予定でいるよ。日本でのCD制作の話も進んでいる。これからはこちらへ活動の拠点を移そうと考えている

んだ」

「なぜ！？なぜ今になって？」

珍しくむきになって、太郎は大声を出した。かのんも恭平もその声に思わず圧倒された。

「君の許可が要るのかい？G大作曲科坂峰太郎准教授。君も偉くなつたものだね」

人の気持ちを逆なでするような声色。太郎も、少し息を整えるとかのんから離れて小声になった。まるで彼女には聞かせたくないかのうように。しかし小ホールは、スタッフの他に誰も人はおらず、いやがおうにも太郎の言葉はかのんの耳に入るだろう。それでも、太郎は一步前へと踏み出した。

「井上くんには会ったのですか？」

「いや、まだだ。そのうち連絡を取ろうとは思っているけれど」

言いかけた高臣をさえぎるように、太郎は言い放った。

「止めてください。君が井上くと話すことは何もないはずですよ。もうこのままフランスにお帰りになったらどうです？君が日本に帰ってくる理由がない！」

温厚な太郎らしくもない。かのんがそれまで握っていた太郎の温かい手は、今は固くこぶしで握られている。代わりに恭平がおずおずと、かのんの腕をそつと支えた。

「君に命令される筋合いはないね。僕は僕の意志で日本に帰ってきたし、こちらで活動したいと思った。ただそれだけだ」

「じゃあなんで、かのんちゃんにつきまとうんですかー!」

太郎の叫び声に、高臣は薄い唇をゆがめて、冷たく微笑んだ。

「言わなければわからないとでも？井上かのんは樹生の娘だ。だからに決まっているだろう？」

「君とかのんちゃんは何の関係ない!」

激昂する太郎をしり目に、高臣はピアノの椅子に座り直した。おもむろに弾き始める美しい旋律。もちろん、あの曲だ。

夢遊病者のようにふらりとかのんがピアノに向かつて歩き出した。太郎も恭平もそれを止めることができずにいた。まるで何かの人形のように、可憐なかのんがその白い指で漆黒のピアノを触る。自分の意志ではない。危険信号はさつきから鳴りっぱなしだ。それでもかのんは自分の足も手も、とても自分自身では制御することができなかった。

この曲には、それだけの魔力がある。

「クーブランの墓」とは作曲家モーリス＝ラヴェルが1914年から1917年にかけて作曲したピアノ組曲であり、ラヴェル最後のピアノ独奏曲でもある。全部で6曲からなり、プレリュード（前奏曲）、フーガ、フォルラーヌ、リゴドン、メヌエツト、トゥカータの順からなる。大戦で亡くなった故人へと捧げられた美しい佳曲。そして、ラヴェルが愛したバスクの血を引く母への慕情。

でもかのんにはそんな難しことは何一つわからなかった。わかるこ

たとえば、この前奏曲の高まってゆく旋律のぞつとするような美しさだけ。

高臣はプレリユードの途中でふっと演奏を止めると、かのんを見つめた。そして小さく折りたたまれた五線紙のメモを彼女に渡した。

「これがこの曲の原題だよ。譜面を探してみればいい。きっと君も気に入ると思うよ」

冷たく響く声色は変わらない。しかし、その瞳は優しくかった。かのんにはそう思えた。

震える手でメモを受け取ると、かのんは背を翻してその場から立ち去った。

口々に、残された太郎と恭平が名を叫ぶのにも返事もせず、かのんはホールを出てロビーの柱に背中をつけた。あわててメモを開く。

「Le Tombeau de Couperin」と、おそらくフランス語で書かれた原題。そしてその裏にはホテルの名前と部屋番号。携帯の無機質な数字の羅列。

なぜだかわからないけれど、かのんはその情報をあわてて自分の小さな手帳へと書き写した。もらった五線のメモは粉々に破いた。近くのゴミ箱に捨てようとしたところで恭平が駆けよってきた。

「どうしたんだよ、井上！さっきのメモ何だったんだ？」

何でもない、ただの曲名、もう捨てたし。かのんは自分の言っている言葉が自分で一番理解できなかった。

もう会ってはいけない。あの曲を聴いてはいけない。あの人は危険だ。

わかっているのに。

かのんは恭平の手を取ると、出口に向かってどんどん歩き始めた。何事もなかったかのように、何も聞かなかったかのように。

「今日も野菜うどん？まあ、好きだからいいけど」

かのんは夕食の手伝いをしながら母に向かって口をとがらせた。何と言っても食べ盛り、焼き肉、フライ、唐揚げの類はどうしても欲しいところだ。

「ごめんね、お母ちゃんあんまり食欲なくて」

美沙子はそつと微笑んだ。もともとほっそりとした身体が、このところさらに痩せてきているようで、かのんはあわてて母を見つめた。

「大丈夫、お母ちゃん！どつか悪いの？」

「そうじゃないのよ。あとでかのんにはちゃんと話すから」

言いながらもしんどそうにテーブルの椅子に座り込む。顔が青白い。かのんはあわてて母のところへ駆けよろうとしたが、ふと思いついて台所の引き出しを開けてみた。やっぱり。

薬局の袋が入っている。いつもの貧血がまた酷くなったのだろうか。かのんは袋を振り回すと「キライだからってレバー食べないから！」と、小言を言いかけた。ふと、何かが床に落ちた。薄桃色の診察券。

「何これ。いつもの中村医院じゃないの？」

かのんはその小さく書かれた文字を読んだ。上沢…産…婦人科？

「お、お母ちゃん!？」

「予定日、十月の下旬なんですって」

かのんはその切れ長の美しい瞳を大きく見開いた。そして、やったーと叫び、美沙子に抱きつこうとしたところで必死に自分を抑えた。

「まだ大丈夫よ、かのんをだっこしたって平気」

美沙子の目が優しくに笑う。かのんはそつと彼女の膝に頭を載せた。

「男かな、女かな。いつになったらわかるの？」

「かのんはイヤじゃないの？お母ちゃんはそれが一番心配だったのよ」

優しい声が頭の上から降ってくる。ほんわかとしたいい気持ち。

「どうして？こんなうれしいことないじゃん」

「だってあなたはもう十五になるでしょう？ちよつとなんて言えないくらい離れちゃったし、思春期のあなたには複雑な思いをさせてしまっんじゃないかって」

かのんは答える代わりに首を振って見せた。家族が増えるんだよ、うれしいに決まってるじゃん。小さくつぶやいた。

「お父ちゃんはもう知ってるの？」

ふふっ、と笑うと美沙子は目を伏せた。鈍感で大ざっぱなお父ちゃ

んが自分から気づくはずない。

「どうやってびっくりさせてやるうか。メールじゃもつたないよね、反応が見たいし。サプライズパーティーでも開いてみせようか」
何がいいかなあ、真剣に考えるかのんを母は優しく見守る。

「そうだ、確か写真がもらえるんだよね。もうもらった？」

美沙子がカバンから一枚の白黒画像を取りだした。二人でのぞき込む。

「この小さいのが、赤ちゃんなの？何か人間に見えない」

曲玉みたい、そんな感想まで付け加えてかのんはその写真に熱心に見入った。

「もうね、とくとくって心臓の音まで聞こえるんですって。お母ちゃんにはよくわからなかったけど」

遠慮がちに美沙子がそう言う。十五も離れていればどちらも一人っ子のようなものだ。

病院のシステムも感覚も、前とは違ってしまっただろう。それに、前のときは…。

「ねえ、私那时的の写真もあるの？」

おずおずとかのんは口にした。もちろん生まれてからの写真はそれこそ、両方の祖父母がこれでもかと撮り合っていたから、イヤになるほどアルバムにあふれている。

でも、こんな生まれる前の写真なんて。

「……ごめんね、かのんの頃はこんなサービスがなかったのかも知れない。よく探してみただけど」

なぜか美沙子は、口ごもりながら下を向いた。

その瞳に翳りがあるのにかのんは気づいてしまった。

訊いてはいけないこと。それはこの家にいくつかある。賢しい彼女のことからそれをとつくの前に察してはいた。だからわざとかのんは、じゃあお父ちゃんへの作戦でも立てますか、と大声を出して明るく振る舞った。

その代わりに美沙子は、よれてはいたけれど大事にしまっていた母手帳を取り出した。

「井上かのん」の文字が表紙に書かれている。

「あたしの名前決めたのだあれ？ やっぱりお母ちゃん？」

そう言うかのんに、美沙子は内緒話でもするかのようにささやいた。

「それがね、お父ちゃんなの」

「うそっ！」

「意外とロマンチストなのかもね」

くすくす笑いながらその手帳をめくる。難しすぎてかのんにはわからない。でも一つ目につくのは、

Rh-O型の表示。珍しいねと、誰もが口にする。

「お父ちゃんもお母ちゃんも+なのにな」

「珍しくて、すぐに覚えてもらえるわよ。大人になったら得するかもね」

何にでも笑顔に変えてしまう母は、そう言ってまた微笑んだ。

#10

「なんか井上が笑つてるとき、悪巧みしてるようにしか思えねえんだよな」

終礼が終わった教室で、わざわざ後ろを振り向いてまで恭平がへらず口を叩く。

あんたねえ、怒ったふりをするけれども自然と笑顔になってしまうのを、かのんは抑えきれなかった。

「何があつたんだよ、教えろよ」

「あんただけには絶対教えない」

「井上樹生の新アルバム発表か？」

目を輝かせて恭平が声を上げる。こいつはいつもそんなことしか考えてない訳？

呆れてかのんは大きなため息をついた。

「あのねえ、お父ちゃんの仕事のことはあたしにはわかりません。興味もないし。あんたが直接訊けばいいじゃない」

訊いていいのかよ！本気にしかける恭平の頭を軽くこづく。
あんたなんか相手にもしてもらえないって。お父ちゃんは仕事を家には持ち込まないんだから。

「けどさ、最愛の娘のクラスメートって言えば、少しはさ」

「最愛の娘、ねえ」

その愛するはずの娘に、どうして父は音楽をさせなかったのだろうか。

かのんと名付けたのは樹生だと母は言った。せめてピアノだけでも習っておけばよかったんだろうか。

何だか自分が名前負けしているような気がしてならなかった。

「おまえだつてさ、それだけ環境に恵まれてるんだからミュージシャンになんかすぐなれるだろうに」

いいよなあ、いつもなら聞き流す恭平の言葉はなぜか今日はかのんの胸に突き刺さるよう感じられた。

黙ってしまった彼女に、恭平はあわてて言葉をつないだ。

「どうしたんだよ、さっきまで浮かれてたと思ったら黙っちまって」

「恭平はさ、どうしてうちのお父ちゃんの音楽が好きなの？」

ストレートに訊かれて、今度は恭平がぐつと言葉に詰まった。それからゆっくりと考え話し出す。

「ダイバージェンスってさ、ちょっと聴くとけっこう今時の音楽に媚びてる感じがするだろ？旬の若手とコラボしたり、リズムを大幅

に変えて見せたり。でもさ、芯は違うんだよな。井上樹生のサックスはぶれない。オレは本当のことなんてよくわかんないし、これだって先輩の受け売りなんだけどね。みんな言うんだ。井上は実際のところ、フュージョンなんかじゃなくてごりごりのビバップがやりたいんじゃないかって」

「ビバップ、って？」

「簡単に言えば昔ながらのジャズだよ。生のリズム隊で、生ピアノがはねてて」

それまでおとなしく聞いていたかのんが首を振る。うちのお父ちゃんは大のピアノ嫌いだよ、と。

「それが不思議でならねえんだよ。こんなさ、自分で認めるのも悔しいけど素人のオレでさえ、井上樹生には生が合うって思ってるのにさ、どうしてもピアノとはやらねえんだろって」

「有名な話なの？」

ジャズを聞きかじってるヤツなら誰でも知ってるよ、井上の生ピアノは嫌いだ。

なぜか、かのんに気を遣ったのか、恭平は声を落とした。

ふとかのんの頭に、あいつの顔が浮かんだ。血の通っていないビスケットのような肌。生のピアノの音なんて、カノンはまともに聴いたことなんてない。母の弾く音でさえ聴く機会などなかった。

「ねえ、恭平！あんたクラシックも詳しいよね？」

突然言われて面食らっている彼を引っばると、かのんは学校の外へ

とどンドン歩いていった。

「急にクラシックのCDって言われたって、オレにもわかんないよ。ここに置いてあるのはほとんど輸入盤だし」

「ホントにもう、役立たず！」

恭平が呆れているのにもかかわらず、かのんは口をとがらせた。この街で一番大きいCDショップ、ここにならあるはずだ。

メモを見なくても原題の雰囲気は覚えている。Le がついてたんだ。

それでどこかにあの文字が。

細かな背表紙を一枚一枚目を細めて見ていると、年配の店員が声をかけてきた。

「何をお探ですか。そこにあるのはモーリス＝ラヴェルの作品ですよ」

振り返ると、ニコニコと満面の笑みの初老の男だった。かのんはなぜかほっとした。

「『クープランの墓』ってピアノ曲を探しているんです」

「おい！」

恭平がかのんの制服の袖を引っばる。どういうことだよ！ささやく声で抗議するのにも構わず、彼女は店員に熱心に問いただした。

「それはまたずいぶん詳しいんですね。お好みのピアニストはいらっしゃいますか？」

その曲はボレロやパヴァーヌなどと違って、そうは知られていないのだろう。

題名を口にしたかのんに店員はうれしそうに答えた。

「……伊織、高臣」

今度こそ本当に、恭平はかのんの腕を引っ張り、彼女の行動を止めようとした。

「いいかげんにしろよ！あいつとはもう、関わらないって決めたんだろ？」

「……」

かのんは押し黙ったまま、店員の手の動きを眺めていた。

「すみませんねえ、今在庫を切らせてしまつて。お取り寄せしませうか？」

「……！？本当に出てるんですか？伊織高臣のCDなんて」

つい口から本音が滑り出す。日本じゃ終わった人よ、和奏の言葉が思い出される。

「ええ、外国のレーベルですがね。伊織高臣と言えばラヴェル演奏家として世界的にも高く評価されていますし、まあなかなか日本では演奏しませんから知名度は低いですがね。」

お嬢さんよくご存じですね。ピアノ専攻の方ですか？」

形相をくずしてうれしそうに男は言葉を続けた。思いがけなくマニアクな話ができることにうれしさを隠せないのだろう。ここは老舗で有名な楽器店だし、彼自身も相当なクラシック好きに違いない。

「じゃあ、あの、この曲の楽譜ってありますか？」

かのんの行動が理解できないふうで、恭平が大きなため息をつくのが目に入る。

どうしてここまでこの曲にこだわるのか。それはかのんにすらわからなかった。

地下の楽譜売り場に連絡を入れておきましょう、店員の言葉に見送られて二人はエレベーターに乗った。

なぜか無言だった。

もう恭平にもかのんを止めるだけの気力はなかったし、彼女は彼女で、何かに突き動かされるように無意識に行動していた。

薄い、ベージュの輸入楽譜。こんなに薄いのになんて高いんだろう。そもそもかのんは楽譜なんて読めやしない。でもその楽譜をしっかりと胸に抱き、彼女は目をつぶった。

まるであの日のコンサートホールを思い出しているかのように。

1 1

かのんは自分の部屋でいつまでもそのうす茶色の楽譜を見つめていた。

Le Tombeau de Couperin

意味もわからない。もちろん読めない。開けたところで意味のない記号が並んでいるだけ。

でも父も母も、和奏もそして太郎も、みんなこの楽符に意味を込め、音楽を奏でている。

恭平だってそうだ。あんなにおちゃらけていたって、一度練習を見に行ったときは年上の学生に混じって、必死に譜面を追いかけていた。

そして、伊織高臣。

どうしてあんな音が出るんだろう。キラキラした粒が転がる極彩色の世界が目の前に広がって、かのんは別の空間に連れて行かれる。なぜあたしだけ、この仲間に入れてもらえなかったんだろう。

音楽の時間の合唱とは違う。あんな音じゃない。ふざけて作ったみんなの合奏曲とも全く違う。

音が一つ一つ、胸に直接響いてくる。

今からお母ちゃんに習えば、あたしにもピアノが弾けるようになるんだろうか。

でもどうして誰もそれを勧めてはくれなかったんだろう。

このことは口にははいけないこと、幼いかのんが覚えた初めての秘密。

言えば誰かが悲しい顔をする。だから何も気づかないふりをしてずっと来た。

音楽に興味がないと言い続け、バレエ部に入って仲間とはしゃいで、漫研で漫画本を堂々と回し読みして。

階下からかのんを呼ぶ母の声。

そうだ、今日はこんなこととしてられない。あの鈍感なお父ちゃんにいい加減大事なことを知らせようと、ごちそうを作ったんだ。かのんは頭を振ると、あわてて下へと降りていった。

「なんだ、なんだ？今日はなんかの記念日か？かのんの誕生日じゃねえし、おれのもねえよなあ」

テーブルの上に並べられたごちそうに、樹生は不思議そうな表情を

した。ツアーとツアーの合間、今月は単発で都内のライブハウス程度しかやらないよと言っていた。少しが時間が取れるのだろう、帰りもこのところ早かった。

ごちそうと言っても、唐揚げ（これはかのんのたつてのリクエスト）と、マカロニサラダにミモザサラダ。ひじきの煮たのと揚げ出し豆腐は樹生の好物。その他の色とりどりの深めの皿に料理が並ぶ。何だかちぐはぐなメニューは、それぞれが好きなものを主張した結果。それにかのんが唯一失敗しないで焼けるシフォンケーキを添えた。

ふふつと、かのんと美沙子が顔を見合わせて笑う。

「今夜はね、大事な発表があるんだから。お父ちゃんよく聞いてよ！」

厳かにかのんがそう告げる。その言葉によくわからないなりに樹生は背筋を伸ばして椅子に座った。

「ねえ、やっぱりお母ちゃんから言っ？」

小声でかのんがささやく。それに、あなたが言っているのよ、と美沙子が笑顔で返す。

「なんだよ、もったいつけやがって、早く言ってくれよ。言っとくがおれは何にも悪いことはしてねえぞ！」

すわりが悪いのだろう、樹生が二人の顔を交互に見つめ、不安げだ。

「あ・の・ね、予定日は十月だって」

きよんとした顔で樹生が固まる。言っている意味が伝わらないの

だろう。

予定日？何のことだ。表情が何よりもそう物語っていた。

「もう、お父ちゃんはやっぱ鈍感なんだから。このかんの様に、妹が弟ができたんだよ！ちよつとくらい喜びなさいよ！」

かのはなぜか胸を張り、得意げに言った。

さあ驚きなさいよ、ねえお父ちゃん！そんな気持ちを思い切り込める。反応が楽しみ。

がたん。

しかし樹生の反応はかんの思い描いていたどの行動とも違った。青ざめた顔で立ち上がると、じつと美沙子を見つめた。つねに笑顔を絶やさない彼女が、思い詰めたような樹生に怯えて黙った。

「本当なのか、美沙子…さん」

二人を見比べていたかのが、わざとにぎやかな声を出す。

「やだなあ、何二人して固まってんのよ！そこまで驚くかなあ。しかも美沙子さん？さん
付けですか？お父ちゃんあのねえ…」

かのは声が聞こえなかったかのように、樹生は帰ってくるまで羽織っていた薄手のパーカーを手に取った。
そのままダイニングを出ようとする。

「ちよ、ちよつと！どこ行くのよお父ちゃん！」

思わずかのは背中に向けて叫んだ。

「出かけてくる」

「これだけのごちそう、準備にだってけっこう時間かかったんだよ！」

「頼む、ほつといてくれ！」

かのんが伸ばした手は、もう少しのところまで樹生には届かなかった。彼は硬い表情のまま、家を出て行った。

「お父ちゃん！」

かのんの叫び声だけが、誰もいない廊下に響き渡った。

1 2

かのんはやけになつて食べ続けた。好きなものをせっせと。今夜はダイエットなんて考えるもんか。

この生クリームたっぷりですれにフルーツまで飾り付けたカノン渾身の作、超スペシャルシフォンケーキだつて一人で全部平らげてる。

口に運ぶうちに、彼女の目に涙がにじんできた。

理由なんてわからない。またあたしの知らない大人の事情？でも、あんなお母ちゃんを傷つけるような態度なんて。

美沙子は微笑みを取り戻して、小鉢や深皿にラップをかけ始めた。

「かのん、そのくらいにしときなさい。大丈夫よ、明日も食べられる物ばかりだから」

「そういう問題じゃない！」

かのんの口調は怒っていたけれど、本当は声を上げて泣き出したいくらいだったのだ。

「あたしが悪かったって訳？もっと別の言い方があったって言いたいのお父ちゃんは！」

美沙子はそつと首を振った。きつと驚きすぎたのよ、心の準備ができてなかったんでしよう、って。

あたしのときもそうだったの？あんなふうに驚いて、ちっとも喜ばなかったの？本当はそう訊きたかった。でも、何かが必死にかのんを引き留めた。訊いてはいけない。きつとそれは口に出してはいけないことなのだ。

「どうしてお母ちゃんは、笑ってられるの？悔しくないの？」

「全然平気よ、お父ちゃんを信じてるから」

かのんはその言葉に、箸を止めた。そして一緒になって残り物を冷蔵庫にしまい始めた。

「かのんはもう中学三年生で、こんなに大きくなっちゃったでしょう？このまま一人っ子なのかなってみんな何となく思ってたのよね。まさか今さら小さい赤ちゃんがこの家に来るなんて、想像もつかないことだったんじゃないの？お母ちゃんだって最初はびっくりしたんだもの」

「十五年、その間に妹とか弟をつくろうかって話、なかったの？」

かのんにしたらかなり微妙な質問だった。思春期まつただ中で情報だけはいくらでも入ってくる。親のそういった行為に反発する子どもだっているだろう。でも、そういうことを抜きにして、純粹にかのんは訊いてみた。

「二人目はできにくいだろうって言われてたの。だから余計驚いたのね、きつと」

男と女ではこんなにも受け止め方が違うのだろうか。だったらもつと喜んだっていいだろうに。かのんは口をとがらせた。

「ふふつ、お父ちゃんは照れ屋で素直に出せないだけなのよ」

世の中の井上樹生ファンに、とりわけ恭平にはこんな姿見せつけてやりたい。

いつも彼らはなぜか無条件に樹生を信奉しているのだから。

照れ屋でぶつきらぼうでだらしなくていい加減でおやじで、でも憎めない。

ようやく笑顔の戻ったかのんは、洗い物を手伝い始めた。

夜も十一時を回ったところだろうか、無理やり母を休ませるとかのんは携帯をいじっていた。

まだ返信し切れてないメールがいくつかある。ほとんどが元氣ー？とか宿題終わった？とか。

まあこれも一種の社交辞令なんだろう。無意識に親指を動かす。

ふと、聴き慣れない音。ああそうか、家の電話の呼び出し音だ。

気づくまでほんの少しかかってしまい、あわててかのんは立ち上がった。

和奏からだった。

「ごめん、かのんちゃん？まだ起きてた？」

「まだって、バリバリの十一時ですよ。寝てる訳ないじゃん」

思わず二十も年上の友人にタメ口。ちょっと言い過ぎかなと反省する。

「たっちゃんに何かあったの？」

「たっちゃんって、お父ちゃんそこにいるんですか？」

声が大きくなる。その辺の飲み屋にでも駆け込んで飲んでるとばかり思っていたのに、まさか太郎ちゃんとかまで行ってたなんて。

「もう、酔いつぶれちゃって大変。まあもともと飲める人だけど、これだけ飲めば明日は仕事にならないわね」

「ダメです！明日は確か打ち合わせでどうしても大阪のスタジオに入んなきゃって言ってたから」

台所の壁に掛けてあるホワイトボードには、殴り書きの樹生の文字。タクシーで迎えに行きます、と言うかのんに、じゃあこっちから送るわよと和奏は笑った。

「ここまで荒れるには、何かケンカでもしたの？人んちのことに首を突っ込むつもりはないけど」

穏やかな口調に、逡巡しながらもかのんは今夜の出来事をかいつまんで和奏に伝えた。

誰かに聞いてもらいたかったのかも知れない。

今夜のことをかのん一人の胸に納めておくには少々重すぎたのだ。
一瞬の沈黙のあと、和奏は、おめでとう、よかったじゃない！とう
れしそうな声を上げた。

沈黙に気づかないようなかんじゃない。

でも、何だか初めておめでとうと言われ、やっとうれしさがこみ上
げた。

「たっちゃん、鈍感で素直じゃないから。究極の照れ屋よね、あそ
こまで行くと」

わざとはしゃぐ声に、それでもかのんは和奏の心遣いがうれしかっ
た。

玄関先に車の止まる音がした。かのんはあわててドアを開ける。

和奏と太郎に支えられて樹生が降りてきた。足元が危うい。これは
そうとう飲んだに違いない。

「ちよっとお父ちゃん！みんなに迷惑かけて。ごめんね、和奏ちゃ
ん」

部屋に運び込むのを太郎に任せると、和奏はかのんの腕を引っぱっ
て耳元でささやいた。

「いいこと、かのんちゃん。たっちゃんは、樹生はあなたのことが
一番かわいいのよ。本当に愛してるの。そのことだけはどうか忘れ
ないで」

はつとして彼女の目を見つめる。優しさをたたえた黒い瞳。かのん
はわからないなりに也和奏の温かな言葉に頷いた。

皆が帰り、今度はダイニングでぐでぐでにテーブルに突っ伏す樹生を、かのんは起こしにかかった。

「ほら、明日は大阪に行くんでしょ？お風呂、無理そうだね。明日早く起きてシャワーでも浴びて。お父ちゃん！」

樹生が顔を上げる。酔っぱらって意識もどこかに吹っ飛んでいるのだとばかり思っていたのに、彼の目は真剣だった。

「かのん、おまえはおれの娘だ」

「はいはい、わかってますよ」

酔っぱらいの言うことなんていちいち聞いてらんない。かのんは本能的に心にバリアを作った。何も言わないで。あたしは今日、一番うれしいニュースをお父ちゃんに伝えたかっただけなんだよ。

「おれはおまえが一番かわいいんだ。おれの大事な娘だ、わかるか？かのん」

「だからわかってるって」

「何があるって、おまえはおれの……」

それだけ言うと、また樹生はテーブルに頭をつけてしまった。悔しいことに寝息まで立てている。

「…何よ、それ。お父ちゃんのバカ」

かのんは、小さくため息をついた。

もう、それ以上は考えてはいけない。警鐘が頭の中に鳴り響く。かのんは無理やり立ち上がると、タオルケットを取りに寝室へと向かった。

13

「どついう気の変わり様だよ。井上がダイバージェンスのチケット取ってくれるなんて」

別に、と恭平に気のない返事をする。初めてかのんが樹生にしたおねだり、みんなで父のライブを見に行きたいという声に、樹生は複雑そうなくすぐったそうな顔をした。

幼い頃はそれこそ、どこへ行くにもついて行って楽屋で遊んでいたのに。今はそれすらすることもなくなつて久しい。メンバーもいつも新しく変わるからかのんなど知らない人間の方が多いだろう。ずっと父のマネージメントをしてきている矢崎さんだけは変わらないかな。

小さいときはとにかくうるさいところだなあとしか思わなかった。父も家でさえ自分のグループのCDなんかかけやしない。かのん自身も一枚も持っていない。せめてこれを機会に買ってやるか。そんな気までも起きてきた。

あれから樹生は、せっかくのごちそうを台無しにした非礼をわび、飲んだくれた迷惑をわび、それから病院にはできるだけついて行くからと、できもしない約束をした。

その表情があまりに真剣で、かのんはついくすくすと笑い出してしまった。

目立つよー、井上樹生が産婦人科なんかいたら。週刊誌に書かれたらどうすんの？ からかって彼女がそう言つと、おれにそんなネー

ムバリューがあればプール付きのやな、こつシャンデリアかなんか下がつとつてるもつと豪邸に住んでるよ、と言いつ返してきた。それでも皿なんか洗ってみせたりして、樹生は彼なりに反省しているようだった。

「ねえ、今度はなんて名前にするの？」

「男か女かわからへんのに、今から決められつか」

父は照れてるのか、視線が下向きのままだ。

「じゃあ、どうしてあたしはかのんって名前にしたの？」

そう訊くと樹生は手を止め、顔を上げた。

「音楽がなければおまえは生まれなかった。だからおれはおまえに音楽をプレゼントしてやりたかったんだ」

いつになく真剣な父の声。でもそれは直後の水道の音にかき消された。

かのんの方が照れてしまつて、じゃあ今度は一緒に考えようよと大声で言つた。

はのん？わおん？はもに？むじか？

「ゲームキャラじゃねえんだ！せめて日本語にしろ！」

その言葉に、じゃあかのんはどうなのよ、と二人顔を見合わせて笑つた。

「ピットなんて老舗のライブハウスだろ？でもそんなにキャパないよな」

「せめてあたしのわかる言語でしゃべってくんないかなあ」

さつきから恭平の興奮した声は止まらない。誘う相手に必死にメー
ルを打ちつつづけている。

「イヤだつて言ってんじゃないんだよ。逆にさ客との一体感が…。
それよか、楽屋とかもしかして行けるの？」

口きいてやつてもいいぜ、ちょっと偉そうにかのんは胸をはった。
井上様、かのん様、恭平が拝む姿を、クラス中が呆れかえって見て
る。

「いいわね、有名人のお子さんって」

つんとすましたこの声は、振り返らなくなつてわかる。

「あら、大島さんも来る？もう一枚取つてあげようか？」

「結構。私、クラシック以外に興味ありませんので」

ぴしつと言いつ返された。いつものかのんなら頭に血が上るところだ
が、本気で不思議そうに彼女に訊いてみた。

「ねえ、大島さんは音大目指してるんでしょう？将来ピアニストに
なりたいの？」

あまりのストレートな質問に、さすがの大島も言葉に詰まった。

「そ、そりゃあ、なればいいけれど。成功する確率なんて本当に低いから」

珍しく気弱な発言に、大島自身も目を伏せた。

「どこが違うの？だってあんなに大島さん上手じゃない。プロになるってどういうこと？」

かのんにとっては本当にわからないことで、ただ訊きたかった。確かに大島はうまい。セレブ相原だってうまい。でも、彼とは違う。

そんなこと、ご自分のお父様にお聞きになればいいでしょう！最後にはいつもの大島に戻って、踵を返すと移動教室へと向かってしまった。

音楽って何だろう、プロって何だろう。

父の演奏する姿を見ればあるいはわかるかも知れない。かのんはなぜかそう考えたのだ。たとえ満足な答えが出なくとも。

なぜだかわからないのに、今はただ音楽に近づきたかった。みんなが必死になって守ろうとしているものがいったい何なのか。かのんはそれを知ることがいいことかどうか判断はできないけれど、どうしてもこの目で

この耳で、音楽というものを本当に理解したいと思った。

かのん以外の周りの大人たちのように。

#14

最初はいたずらメールだと思った。誰かがかのんに向けた悪意のメッセージ。

手が込んでやがる、ものすごい言葉遣いを心の中だけで毒づく。

開けたらスパメだったらどうしよう。ここはさくつと削除かな。

かのんは教室の窓際で一人携帯の画面を見つめていた。

友人たちとの待ち合わせがずれて、今はこの広い教室にただ一人。誰にも相談できない。

そのメールの表題には「伊織です。大切な用件があります。」と書かれていたのだ。

でも結局その吸引力に負けて、彼女はボタンを押してしまった。なぜあいつがあたしのメアドを知ってるのよ。頭に血が上った。本人であるはずがない。それでも…。

『井上かのん、君に見せたい物がある。国際ホテルのラウンジで待っている。ラウンジなら君も抵抗はないだろう？ただし、一人で来ること。そうでなければ見せられない。樹生には内緒だよ』

その後に続く日付と時刻。この時間に会いにゆけというのか。何のために？

本人である確証なんてない。ああでも、メアドなんて部活の連絡メールのために顧問も部員も誰でも知ってる。相原にでも訊けば手に入れることなんて簡単だろう。中学生の個人情報保護なんて所詮そんなもんだ。

見せたい物。それよりも訊きたいことがたくさんある。父とどんな関係なのか、なぜかのんにまわりつくのか。

そんなことよりも、どうしてあんな音が出せるのか。

かのんは誰にも言わないと心に決め、携帯を閉じた。シャラランと軽快な音が響く。

父にも母にも、そして和奏たちにも。言えば止められる、会うなど言われる。

黙ったまま、かのんは遠くから聴こえるプラスバンドの音色に耳を傾ける。

音楽、それはいったい何だろう。

伊織高臣には答えが出せるのだろうか。今はなぜかそう信じたかった。

井上家台所のカレンダーには三人がそれぞれ好き勝手に予定を書き込んでいた。

どうしても起こして欲しいときだけ、ホワイトボードに殴り書きするのは樹生のいつもの癖。

他の用事は、狭っちいスペースに色を変えてみんなが書き込むものだから、カレンダーはいつもぎっちり。

それにかのんはわざとその日の朝に「友達と待ち合わせ」と書き込んだ。

ふと見ると、同じ日に母の几帳面な文字で区役所と書いてある。国際ホテルとは近く。ちよっとだけほっとした。

放課後の練習をサボってまで、かのんは一人ホテルのラウンジに来了。制服が場違いかとも思ったが、彼女くらいの少女たちの姿も一人二人ではなかった。よかった。そう思う間もなく、一番窓側の席から手を上げる男の姿が見えてとれた。高臣だった。

「ようやく二人だけで逢えた」

ソフトなベルベットボイス。こいつは歳を取らない吸血鬼じゃないのかとも思った。かのんはついお若いんですねと皮肉を言ってしまった。

「僕は歳を取れない吸血鬼なんだ。知ってた？」

まるでかのんの心を読んだかのように、優雅に微笑む。びっくりし

たような彼女の反応にくすくす笑い出す。

「本当に素直な子だね。でも嘘じゃないよ。まあヴァリアアの血が混じっている訳じゃないけれど、僕はバスク人とのクォーターなんだ」

「バスク人？」

「君の好きな、モーリス＝ラヴェルと同じ、ね」

あたしは別に好きだなんて、口ごもるかのんに、またもゆつくりと笑いかける。

「でも、惹かれるだろう？プレリユードに」

クラシックなど何も知らないかのんが、なぜか惹かれてやまないクープランの墓。

でも今日はそんなことより。

「用って何ですか？見せたい物って何なんですか？突然メールって失礼じゃないですか？」

一気にたたみ込むように彼に文句を言い切る。

「僕が君のお父さんと親友だと言っても、君は信じなかった。あの言葉に僕はこれでもたいそう傷ついてね」

「謝ればいいんですか！？」

大声は出さないで、優しくとがめる。そんなことじゃない。証拠を

見せてやろうと思ってね。

「証拠？」

「彼が二年の時に課題で吹いたサキソフォン協奏曲の伴奏をしたのは僕だ。僕が他人のバックを弾くなんて生涯あれきりだよ」

なんて、傲慢な言い方。

「口だけなら何とも言える。そんなこと太郎ちゃんに聞くからいい」

「坂峰太郎？ふん、あいつに何がわかる」

もつと訊きたいことがたくさんある。でも実際の高臣を前に訊く勇気がどうしても出ない。

かのんは唇を噛みしめた。

「じゃあ、写真でも見せてあげようか。それなら納得いくだろう？」

高臣はなぜか立ち上がった。そしてかのんにもそれを促す。

「ここに持ってきてください。部屋になんて行きたくない！」

「君は僕に訊きたいことがあるんじゃないのかい？それはこんなに大勢の人の前で話せる

こと？」

かのんは目を見開いた。こいつは人の心がすべて読めてしまうというのか。

まるで催眠をかけられたようにふらつと彼女が立ち上がった。理性

なんて中学生に求める方が間違っている。そう、知りたいことはたくさんある。

一番知りたいのは、高臣のこと。
部屋に入ったかのんにジューズを差し出す。子ども扱い。かっとなが熱くなった。

しかし残りのジューズは自分のグラスに。テーブルには置かずにベツド脇のサイド。

「大切な写真が濡れてしまうと大変だ」

ほら、と広げた幾枚かのフォトグラフ。そこには高臣と樹生がこれ以上ない笑顔で写っていた。他の写真には二人の他に太郎と和奏と、なぜか母の美沙子。とても生真面目にまるきり記念写真然としている。

「これは演奏会直後のもの。こっちのスナップの方が僕としては気に入ってるのだけれど」

高臣と父。どれもとても仲が良さそうな表情で、肩まで組んでいるものもある。

一枚だけ、美沙子とのツーショット。樹生とではない。高臣と彼女の。

かのんの頭が混乱してくる。そんな生やさしいものじゃない。頭痛がしてがんがんと脈打っている。

どうして？だって誰も今まで伊織高臣のことなんて口にしなかったし、父も和奏もあの温厚な太郎でさえも、彼には酷い言葉を投げかけていたじゃないか。

あまりに深く写真に見入っていたせいで、かのんは背後に高臣がいることにさえ気づかなかった。

不意に抱きしめられる。
びっくりしてもがくが、大人の力は余りに強い。

「ちょっ！何すん！」

大声を出そうとするかのんを前に向かせ、唇におのれの指を押しつける。かのんは恐怖で身じろぎできない。

「井上かのん。樹生の娘。どこも似ていない美しい少女。君は誰だ？本当にあの平凡な女から生まれたというのか」

かのんの身体が硬直して、何も声を出すことさえできない。

「色素の薄い髪、青白いほど透き通った肌。切れ長の瞳。ねえ教えておくれ。君はいったい何者なんだい？」

高臣がくすくすと笑い出す。

「君が訊きたかったことは、なぜ自分はこれほどまでにラヴェルに惹かれるのかということじゃないのか」

かのんが息を飲む。やっぱりこいつはあたしの心をすべて、すべて勝手に涙がこぼれる。

そつと高臣が顔を近づける。薄い唇が軽く触れ合う。かのんは必死に顔をそむけようとするが、押さえつけられてそれもできない。

やめて、やめて！

どんなに思いきり叫んだつもりでも声など出なかった。

力の限りに高臣の身体を押しのとけると、かのんはその脇をするりと

抜ける。分厚い絨毯に足を取られて一度転びかけるが、何とか態勢を整え直すと廊下に飛び出した。
お母ちゃん！お母ちゃん！お願い助けて！！
走り続けながら、かのんの涙は止まることがなかった。

#15

重厚な作りの国際ホテルの表玄関から飛び出したかのんは、そのまま右に曲がった。

かなり走るけどそうすれば区役所前のバス停があったはず。

かのんは無意識にそう計算すると、スカートがばたつくのも気にせず走り続けた。

そこにお母ちゃんがいるかどうか、そんなことはわからない。でも、もう一人はイヤ。

怖い、怖い！

抱きしめられたことも触れられた唇も、確かに怖いことではあったけど、何より高臣の言葉が怖かった。

キミハダレダ。

あたしは井上かのん。井上樹生と井上美沙子の一人娘。それ以上でもそれ以下でもない。
ねえ、そうでしょう？
涙が止まらないのは、かのんの心のどこかに不安があったせいなのか。

違う！絶対に違う！浮かぶ疑問を払いのける。

あたしだけ二重なのはきつとおばあちゃんの隔世遺伝。

色が白いのはひいじいちゃんに似ただってみんな言ってた。

そしてあたしはもうすぐ姉になる。家族が増える。これ以上の幸せな時間なんてないのに！

区役所の表玄関に、見覚えのある日傘を見つけた。バス停は暑いから、少しでも日陰に。

そんな母の姿が目に入る。かのんは立ち止まると汚れるのも構わずに袖で顔中を拭きまくった。

涙なんか見せられない。心配なんかかけちゃいけない。

「お母ちゃん！！」

かのんは精一杯の大声で叫んだ。美沙子が驚いて振り向く。

どうしたの？ととまどいがちの彼女に、友達と買い物して終わったところと適当に話を合わせる。

顔はひきつっていただろう。でも涙はもう見えないはずだ。

なのに美沙子はそつとかのんの頬を優しくなでた。

「言いたくなったらでいいからね」

その言葉だけで、かのんはわっと泣き出しそうになった。それを必死に耐える。

何か別のことを言わなきゃ、何か。

「お、お母ちゃんこそ何で区役所？」

美沙子はいつものようにふふつと笑うと、いかにも役所といった封筒から明るい小さい手帳を取りだした。

「ほらかのん、もらえたわよ。新しい母子手帳。今はこんなデザイン

ンなの……」

そう言いかけた母の言葉が止まった。

目は見開かれ、もう少してその大切な手帳を取り落としそうになった。

まさか……。

かのんは、怯えた顔で振り向いた。

あんなに思いきり走ったのに。このバレー部歴三年のあたしが。

そこには肩で息を切らせる高臣が立っていたのだ。

「さすが若いね。スポーツをやっているんだっけ。追いつくのがや
つとだ」

屈託もなく笑いかける。かのんは背筋も凍る思いで彼を見た。
何で、何でここまで追いかけてくるなんて。

「これ以上そばに来たら、警察呼びます！」

「ああそう、これは君の大事な物じゃないの？」

高臣の手には、ピンクにハートマークだけをシンプルにつけたかの
んの携帯が握りしめられていた。

はっと彼女が息を飲む。

取り返そうと手を伸ばすと、高臣は意地悪をするようにその腕を高
く上げた。

「わざわざ持ってきてあげたんだよ、その態度はないだろうっ？」

唇をかむかのんを、美沙子は後ろから抱きしめた。

そして背後へ下がらせると彼女らしからぬ厳しい視線を高臣に向けた。

「娘の忘れ物を届けてくださってありがとうございます。お返し下さいませんか？」

美沙子の声はかすれていた。

その声に、高臣はゆっくりと視線を彼女に向けた。何の感情も込められていない冷たい瞳。

「お久しぶり、ですね。東條美沙子さん、いや今は井上美沙子さんとお呼びしなくてはならないのかな」

美沙子の身体がガタガタと目に見えるほど震え始める。かのんは思わず母をそつと支える。

二人を交互に見つめる。なんて対照的な。でもそれは高臣と樹生も同じ。

見た目は同じ人間だとしても、まるで水と油のように全く性質の違う物体としか思えない。

「ほう、母子手帳ですか。ご懐妊おめでとございます」

相変わらず冷ややかな薄笑い。冷酷な目。

唐突に思い出されたあの写真……そう、美沙子と高臣は二人並んで写っていたではないか。

何があつたのか、そして今二人はなぜこんなふうにかのんにはもう何も考えられなかった。

「それで、今度は樹生の子どもの？」

爬虫類の質感のような笑いを浮かべ、高臣はそう言葉を投げかけた。酷く青白い顔色に、母が倒れるのではないかとかのんは心配した。もう止めて、これ以上何も言わないで。

そう言いたいのに、舌が喉にはりついてしまっって何も話せない。

「井上かのん。まさか忘れたとは言わせないよ、東條さん」

その言葉を聞くなり、美沙子は思わず高臣の頬をはたいた。

ばさっと、持っていた書類が道路に落ちる。

叩かれても高臣は怒るのではなく笑い出した。とても嫌な含み笑い。ふらっと倒れかかる美沙子を、かのんはその細い身体で抱きかかえた。

彼女に寄りかかりながらも、それでも美沙子は高臣をにらみつけた。含み笑いはそのうち、高笑いへと代わり、さもおかしくて仕方がないようにしばらく彼は笑い続けた。

「ごっこはさぞかし楽しかっただろうねえ」

それだけ言うと、彼は涙をためるかのんに携帯をそっと渡し、ホテルへの道を引き返していった。

「お母ちゃん、大丈夫？」

かのんの心配そうな声に、でももう美沙子は立ち上がる元気さえも残ってはいなかった。

#16

「おせえなあ、かのんのヤツ」

「ホントに来るのかよ、井上樹生の娘なんて」

バンドの先輩が疑いの眼差しで見ると、恭平は唇を曲げて言い返した。

「来ますよ、ってか、リハ見せてやるからこの時間に来いって言ったのあいつですよ？」

老舗のライブハウス「ピット」は、普段は正統派のジャズや来日した大物ミュージシャンが好んで使うハコだった。しかし今夜はダイバージェンスが登場する。普段はコンサートホール級でしかやらないから、こんなふうに間近で見られるチャンスはなかなかないのだ。もちろんいつもの高級そうな椅子もテーブルも取っ払って、最初っからオールスタンディングだ。

「とりあえず中に入ってみようぜ」

ベースのヤツがドアを開けると、そこに番人のように立っていた男にすぐ引き留められた。

「はいはいはい、まだまだだからね。開演まではあと何時間もあるから出直してきて」

携帯を耳に、スーツ姿。斜めがけのカバンはバンドの雰囲気と合わないが関係者の一人なのだろう。

「いえ、違ってます。ボクたち井上さんの知り合いです…」

そっという子たち多いんだよね最近、相手にもしてもらえない。

「もう一度電話してみるよ！」

ギターの先輩が小声で恭平をつつく。そうは言ってももう何度もかのんの携帯には直電もしたしメールも送った。クラスの連絡網に書いてあった家の電話にまでも掛けたのに、全く反応なしだ。

それでも、仕方なくもう一度携帯のボタンを押す。つながることはつながるが、出やしない。こんなこと、今まで一度もなかった。あいつは携帯はいつもポケットに入れてたし、すぐ気づくことが多いからだから。

「だから、ボクたちは井上さんの娘さん、かのんさんと同じクラスで！」

こんなチャンスを逃してなるか。恭平は何度も男に食い下がった。

「何騒いでんだよ、うつせえなあ。リハ始まっちまうよ、ザキさん。ダメ出しのザキがいなきゃ話にならないでしょうが」

ふいに横の楽屋から声がした。思いのほかでかい。井上樹生だ。本物の！恭平は目を見開いた。

「あ、あのボク、木島恭平と言います。かのんさんのクラスメートでリハーサルの見学を…」

がちがちに緊張しながらそこまで恭平が言つと、ようやく樹生は「ああ！」と声を上げた。

「そう言やあ、かのんがそんなこと言ってたなあ。サックス吹くんだって？うまいって評判らしいじゃないの」

樹生はからかうように、にやにやと恭平に声をかけた。彼の頬がぱあっと赤くなる。

「いっさん、そういうことはもっと早く言っておいてくださいよ」

わりいわりい、彼らのマネージャー矢崎に軽く手を振ると、好きなところで見なよと面倒くさそうに付け加えた。

「でも、かのんさんがまだ来ないんです」

「あん？あいつもリハに来るって言ってたのか？」

珍しいこともあるもんだ、雪でも降るかなと呑気な答えをした樹生に、ただ家にかけても誰も出なくて、とあわてて恭平は言葉をついだ。

樹生の動きが止まった。

「電話に出ない？」

「携帯にもメールにも、家の電話にさえ出なくて。ここで待ち合わせって言ってたんです。なのに……」

その言葉に樹生は持っていた自分の携帯電話を取りだした。登録番号を押す。確かに何度掛けても誰も出る気配はなかった。

まさか、美沙子の具合でも急に悪くなって、二人で病院にでも行ったのか？

かかりつけの産婦人科は歩いても行ける距離にしたし、ひよっとして電話もできない状態なのかも知れない。

樹生の胸がざわついた。

「悪い、ザキさん。おれちょっとうちまで行ってくるわ」

「えっ？もう今からすぐリハですよ？」

「最終チェックまでには戻るよ、大丈夫、ザキさんがいればおれ一人いなくてもリハなんて」

「ちょっと、いっさん！」

恭平は二人のやりとりを黙ってきよろしなから聞いていた。井上樹生のリハが見られないってことか？余分なこと言っんじゃないな。がつくり肩を落とした恭平に、先輩たちが興奮気味の声で話しかけてきた。

「ほ、本物の上村和哉だぜあれ？」

「すげえ、神保の神業ベースが聴けるってか？」

口々に騒ぐ少年たちを、静かに！と矢崎が一喝した。

ドアを開けて出て行く樹生の背中を見送りながら、恭平自身にもなぜか不安な気持ち広がっていった。

#17

井上樹生は確かにかなり著名なミュージシャンではあったが、本人はそんなこと露ほどにも感じていないようだった。高級車なんぞにはさらさら興味はないし、家も至って普通の一軒家だ。防音スタジオ

才付きなんて豪邸、建てようと思えば建てられるだろうに。

その代わり、学費のかかることで有名なエスカレーター式の学校に娘を入れた。

見栄のためではない。彼女を守るために。

そう、樹生も美沙子もすべては皆、かのんを思つてのことばかりなのだ。

樹生は国産のコンパクトカーをバックさせ、車庫に入れた。どうせ一番大きい荷物はせいぜいバリトンサクスクらいなものだ。大きな車はいらないだろう。普段はほとんどアルトしか吹かない。そりやもちろん、曲想に会わせてソプラノサクスクらいは吹くこともあるけれど、中学でこの楽器に出会ってから樹生はつねに相棒のヤナギサワサクスと共にバンドを渡り歩いてきた。

体育会系の吹奏楽部でしこたましごかれ、ジャズと出会い、自分の親に無理やり受験させられたクラシックの本拠地、大聖地、東京G大に、これまたなんの奇跡か受かつてしまい。

ああそうだ。あのG大での出会いがなかったら、おれは今の仕事に進むこともなかっただろうし、あの変わり者の坂峰太郎に会うこともなかった。そして……

わき上がる黒い雲を追い払うように頭を振ると、樹生は急いで車から降りた。

人のいる気配はない。二人でどこかに行ったのか、病院？まさか。鍵穴にキーを差し込むとなぜかそれはすつと吸い込まれてしまった。心に冷たい予感がよぎる。あわててドアを開く。

几帳面にそろえて置いてある美沙子のローヒールの靴、そして無造作に脱ぎ捨てられたかのんのそれ。

大あわてで靴を脱ぐと、樹生は家中に聞こえるように大声を出した。

「かのん！？おい、かのん！！お母ちゃん？いないのか？返事しろ、どこだ！美沙子さん！！」

リビング、和室、廊下を順番に。奥のキッチンを開けた途端、樹生は思わず片手で口を押さえた。

初めはなんの二オイか、すぐには理解できなかった。

ガスか、ようやく思い当たり、とりあえず窓という窓をすべて開け放つ。

げほ、ごほつとむせかえるのをこらえ、部屋を見回す。

テーブルに突っ伏すかのんの制服姿。

そして、シンクの前に倒れている美沙子。

「かのん！しっかりしろ！」

彼女の頬には赤みがさし、規則正しいスースーという寝息が聞こえた。ひとまずほつとする。

そして床にひざまずき、美沙子を抱き上げる。彼女の指からこぼれ落ちる多量の白い錠剤。

ずっと以前に眠れないからともらったと話していたものか。睡眠導入剤。

そして、幾本ものアルコールの缶。

ただでさえ青白い顔が、血の気を失っている。

口元にはわずかに吐いたあと。それでもかすかに息はある。

樹生は震える手で携帯を取りだし、救急の番号を押した。

なぜ？彼の頭が真っ白になった。美沙子の手に握られていた錠剤。

それが彼女の意志なのか。

ぼんやりとした意識で辺りを見れば、ガスパ管が鋭利な刃物で切り込まれている。

今では安全装置が働いてすぐに都市ガスなど止まってしまうことを知らなかったのか。

あの頃とは違うのに。

救急車が来るまでの間、こんなときを長く感じたことはなかった。かのんに大きめのバスタオルを掛け、美沙子を少し横気味に抱きし

める。これ以上何をして待てばよいのか、いくら樹生でも全く想像もつかなかった。

『吐いたものが詰まらないように、顔を横に向けていてください』

対応したオペレーターの冷静さにすら、見当違いのいらだちを覚える。

なぜ…なぜ…。エンドレスリピート。誰かひっかけのフィルインを入れて次のフレーズに進めてくれ。

でないとおれはもう一生ここから出られない。そうさ、初めてなんかじゃない。

もう二度と起きるはずのない悪夢。

普段は聞き流すサイレンの音が近づいてきた。複数の足音が響く。

井上さん！と呼ばれた声に弾かれたように、樹生はようやく立ち上がった。

18

病院についてすぐ、美沙子の母親に連絡を入れた。自宅のすぐ近くでいつも何かと面倒を見てもらっている。入院ということにでもなれば、樹生の手には負えない。

かのんは頬を赤く染めたまま、すやすやと寝息を立てている。一通りの検査はしますが、おそらくクスリもガスもまず体内には残っていないでしょう。医師の言葉をうつろに聞きながら、愛娘の寝顔を見つめる。

かのん…おれの大切な、娘。

一方、美沙子の飲んだクスリの種類と量は、かなり深刻なものだっ

たらしい。ガスの影響はほとんどないが、一緒に摂取したアルコール類。いくつかの睡眠導入剤。

いつの間にこんなにクスリをもらっていたのか。それすら気づかなかった。いつも笑顔を絶やさず、何があっても動じず、見守り続けていてくれたのは彼女ではなかったか。

奥さんは今、救急室で胃洗浄と応急処置を受け、心電図とレントゲンとを撮り…延々と続く医師の説明をさえぎり、樹生は叫び出したくなるのを抑えるのがやっとだった。

残念ですがお腹のお子さんは。処置室で告げられた冷たい宣告におけるは何を考えた？

残酷に樹生を責め立てるもう一人の自分。おまえはほっとしたのだろっ？

涙を流すのでもなく、悲しむのでもなく、これでよかったのだと。

病院の長椅子に力なく座り込む。太く長い指を広げ、その両手で自分の顔を覆い隠す。

どれくらいそうしていたのだろう。本当ならやらなければならぬことなど、

ありすぎるほどあるはずだ。本当なら。

はっとして、樹生は腕時計を見た。もうこんな時間か！リハやチェックどころではない。

客入れすら始まってはいまいか。

あわてて携帯を取り出す。案の定、矢崎から山のような着信とメール。

樹生は廊下の端まで走り寄り、急いで連絡を取った。

「いっさん！何してんですか！？なんで今まで何の連絡も！」

「わりい、ザキさん。嫁さんと娘が事故に遭った」

えっ！？電話の向こうで矢崎が絶句する。

「とりあえず病院にいるが、大したことはない。今からじゃトラだつて探す暇もねえし、おれはすぐにピットに向かうから。もし開演に間に合わなかったら先に四人で進めといってくれ。おれの楽器はステージに出しておいてもらっていいから」

緊急事態なんですから、今日は中止か四人でやりましょう。急いで誰か来られないか声かけてみますよ。矢崎の声に妙に冷静に樹生は応じた。

「変に勘ぐられたくねえんだ。普通にやらせてくれ」と。

そう、樹生の胸のどこかが凍り付き、何も感じなくなっていた。

既視感。オレハドコカデコンナオモイヲ。

ケガの状態はどの程度なんです？まだ心配そうに食い下がる矢崎の声をボタン一つで消すと、あとは美沙子の母に任せ、樹生は病院前に並んでいるタクシーに飛び乗った。

#19

かのんが来ない。

井上樹生もあれきり姿を見せない。マネージャーだという男だけはバタバタと走り回っていたが、他のメンバーはしれっとした顔でリハを淡々とこなしていた。こんなことがよくあるとも言いたげにお目当ての井上樹生がいなくてはステージを眺めていても仕方ない。先輩たちはプロ中のプロの技に目が釘付けになっている。恭平はぶ

らぶらと楽屋を行ったり来たりしていた。その辺のスタッフとももうすでに顔なじみだ。

恭平はかのんのことを思った。あいつが約束を破るなんて考えられない。

そりゃ、リハを見せるだのチケットを取ってやるだの、あいつにしたら信じられないほどの行動だけれど。

あいつは井上樹生の娘と言われるのをとても嫌っていた。

もともと、ダイバージェンスの音を聴いたことのある中学生はいても、樹生を知るものなどほんのわずかではあるが。

幼なじみ、メル友。ふざけ仲間で内部進学予定のお気楽組。

「オレがおまえの立場だったら、父ちゃんに頼み込んですぐにもデビューするのに」

半ば本気でうらやましがったとき、かのんにしては珍しく寂しげな目をした。いつものにぎやかなあいつじゃない。

よくよく見なければわからない、ほんの淡いブルーがかった神秘色の瞳。

中途半端な有名人の子どもってのも、やりづらいもんだよ。知らない人からいろんなと言われるし。

知らない人…例えばあの高慢ちきなピアニストとか？

そんなことを考えるのはオレのキャラじゃねえや。

恭平は顔を手でこするとジューズでももらおうと楽屋にひいとい入っていった。

ステージはもちろんミュージシャンだけでは成り立たない。大勢のスタッフがいないければ何もできないのはいくら中学生の恭平でも知ってはいた。でもまさか、これだけのライブにこんな人が関わっているなんて。

皆同じ黒のＴシャツを着て、背にはdivergenceのロゴ。いろいろな分野で使われる単語だから意味はそれぞれ違うけれど、

ももとは物理でよく使用される「発散」という意味からつけたと、どこかの解説で読んだことがある。

つねにメンバーチェンジをくり返し、若く勢いのあるリズム隊を見つけてきては進化を遂げる。

それがダイバージェンスの最大の魅力だった。

そして、要となるのが何ものにも動じないアルトサックスの井上樹生。

楽屋はとても誰にも声をかけられる雰囲気ではなかった。

スタッフの動きがあわただしくなり、外からにぎやかな声が聞こえてきた。

客入れか、立ち見覚悟の当日券を求める連中か。

恭平たちは大特権でステージの横に自分たちの場所をしつかりと確保しておいたから、今日は本当の間近で音が聴ける。

普通はこんな小さなライブハウスでやるようなバンドじゃない。アリーナ級がいつぺんでソールドアウトしてしまうインストバンドなんて日本には数少ない。中高生の恭平たちがおいそれとこんなところに入れるようなバンドではないのだ。

でも、それを可能にしてくれた張本人は未だ姿を現さない。開場は十八時半、開演十九時十五分。

かのもも樹生も間に合うのか。

もちろん樹生は今まで一音だって吹いちゃいない。

主を失った楽器だけがそれでもステージ上にセッティングされている。

キャンセルするつもりはないのだろう。どうするんだ？

はらはらして後ろを振り返った恭平の目に、大柄な樹生の姿が飛び込んできた。

間に合った！

でも、あれ？かのは…。

いくら樹生の大きな背中の中の後ろを目をこらしても、華奢なかのんがいそうには見えない。

樹生は先程とは打って変わって厳しく口元をしめ、薄暗い通路だというのに全く光を通しそうにもないサングラスを掛けていた。ひそめた眉が険しい。

誰も彼に声をかけられない、突き放したような雰囲気を漂わせていた。

これがいつもの本番前の彼なのか、それとも。

矢崎が樹生に頭を下げる。

「すまない、いっさん。明日からは何とか本田さん押さえといたから」

「いや、こっちこそ悪かった。何の連絡も入れなかったんだから」

「その状態で無理言うな。で、お二人の容態は？」

言いかけた矢崎が恭平を見つけ、目で強く訴えてきた。早くうせろってことかよ。

でも容態って……。

躊躇した恭平を矢崎がさらににらむ。大あわてで袖から客席に向かうとした彼の背中に、樹生の声がわずかに聞こえてきた。

「安藤、わりい。今日のMC頼むわ」

「えっー！？俺がやるんすか？そんなことしたらみんながつくりつすよ？」

ギターの安藤がそれでも空気を察してセットリストをあわてて見始める。

あおりにあおって、客をがんがん盛り上げてゆく樹生の話術、とて

もジャズ畑とは思えないパフォーマンス。

それらもダイバージェンスの大きな魅力の一つだった。

矢崎に向かってつぶやく樹生の声が耳に入る。聞いてはいけなかったのだろうか。恭平の胸が後悔で埋まる。

「MCするだけの気力もねえよ。二人とも生命に別状は無し…だ。ただ、赤ん坊はダメだった」

「いっさん……」

淡々と話す樹生の声が余計切なくて、恭平は廊下の隅で身を固くするばかりだった。

#20

ぱちくり。

大きな切れ長の瞳を開けたかのんは、最初自分がどこにいるか全くわからなかった。

白い天井、薄っぺらい布団。腕にはいつのまにか点滴の針が刺さっている。

「まあ、かのんちゃん。気がついた？」

「おばあちゃん、ここどこ？あたし何でこんなところで寝てんの？」

ベッド脇に付き添っていた母方の祖母に顔を向け、無邪気に訊く。それ程かのんには状況がさっぱり理解できていなかったのだ。

「全然覚えてないの？どこか痛い？」

祖母の声がわずかに曇る。それを見て、ようやくここが病院であることに思い至った。

頭は、少し痛い。腕の痛みはこのうつとうしい点滴のせい。でも、他の手も足も身体もどこも痛くもかゆくもない。ただ少し眠いかな。そう、眠たいんだあたしは。

「ねえ、おばあちゃん今何時？」

時間を訊くと、それはもうとつくにライブなんて始まっている時間だった。今たとえ恭平たちにメールを入れたところで、あの爆音の中で気づくはずもない。その携帯自体、今どこにあるのだろう。

今日はリハも見せてやる、と大見得を切って恭平に威張ってみせた。へー、かのかん様という声を背中に、かのかんは少しだけバレエ部の練習に参加したんだ。毎日身体を動かさなきゃ気が済まない。どうせライブなんて時間は遅いし、全部は出られないとしても基礎練習だけでもやっところと。

家に帰ってシャワーでも浴びてからゆっくり着替えるつもりだった。それで台所で、どうしたんだっけ。

「かのかんちゃん、何も覚えてないの？」

心配げな祖母の声、母に似ている。優しくてあつたかくて穏やかな母に。

「そう言えば、お母ちゃんは？」

別の部屋で治療を受けてるの、あとで行ってみましょう。そう祖母は言葉を続けた。

「あたし台所で寝ちゃったのかなあ、シャワー浴びるつもりだったのに」

その辺りの記憶がよく思い出せない。思い出そうとすればさっきより頭痛は酷くなる。

「……都市ガスがもれていたんですって。怖い、事故ね」

もう少し横になりなさい、温かい声に素直に身体を横たえる。何にしてもこの点滴がなくなるまではかのんはここから動けない。

都市ガスの、事故。そんなことってあるんだろうか。ふと横切るかすかな記憶。

なぜかかのんは思い出したくなくて、ぎゅっと目をつぶった。

祖母が着替えを持ってきてくれていた。制服は治療の際に破いてしまったらしい。またあのバカ高い替え服買わなきゃ、とかのんはこっさりため息をついた。

聖上は何にでもお金がかかる。恭平だって木島医院の三男だし、大島なんかピアノのレッスン代に一回何万も出しているらしいと聞いた。

あたしは別に、近所の友達と公立の中学でよかったのに。

いつかそう母に言っと、母はいつもの笑顔で、「お父ちゃんがどうしても入れたかったんですって。あの人はかのんが一番大事なんだから」とうれしそうに話してくれた。

その母は、今は救急処置室のベッドに横たわっていた。

青白いその顔色、唇には血の気がない。かのんのと看とは比べものにならないほどの幾本もの管が、腕にも、鼻にも直接刺さっている。苦しいのかな、痛いのかな。かのんの目に涙がにじむ。

同じ事故なら、どうして母だけこんな状態になってしまったんだろう。あたしはもうすっかり元気なのに。

なぜか怖くて、最初ベッドに近寄ることができなかった。その彼女

の背中を祖母がそつと押す。かのんはおずおずと母の元へと行った。
「赤ちゃんね、ダメだったそうよ。あんなにみんな楽しみにしていたのにね」

祖母の言葉に、かのんはこらえきれず一粒涙をこぼした。
ひざをつき、ベッドのそばでまだ意識のない母に話しかける。

「お母ちゃん、大丈夫？」

もちろん、返事はない。苦しげな呼吸音が聞こえるだけだ。

「お父ちゃん、何もこんなときまで仕事入れなくなっていたいいのにね。何やってるんだろうね、あの人は。家族の一大事だったのに。あたしがずっと側についていてあげるからね」

ささやくように、かのんは母へ語り続けた。

黙っているともっと泣いてしまいそうだったから。

その声が届いたのだろうか。うつん、とわずかな声を上げて美沙子が目をそつと開けた。

「お母ちゃん！わかる？あたしだよ！」

うれしくてかのんは大きな声を出した。看護師がすぐに寄ってくる。うつろな目で美沙子はかのんのいる方向へと頭を少しばかり動かしただ。おそらく彼女と同じで状況がわかってないに違いない。

「ここは病院だよ、びよ・う・い・ん。わかる？もう大丈夫だからね」

あまりのうれしさにはしゃぎ声で話し続けるかのんを、美沙子の瞳がとらえた。

最初は何の感情もなく、そしてそれは次第に意志を持つように…。

「あ…ああ……」

美沙子の様子が変だ。いつもの笑顔はもちろんあるはずがない。それどころか身体が大きく震えだしている。まるであの、そうあのときのように。

「お母ちゃん？あたしだよ？かのんだってば！」

異変を察して看護師が数人、美沙子を囲む。井上さん落ち着いて、娘さんですよ。そんな言葉さえ掛けて。

かのんは思わず腕を伸ばして母を支えようとした。びくつと身体を痙攣させると、美沙子は大声で叫んだ。

「いやあ！！来ないで、お願い！！助けて！！」

「おかあ……」

「私に近寄らないで！！来ないでお願い、誰か助けて！！」

美沙子の泣き叫ぶ声に、かのんはなすすべもなかった。

#21

「いやあー！！」

美沙子はもう言葉にすらならず、絶叫をあげていた。こんな取り乱した彼女を見るのはもちろん初めてのことで、かのんはどうしていいかわからず固まった。

看護師数人が彼女を押さえ、医師を呼ぶ。鎮静剤の名前なのか、難しい薬品名が飛び交う。それすら美沙子が暴れるものだから、落착いて注射を打つこともできない。

どうして、どうして……

あきらかにかのんを見て、美沙子は叫んだのだ。

あたしは何もしていない。お母ちゃんに何も言ってなんかいない。ケンカすらしたことない。なのにどうして。

助けてってどういう意味なの？ 呆然と立ちすくむかのんを、治療の邪魔になるからと看護師が下げさせる。ふらつく足でかのんは床に背中をつけた。

そのとき、救急治療室のドアが勢いよく開いた。

「かのん!!」

樹生が息を切らせて飛び込んできたのだ。

「お父ちゃん!!」

目に涙をいっぱいためて、かのんは樹生にしがみついた。

「お母ちゃんが、お母ちゃんが……」

あとは言葉にならない。

父はかのんを思いきり抱きしめると、もう大丈夫だ、とくり返した。しばらくしゃくり上げていたかのんは、顔を少し上げて父に向かって言った。

「お母ちゃんがあたしのこと来るなって！近寄るなって！それでずっと泣いて叫んで！」

あたし何かしたの？あたしが悪いの？ねえお父ちゃん！」

もう樹生はあの黒いサングラスを掛けてはいなかった。しかし、その表情を隠したかったのはおそらく今だったのではないか。固くつぶった目と眉間の深いしわ。苦しげに唇を噛む。何かを必死に耐え、大きな感情の塊を無理やり飲み込むと、ほうと息を一つ吐いた。

「そんな訳ねえだろ？お母ちゃんはな、今いろんな事がありすぎて混乱してんだ。きっとおまえだってわからなかったんだろ？」

樹生の大きくて優しい腕、やっと回るほど大きな背中。こうしているとほっとする。父の温かさが伝わってくる。いつもかのんの頭の上から響く低い優しい声。ダイバージェンスのリーダーなんかじゃない。かのんの父親。それが井上樹生。

病室を出て廊下の長椅子に座る。しばらく美沙子は彼女の母に任せようということになった。そうするしか方法はない。

家事はかのんと樹生で分担。学校には普通へ行くこと。仕事は？そう訊くかのんに樹生は答えをはぐらかした。

「お父ちゃん！だったら何で今日は断れなかったのよ？」

「いろいろあんだよ、大人の仕事にはよ」

ようやくかのんにいつもの元気が少しずつ戻ってきた。本当は沈黙が怖かったのだ。黙っていればいろいろなことを思ってしまうから。そんな彼女らの前に、くたびれたスーツ姿の男が二人立つ。胸ポケットから縦型の手帳を取り出す。身分証明書に貼り付けられた金色

のバッチ。

警察だと名乗った二人は、事件の詳しい状況を教えてくださいと話し出した。

「事件？これのどこが事件なんですか」

ものすごく不機嫌そうに樹生が答える。警察なんて関係ないでしょう、と。

「かのんは先に車乗ってるか？ほら、鍵」

樹生はいつものキーをかのんに手渡そうとした。それを彼らがそつと制止する。

「子どもに聞かせるような話じゃないんでしょう？どうせ」

「お嬢さんからもお訊きしたいことがありますから。それとも警察署でお話を伺いますか？」

いい加減にしてくれ！樹生の怒鳴り声にも動じない。彼らは立ったまま話し出す。

「井上さん、よくお聞き下さい。これはただの自殺未遂ではなく我々は無理心中の線も視野に入れてるんですよ。そうなれば奥さんは自殺未遂の当事者というだけではなく、お嬢さんに対する殺人未遂の容疑者ということになる」

自殺未遂？無理心中？この人たちはいったい何を言い出すんだろう。あまりに母に似合わない言葉ばかり次々出てきて、かのんは軽い目眩を感じた。

さすがの樹生も二人の言葉に黙り込んだ。大きな両手で頭を押さえる。

「お話し下さいませんか、井上かのんさん。帰宅してあなたはどうしましたか？」

思ったより優しく年配のほうの刑事がそつと訊く。

かのんはキツと顔を上げて、きつぱりと言い切った。

「そんなんじゃないです。あたし部活から帰ってきて、そのまま台所で寝ちゃったみたいで。すごい疲れてたから」

「そのときお母さんは？」

「母はいませんでした。だからその先のことはわかりません。でも、あたしが寝てたのと母がどうしたかは全然関係ないです」

刑事二人は顔を見合わせた。小さくため息をつく。

「もういいでしょう？何もなかったんだ。これ以上娘を傷つけない」

吐き捨てるように言う樹生に、年配の刑事が痛々しそうな目を向ける。

「井上さん、なぜ我々がこんな酷いことを言うかとお怒りのことと思います。しかし、自殺未遂者は往々にしてまた自殺を企てることが多いんです。今回はたまたま発見が早かった。しかし、奥さんは決して気軽な気持ちで起こされたようではない。その手口がエスクレートすることだって十分考えられる。あなたもお二人をこんな形

で失いたくはないでしょう？」

彼の言葉にハツとしたように顔を上げる。樹生はしかしすぐに目をそらすと口元を手で覆った。

「当分目を離さないで。そばについてよく見ていてあげてください。何かありましたらすぐに警察にご連絡下さい」

二人が帰ってから、樹生もかのんも何も言わなかった。いや言えなかった。

ようやくぼそつと、帰るか、と樹生がかのんを促した。

「お母ちゃん、自殺未遂……って」

「おまえは知らなくていいんだよ」

「だけど！無理心中って。あたしと一緒に死のうと思ったってこと？」

かのんの脳裏に記憶が蘇る。思い出したくない。頭痛が酷くなる。

「大げさなんだよ、警察なんて何でも事件にしようとしやがる」

「お父ちゃん！ちゃんと話してよ。もうあたしも十五歳なんだよ。中三になったんだよ。そんなに頼りない？」

そうじゃない、声が沈んでいた。かのんは辛そうな樹生に思わず何も言えなくなつた。

「なんか食ってくか」

樹生が助手席にちょこんと座るかのんに声をかける。

彼女はずつと下を向いていた。もう一度父が声をかけるのに、要らない、と小さな声で返事をする。

思い詰めた表情に、樹生は静かに路肩へと車を止めた。

「かのん」

「あたし、警察の人に嘘ついた」

「……」

ハンドルに手を載せ、額をつける。しばしの沈黙。樹生は自分のこぶしを握りしめた。

「お母ちゃんね、あたしに牛乳のコップ出して。そんなときとっても悲しそうだった。暑かったでしょうって言いながら。あんな顔見たことない。それ飲んでからあたし、全然なんにも覚えてないの。ねえ、睡眠薬って牛乳に溶けるの？中学生にも効くの？あたしがあのときちゃんと気づいてたら、お母ちゃんは！！」

「もう、よせ」

樹生の大きな手のひらが、かのんの頭を覆う。

「あたしの、せいなの？」

「そんな訳ない」

即座に否定する樹生の低い声が、かのんを少しだけ落ち着かせる。

「自殺しようとするほど、何悩んでたの？」

そんなんじゃないよ、樹生は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「事故だったんだよ。お母ちゃん、こんとこ寝られねえって言うてたから」

「だって、赤ちゃんいたらお薬飲んじゃいけないんでしょ？」

それだけ辛かったんだろ、寝られないのがさ。父の声にかのんはみるみる涙をためた。

「あたしがもっと手伝ってあげればよかった。部活なんてやってないで夕飯だって洗濯だって、みんなやってあげればお母ちゃんだって！」

「かのんのせいじゃない！それだけは絶対だ！」

思わず大きな声。出した樹生のほうがとまどっていたようだ。かのんの細い肩を抱き寄せて、もう片方の手で頭をなでる。まるで幼い子へするかのうように。

「……弟か妹か、楽しみにしてたのにな、お父ちゃんも悲しい？」

涙がこぼれるのをぬぐいもせず、かのんはそうつぶやく。その言葉になぜか樹生は返事をためらった様子を見せた。しばらく

二人とも黙る。

焦ったように樹生がようやく口を開く。

「そうだな」

かのんは思いきって樹生のほうに向き直った。

「ねえ、あたしが生まれたとき、二人とも学生だったんでしょ」

「そうだよ」

「できちゃった結婚だったんでしょ。できたってわかったとき、うれしかった？それともイヤだった？」

日本で一番難しい芸術系の大学生と、女子音大のピアノ科のお嬢さま。卒業がすべてではないとしても、いくら中学生のかのんでも結婚なんて難しかっただろうと想像できる。

「何でそんなこと訊くんだ」

「だって学生で結婚なんてしてなくて、ものすごく困ったんじゃないの。生もうなんて思えなかったんじゃないの。堕ろそうって思った？けんかした？ねえ！」

かのんは真剣だった。十五年前何があったのか、どうだったのか。そんなこと訊いたこともなかった。かのんの記憶にあるのは両親からの愛情と双方の祖父母からの温かい眼差し。

今までなんの疑いもなく、幸せにつつまれていた家族の姿。そこに亀裂が入り始めたのはなぜ？

「これだけはわかってくれ。おまえが生まれたときお父ちゃんもお母ちゃんも、ばあちゃんたちもみんな、本当にうれしかったんだ。おまえはみんなから愛されて生まれてきたんだ。それだけは、信じてくれ」

「……」

「今だって、みんなおまえを思っている。おまえの幸せだけを願っている。みんなおまえを愛している」

「うん、知ってるよ」

あまりにストレートな父の言葉に、かのんは照れくさくなって横を向いた。いつもこんなこと言いやしないくせに。

「おまえは、かのんはおれの、大切な娘だ」

「お父ちゃん」

樹生は気を取り直したようにエンジンを掛けた。古い車だ。セルモーターを回す音が何回か響く。

「お母ちゃんは今、興奮してて混乱してるんだと思う。しばらくそっとしておいてやろうや」

「あたしに、行くなってこと？」

かのんを見る美沙子の目を思い出して、また彼女の心が曇り始めた。あれは恐怖の目。お母ちゃんはあたしが怖いんだろうか。それともあたしに何を見ていたんだろうか。

「おれがそばにいるから、大丈夫だ」

「だって、仕事は？ライブ入ってるんでしょ」

「今夜だけは時間が時間だったからな。明日からはそんなもん、体調不良でしばらく降板します、だよ。本田さんにトラ頼んできた」

樹生はいとも簡単に安請け合いをした。そんな急に仕事を休んだら、それこそ変な週刊誌にでも書かれないんだろうか。余計な心配までわいてきた。

「井上樹生のいないダイバージェンスなんて」

「マンネリ防止に、たまにやいいさ」

いつものひょうひょうとした声に呑気な表情。父の横顔を見つめながら、かのんは彼にだけはどうしても言えなかったあのことを思い出していた。

#23

それから大騒ぎの毎日が始まった。

昔は一人暮らしだったから料理だって、という樹生の言葉を信じたかのんは、激しく後悔した。

よくよく聞けば、毎晩バンドのバイトで食事も何もかも世話してもらってたって言うし、結局あたしが作らなくちゃいけないんじゃない。

一時間も早起きして、部活はとりあえず休みにして、必死に朝ご飯

らしきものを作ってはみるが、お母ちゃんには到底かないっこない。祖母は昼間母の元にて、とてもこちらにまで手が回る様子もなかった。祖父の面倒だつて見なくてはいけないのだ。

「ごめんね」

今朝もこげたハムエッグを前に、かのんは小さくなった。

もつと習っておけばよかった。っていうか、妹か弟が生まれてたら、本気であたしがやってなきゃいけなかったんだよな。

何もかも家のことはお母ちゃん任せ。仕事だつて持っていたのに。母は和奏と同じF女子音大を卒業した。かのんの誕生日は十一月。それから大急ぎで卒業演奏会に向けてがんばったのよ。綱渡りもいいところ。和奏がよく笑つてそう聞かせてくれた。父より一つ年上。だからお父ちゃんは三年生の時に大学を辞めた。誰もが引き留めるのを、振り切つてまでも。

『ピアノ科出身の講師が卒業しているのと、してないのじゃえらい違いだからな』

父の言葉にそういうものなのかと、何の不思議も持たなかった。

『その辺のバンドマンにや学歴なんざいらねえんだから』

じいちゃんは怒らなかった？かのんの問いかけに、あのガンコ親父にやしこたま叱られたが他人様の大事なお嬢さんをいただく身でさつさと働けとぶん殴られたよ、と笑つてた。

母でなきゃダメという生徒も多く、たくさんのキャンセル待ちを抱えていたという教え上手のピアノ講師。

それなのに、大変さを微塵にも見せず、母はいつも微笑んでいた。この場所で。いつものキッチンで。

「なあに、ハムってのはな、少しぐらいこげた方がうまいんだよ。ほら食ってみろ、かのん。かのん？」

呑気そうにそう言っただけで色が変わったハムを持ち上げていた樹生が大声を出す。

かのんは口元を押さえ、青ざめた顔で下を向いた。

「どうしたんだ？具合悪いのか？」

何でもない、そう言いたかったけどその前に涙がこぼれた。

そう、この場所で母は倒れていたんだ。あたしが何も気づかないうちに。

「ちよつとき、いろいろ思い出しちゃったっていうか。ゆうべお母ちゃんどうだった？」

あれからかのんは病院には行っていない。父が止めた。まだ落ち着いていないから、と。

「まあ、まだ眠っていることの方が多いけどな。食事も取れるようになったようだし、医者とも少しずつ話をし出しているらしい。もうちよつとすれば落ち着くよ」

もうちよつと、それがいつになるんだろうか。

ケガならいつまでに治るかわかりやすいだろう。

病気なら、どんな治療をすればいいのか説明だっしてくれるだろう。

でも、母はあたしの名前を呼んでは泣き叫ぶばかりで、どこがどう悪いのかさえわからないのだ。

「辛かったら、学校休んでいいんだぞ?」

樹生がそつと声をかける。あれから意地でも毎日学校へ行った。幸い事件のことを知るものはなく、誰もかのんの変化に気づくものもいなかった。

恭平だけは心配そうに、それでも直接声をかけてくることはなかった。

「うっん、テストも近いし。ちゃんとしてくるよ。バカ高い学費を無駄にしないためにもですな」

「アホ、学費なんざどうだっていいんだよ」

父も仕事を再開した。ネットで見る限り、いつもの井上樹生と変わらないらしい。

音もパフォーマンスも、その高いテンションも。どんなときでも笑っていないてはならないのか。

改めてかのんは、父の仕事の大変さを思った。あの夜も父は変わりにくく演奏をしたのだろうか。

母が倒れ、生まれてくるはずの子供を失い、それでもなおかつ笑顔を振りまきながらみんなを盛り上げたっていうのだろうか。

かのんは、今日学校に行つて恭平を締め上げてやろうと心に決めた。妙に遠慮しちやつて何も言わない恭平。きっと何かを知っているんだろう。

そう考えたらあとは早かった。さつさと自分の前の皿を片付けて、茶碗を洗い、残りの洗濯物を取り込む。

「行つてきまーす」

元気に声を張り上げるかのんを、樹生は複雑そうな表情で見つめていた。

#24

「おれは何にも知らねえよ」

最初から及び腰の恭平を壁際まで追い詰める。
知らないなら、何であたしがあの夜来なかったことも訊かないのよ。

「それは…」

口ごもりながらも、必死に返答を考えている。もう嘘が見え見えだ
っていうの。

ふくれたかのんに向かって、意外にも真剣な瞳で恭平は彼女を見返
した。

その目に、どきりとして思わず視線をそらせようとしたが、かのん
はそれすらできずにいた。

「何かあったんだろ？おまえが黙って約束破るようなヤツじゃない
ことはわかってる。だから訊かなかった」

「何があったのか、恭平は知ってるんだ」

「知らないよ」

何か言い返そうとしたが、恭平の目は変わらずにかのんを見つめて
いる。

彼女らしくもなく、そのまま黙ると唇を噛んだ。

「…わかった。じゃあ教えて？あの夜のダイバージェンスはどんな演奏だった？」

オレだって初めて聴いたんだ、そりゃライブのDVDはイヤんなるほど見たけどさ。

恭平の声にいつもの力が返ってくる。こいつは音楽の話になると途端に元気を取り戻すんだ。

「やつぱすげえよな、井上樹生ってさ。リズム隊はさ軽いんだよ、わりと前ノリで。そりゃベースなんかめっちゃうまだけどテクだけって感じ？それをさ、サックスがだよ、無理やりぐいぐい引っぱっていくんだ」

「…日本語で話してくんない？これっぽっちもわかりやせん」

こいつに聞いたのが間違이었다か、かのんは見えないようにため息をついた。

恭平は咳払いを一つすると、真顔でかのんにもう一度向きあった。

「おまえの父ちゃんはずげって言うてんだよ。あんなに軽めのバツクなのに、どっしりとした太い音色で自分の音を鳴らしてる。アドリブだって軽くなんか絶対に流さない。ものすごい難しい音を選んで、それでもそこにぴたっと合わせてくる。なのにノリが遅れたりしないんだ。あのテンポであの曲想で、なぜあんな重たい音が出るんだ？」

父の音なんてほとんど記憶にない。でも、恭平がこれだけ力説するように（どうせ何かの受け売りだろうけど）、他にも大勢のファンが井上樹生のアルトを聴きに来るのだ。

それだけの魅力を持っているのだろう。

かのんの胸に、ほんわかとした温かいものが広がってゆく。やっぱり今度はちゃんと聴きに行こう。たとえ音楽のことなんてちっともわからなくとも。

「あの夜、普通…だった？」

おずおずとかのんが訊ねる。何が普通か初めてだからわかんないけどさ、と前置きをして恭平は話し続けた。

「すげえ盛り上がりだったぜ。もともとライブハウスって人そんなに入らないじゃん。それでみんな一曲ごとにわあわあすごい声援であ、でも、MCはいつもと違ったって」

MCって？そう訊くかのんに司会だよ司会、と答える。

「いつもはさ、いっさん、っておまえの父ちゃんのことな？いっさんががんがんにしかけて盛り上げるんだって。でもあの夜はギターのア藤さんが代わりになんか焦りまくりながらやってたけど…」

話しづらそうに口ごもる。その態度が妙に怪しくて、かのんは恭平をじっとにらんだ。

「やつぱ、何かあったんだ。そうでしょ恭平！？このかのん様に隠し事しようって気じゃないでしょうね」

「そ、そんなんじゃないよ。ねえけど、でも」

最初は恭平も見間違いだと思った。MCの途中で、急に樹生がサングラスをむしり取った。

その視線の先にいたのは。

言うか言うまいか、言わない方が絶対にいい。そうは思ってもかのに詰め寄られると恭平はどうしても弱い。

「オレの勘違いだと思うからな。それはちゃんと言っとくからな」

「もったいぶらずに早く言いなさいよ！」

一瞬だったんだ、見えたのも。気づいたのもおそらく樹生と恭平だけ。

「あいつが、カウンター外側席の真正面に……」

あいつって……。かのんの頭がまた酷く痛み出す。あれ以来何かを思えば思うほど頭は痛くなってゆく。まさか、まさか。

「ねえ、あいつってまさか……伊織……」

かのんも恭平ももう何も言わなかった。いたというのが、あの場に。

あの男が、伊織高臣が。

かのんは深く深く自分の考えの中に沈み込んでいった。

#25

「ホントに行くのかよ」

「イヤなら帰ってもいいんだよ、恭平」

ここまで来て帰れるか、恭平はぶつくさ言ったがかのんは気にしなかった。

たとえ一人でも行くつもりだった。今度はホテルのラウンジなんかには絶対に行かない。もっと人の多い、目撃者だっているところ。あいつの好き勝手になんかさせない。

かのんの携帯に残る、メールアドレス。

さんざん悩んだ末に彼女は一通のメールを送った。相手はもちろん、伊織高臣。

日本で活動を始めると決めたのは本当に急だったらしく、未だにホテル住まいだという彼は、いつも大学の小ホールにあるピアノで練習を行っているらしい。もちろん大学にしてもそんなこと破格の待遇だ。たった一人のために、毎日楽器とホールを貸し出すなんて。相手はそれほどの実力者なのだ。和奏は日本では知られていないと言ったが、かなり控えめな表現だったことが後でわかった。

確かに日本でコンサートもプロモーションもしていないせいを知る人も少ないが、ヨーロッパでは名の売れたラヴェル研究家にして演奏家。バスクの血を引くその日本人離れた容貌と、優れた演奏技術。彼が日本人であること自体、知らない者もいるのだろう。

和奏は父に訊けと言った。しかし父は高臣に花束を渡したかのんを見ただけであんなに怒ったのだ。そして、そこから少しずつ何かがくずれ始めていった井上の家族。

すべてはあの日、暑苦しい四階の音楽室で聴いた「クープランの墓」が、始まりだったのではないか。

高臣が来てから、姿を見せてから、あたしたちは壊れ始めたのよ。そうかのんは確信した。

母の動揺する姿など、初めて見た。そしてあの写真。

ある決意をしてかのかんはここへ来た。送りたくもなかったメール。返信はなかった。

いなければいなくていい。それなら何度でもここに来てやる。

「なあ、こないだみたいに太郎さんとか呼ばなくていいのか？中坊二人よりさ、G大の准教授がついていてくれた方が」

「太郎ちゃんも和奏ちゃんも海外にいて、すぐには帰れないって言うてんの。帰るの待ってたら手遅れになっちゃう」

和奏に連絡を取ったとき、仕事を放り出して帰ると言ったのを必死に引き留めたのは樹生だった。今はそつとしておいてやってくれ。もし君の顔を見たら、もつと彼女は…。

何が言いたかったのか、のかんにはわからなかった。でもきつとそれは和奏と美沙子と、そうあの写真に写っていた五人にしかわからないこと。

だから代わりにあたしがお母ちゃんを助ける。どんなことがあつても。

小ホールのドアを開ける前から、あのきらめくピアノの音が聴こえてきた。

「古風なメヌエット」ラヴェルが二十歳の時に出版した初めてのピアノ曲。

高臣は何を思つてこの若い頃の作品を弾いているのだろうか。自身の二十歳の頃を思い出して？まさか。父が大学を辞めようとした歳。憶測でしかないが彼らに何かがあつたのであるう年。きい。

きしむドアに気づいているのかどうか、彼は何も表情を変えずメヌエットを弾き終えた。そして、客席の中央まで進んだ二人に向きあ

った。

「今日は二人？できればこの間のように井上かのん一人と会いたかったのだけれど」

ステージは最低限の照明しかついていなかった。それはそうだ。別にコンサートをしている訳じゃない。なのに、高臣にはまばゆいばかりのスポットライトが当たっているかのように見えた。

前に出ようとする恭平を押しつけて、かのんは高臣に向かっていった。

あのとこのように油断はするものか。だいぶ離れてそこから叫ぶように言う。

「お願いがあります。もう、あたしたちに近寄らないでください！」

げげんそんな高臣の表情。それすらも整いすぎた顔立ちには似合っていた。

そしておそらくその言葉だけですべてを察したのだろう。この男はそういう人間だ。

人間？人間の血なんか通っているんだろうか。

「何があつた？そう言えば井上樹生が二週間突然の休養を取ったとどこかで読んだよ。あの丈夫な男が倒れでもしたのかい？」

「関係ありません。あなたには言いたくありません。とにかくもう、あたしたち家族には近づかないでください！それがお願いです」

かのんの叫び声を冷静に聞いていた高臣は、ふっと笑みをもらすと、「で？」と言った。

「えっ？」

今度はかのんがとまどう番だった。

「その代わりに君は僕に何をしてくれるの？」

何言ってやがんだよ、おっさん！恭平がたまりかねて口を挟むが高臣は完全無視だ。

「…何、って…」

「いきなり来て、僕に近寄るなど言う。事情は話さない、と。僕にしたって何が何だかわからないよ」

ニヤリと笑う。噓つき。理由なんてあなたが一番知ってるくせに。かのんはぎゅっとこぶしを握る。

「でもまあ、単身、でもないか。君からこうして来てくれたことに敬意を表して君の言うことを約束しようじゃないか」

「ホントに!？」

つい弾む声を出したかのんに、高臣は自分の座っていたグランドピアノ用の椅子を下げてみせた。

「さあどうぞ、お嬢さん」

何、何よ？とまどうかのんに涼しい顔で高臣は続けた。

「君が『クープランの墓』、全曲とは言わない、前奏曲だけにしよう。それを僕よりうまく弾ききることができれば、僕は君らと金輪際一切関わらない。どうだい？この条件は」

そんな……。あたしピアノなんて。
かのんは息を飲んだ。

#26

「おい、いい加減にしろよおっさん！！かのんはピアノなんか弾いたこと……」

言いかけた恭平を手で押しやって、かのんはふらふらとステージに吸い寄せられるように歩き出した。

「かのん、おまえいつぺんだって弾いたことないって言ってたじゃねえか！」

もちろん弾いたことなんかない。でもあの曲は、プレリユードはどの音も全部覚えている。最初の音はあの高さ。それが何て音なのか、それは知らない。でも彼女の耳には胸には、はつきりと刻み込まれている。

舞台脇の細い階段を上がる。黙ったままのかのんの顔は無表情だった。何かに操られるように椅子に座る。

高臣が優雅な手つきで楽譜を広げる。

「さあ、これが前奏曲の楽譜だ。初めは右手だけでいい。いつ始めてもいいよ。どうぞ」

彼の口からこぼれる言葉がまるでもうすでに何かの音楽のように、旋律を奏でていた。

恭平はどうしていいかわからず、その場に立ちつくすしかなかった。

誰かに連絡を取った方がいいのだろうか。誰に？井上樹生にか。でも、家の電話は知っていても樹生の携帯番号は知らない。ダメ元で家に掛けてみるか。ようやく思考がそこまで追いついて後ろを振り向きかけた恭平に、高臣は鋭く声を投げつけた。

「誰にも言うんじゃない。いいね」

恭平は目を見開いた。彼は心が読めるのか、と。そうじゃない。あまりにも鋭い洞察力で人を見抜くのだ。

改めて恭平はまじまじと高臣を見つめた。片方だけうつすらと青みがかったブルーの瞳。

フランス人とのクォーターって話は本当なんだ。

ごくつと息を飲む音が聞こえそうな静寂。

かのんは座ったまま動かない。

「ほら、最初はアーの音。ここだよ」

高臣がそつと指を指すその手を払いのけると、かのんはドの音から順番に鍵盤を押してゆく。そしてちょうどラに来たとき、彼女の指は止まった。そこから探るように近くの音を拾ってゆく。もちろん譜面など見てはいない。A G D E G H、二回くり返すとかのんはぼるぼると大粒の涙を流し始めた。

「違う！この音じゃない！あたしの知ってる『クープランの墓』はこんな音じゃない。出せない。どうして？どうしてあたしには出せないのになあたしにはできるの？何が違うの？」

その言葉に高臣は黙って最初の四小節を弾いてみせた。流れるような旋律。

右手の音の動きを追いかけるような左手のメロディー。そう、まる

でカノンのように。

「この音を出したいの？」

かのんは黙ったままうなずいた。あふれる涙をぬぐいもせず。

「もっともっとキラキラしてて、ここが痛くなるような！」

制服の上から胸を押さえる。

「君は…」

高臣はそつと彼女の肩に手を置く。それはまるで音楽家同士の対話のように。

恭平はハツとしてわざと足音を激しく立てながら舞台へ上がると、かのんの腕を乱暴につかんだ。

そしてそのまま引っぱってゆこうとした。

「離してよ、恭平！」

「何バカなことやってんだよ！こいつのペースに巻き込まれるんじゃないやねえよ！」

目が覚めたようなかのんの表情。冷酷に恭平をにらむ高臣の瞳。恭平はぞくつとした。

とにかくここから彼女を引きはがさなきゃ、恭平はその一心で必死にかのんを引っぱってドアへと向かった。

高臣は止めない。どうせまた戻ってくる、そんな自信さえ持っているかのように。

「おまえ自分が何やってんのかわかってんのか!？」

大学構内のベンチでまだかのんは鼻をすすっていた。恭平の怒鳴り声に肩をすくめる。

「だって、だって悔しくて…」

「おまえがピアノ弾く必要も何もないだろ? あんなヤツの言うこと何で素直に聞こうとするんだよ!！」

あいつとはもう二度と関わらない、そう言いに行っただんじゃねえか。恭平の言葉にうなだれながらかのんはそっとつぶやいた。

「そう、あいつが来てからうちはおかしくなった。お父ちゃんはおたしが花束を渡しただけで怒るし、お母ちゃんはいいつに会うなりひっぱたいた。あの優しい太郎ちゃんできえ、あいつには怒ってる。何でかわからない。誰もあたしには教えてくれないんだもん。でも、あいつは腹立つほど嫌いだけど、あの曲に罪はないよ……」

そして、あの事件。何も言わないけれど、いや何も言わないからこそ恭平は知っているんだろう。

母の自殺未遂と、新しい命が失われたことを。

なのに、どうしてあたしは伊織高臣に引き寄せられるように近づいてゆくのだろう。

そう、それが怖かったから今日は恭平を無理やり連れてきたんだ。きつと今日二人だけで会ったら、あたしは。

「ねえ恭平! ホントにあたしがあの曲ちゃんと弾けたら、あいつなんかより上手に弾けたら! あいつはもう二度とあたしたちに近づか

ないでくれるかな？」

「あんなヤツのこと、信じるなよ」

大きなため息混じりで、恭平があきれた声を出す。

「でも、約束するって、そう言ったよね。恭平も聞いたよね！」

「難しいんだろ？おまえが弾けっこないよ。まして、相手はプロのピアニストだろ？」

でも、もしかしたらかのんなら……。

急にかのんは立ち上がると構内を駆けだした。

「どこ行くんだよ！おい！」

「太郎ちゃんの研究室！帰国の日をもう一回聞いてくるの」

あの多忙な太郎に教わろうというのではない。和奏なら教えてくれるかもしれない。

少しでもいい、あの曲を弾いてそして、もうそれきり高臣とは会わない。

かのんの心の中でも、そうけじめをつけたかった。

何のために？それはかのん自身にもわかりはしなかった。

#27

「和奏ちゃん！」

待ちきれずに彼女らの部屋の前でずっと立っていたかのんは、思わず和奏に抱きついた。

どうしたの、かのんちゃん、と驚く声が聞こえないほど、かのんはわあわあ泣き出した。

太郎の部屋のシックなソファはもちろん和奏のコーディネートだろう。ガラスのテーブルには薄い和紙の切り紙模様。おしゃれな内装に高そうなワイン。どこかの店のように見えるその部屋は、いつ来ても生活感すらないように美しかった。まるでそれは和奏自身のように。まあ、太郎には似合っているとは言い難かったが。

「ベルギー土産のチョコレート。さっそくだけど食べてみる？」

かのんはまだしゃくり上げていたが、チョコレートと聞いてちょっとだけ顔を上げた。

その表情があまりに可愛らしくて、太郎と和奏は顔を見合わせて微笑んだ。

父はライブで遅くなるし、祖母には和奏のところに泊まると伝えてあった。

どうしても、何としても今夜こそは和奏にお願いして、あの曲を。

「ここは防音なんでしょう？夜中でもピアノが弾ける？」

「弾けなくはないけど、まあサイレント機能を使う方が多いかな」

特注のグランドピアノに取り付けたという消音器。普段はそれを使って弾くのだそうだ。

二人で聴けるの？かのんの質問の意図をはかりかねて和奏は首をかしげた。

「和奏ちゃんと太郎ちゃんに聴いてもらいたい。今、たった今。」

ごめんね。帰ってきたばかりだったのに」

「聴くって何を？誰が弾くのよ」

かのんはチョコレートにちょっとだけ惹かれつつも、立ち上がってピアノの椅子に座った。

太郎が目を丸くする。何をするつもりなのかと和奏もピアノのそばに近寄る。

そつと優しいタッチでかのんはラソレミソシラソレミソシと弾きだした。

左手でミの音を添える。確かこんな感じ。これを二回くり返す。

その次が背中をぞくぞくさせるあの上昇音階。ここは好き。こんな雰囲気で弾いてた。ねえ、合ってる？

かのんはそこまで弾くと二人を振り返った。ちょっとした興奮で頬が朱に染まっている。

二人は声も出なかった。

「……誰に…習ったの？」

とぎれとぎれに和奏がつぶやく。太郎は息を飲んで二人を交互に見つめるばかりだった。

かのんは首を振ると、急いで和奏に頼み込んだ。

「お願い、ここまでは弾けるようになったの。でもこの先が難しくて。和奏ちゃん教えて？」

「あなた一人でこんなに弾けるようになったって言うの！？」

そう、音楽室だと目立つからその脇の練習室のピアノで、こっそり練習した。譜面なんかもちろん読めないから、確かこの音だったよ

なつて必死に音を拾った。あの音ならもう胸に染み込んでいるから、いつだって取り出せる。

「クープランの墓（プレリユード）」。泣きたくなくなるようなあの旋律。

「だって、だってこの曲が弾けるようになったら、伊織って人がもうあたしたちに近づかないって約束してくれたから」

「会ったんですか？あなた一人で！」

一人じゃない！今度は一人じゃなくて、友だちと。最後は消え入りそうな声になってしまったのは、その前の出会いを思い出してしまったから。

かのんは下を向いた。

「いいですか？かのんちゃんはまだ伊織くんに関わってはダメです。二度と会わないで下さい。お願いです」

「どうして？どうして誰も教えてくれないの？みんなそう、お父ちゃんも太郎ちゃんも、和奏ちゃんも言ってくれない。だからお母ちゃんは！！」

美沙子の様子はどうなの？刺激しないようにそつと和奏はかのんに問いかける。

「あれから会えない。一度も会ってない。あたしの顔なんて見たくないのよ。まだあたしの名前を叫んで泣いてるんじゃないかって怖くて」

みんなあなたを守りたいの。つぶやく和奏にかのんは顔を上げた。

「何もわからないまま？みんながみんなあたしに隠して。あたしには音楽に近寄らせないようにしてたくせに！なのに伊織って人はあたしにピアノを弾かせようとして。何が何だかわかんない！こんなことってないよ！あたしだけいつも一人で！」

和奏は、そうよね、とため息混じりにささやいた。

かのんちゃんはいつまでも小さい子どものままだよね、と。そして、制服の上からそつと彼女を抱きしめた。和奏の使う難しい名前の香水。

それはエキゾチックな彼女の面立ちにとても似合っていた。

和奏はそのまま広いグランド用の椅子の隣りに腰掛けると、静かに話し始めた。

あの頃を、彼らが出会ったあの春のことを。

(つづく)

<カノン> 北川 圭 Copyright? 2009 - 2010
keikita gawa All Rights Reserved

< 後編 >

#28

緑の葉を茂らせたメインストリートのあちらこちらから、いろいろな楽器の音が聴こえてくる。

フルート、オーボエ、そしてヴァイオリン。向こうに鳴るのは金管楽器か。

東京G音楽大学は、都内の中心地をほんの少し郊外に向かった先にこぢんまりとそのキャンパスを構えていた。国公立でも最難関と呼ばれる音楽のエリートたちが集う、と呼ばれる。

確かにピアノ科、ヴァイオリン科には幼少の頃から音楽だけの生活を送り、コンクールに入賞をくり返すような秀才ばかりが集まっていた。

しかし、なぜかここ、管楽器科には個性豊かなメンバーがそろっていたように思えた。

その個性的な連中の中でもとびきりの有名人と言えば…。

「井上くん！ちょっと待ってください、井上樹生くん！管楽器科の井上くんてば！」

「あん？」

何やら必死そうな声に、樹生は背負っていたアルトサックスの革ケースを揺らして振り向いた。

確かに大学生は服装は自由。だが、彼の着ていたTシャツはスカル模様だったし、Gパンにはしつかりひざのところに大きな穴が空いていた。その脇を、清楚なブラウスを揺らしてかわいい笑い声を立てるピアノ科の学生が通り抜ける。もちろん、樹生とは距離を取っ

て。

樹生を呼び止めた当の本人は、息をぜいぜいと切らしていた。やや小太りでむちむちとした手をひざに当てて、肩で息をしている。そんなに走ってきたというのか。

丸っこいメガネとその奥の柔らかい瞳。天然パーマの髪がくしゃくしゃで、その表情を囲んでいた。ちっとも憎めない。そんな印象を与える童顔の男。

「よかった、構内で井上くんに会うのは伊織くんに会うのと同じくらい難しいと言われてきたんです」

「伊織？何じゃそりゃ。それよか、オタクおれになんか用？」

樹生は二年に進級したばかりだった。よく無事に単位が取れたものだ。だと彼を知るものは誰もが驚いたが、それにはいろいろと紆余曲折があつたようだ。

天パ男は顔を上げるとにつこり笑った。余計人の良さそうなその笑顔。

「すみません。ボクは作曲科二年の坂峰太郎と言います。以後よろしく。西原先生からお話は伺っていますよね」

樹生は目をしばたかせた。お話を聞くも何も、その当事者である西原と一戦交えてきたばかりだからだ。

それを太郎に伝えると、あきらかに落胆したように彼は肩を落とした。

「一戦交えるだなんて、あんな温厚な先生と何したんですか？」

「だってよ、基礎が大事だつって、まあホントに地味な地味な基礎練ばかりさせやがって。曲やらせろつつうんだよ、曲」

そう、西原こそが手を掛け目を掛け、樹生を何とか進級させてくれたのだ。もちろん音大は四年間で単位を取り終えればいいのだろうが、何しろ樹生と来たら大学に来るのはまれ、放っておけばいくらでも外部のジャズバンドで演奏を始めてしまうのだから。

クラシックなんてやって何になる、と言い切る樹生に向かって、西原は根気よく基礎の大切さを語ってやっていたらしい。

「クラシックのサキソフォンの魅力も味わいなさい。声楽のハーモニー、もしくは弦楽器の豊かなアンサンブルの音がするでしょう？」

だったら、歌うか、弦でやりやあいじゃねえか。うそぶく樹生にさすがの西原も言葉をなくしたという。

管楽器科の教授の中には、クラシックとなじめない樹生に退学を勧めるべきではないかという過激な意見も出ているという話だ。

防波堤はもちろん、西原教授だった。彼の中にある芸術性を信じてあげてください、と。

「じゃあ、話を聞いてないと。わかりました、今から一緒に来てください。こんなチャンス二度とない。レッスン室に彼を押さえてあるんです」

何が何だかわからぬまま、強引に太郎に腕を引かれて樹生は大学のあちこちにあるレッスン室の一番大きな部屋に連れて行かれた。ここには古いながらもベーゼンドルファーのグランドピアノが置いてある。

そこには一人の男が座っていた。すでにピアノの蓋は開けられ、流

れるような旋律が響き渡っていた。

これが、ピアノの音？

樹生は初めて聴く迫力のある音に引き込まれた。もちろん、樹生だって受験のためにいやいやピアノのレッスンも受けさせられたし、今だって履修科目にある。おれの音、いや、他の講師たちが弾くどの音ともそれは違っていた。

こんな音、聴いたことねえぞ。

使っている音も、樹生にはなじみのあるものばかりだった。

ジャズテイストのちりばめられた曲。もちろんジャズとは違うノリだが、音にはどんな惹かれてゆく。

樹生の表情の変化に、太郎はさらに笑顔を見せた。

ふっと音が途切れる。

ゆらりと立ち上がる背の高いほっそりとした男。

色が白く、茶色の髪を斜めに流して。切れ長の目が涼やかにこちらを見る。

樹生は目が離せなくなった。

「伊織…高臣です。よろしく」

それが、樹生と高臣の初めての出会いだった。

#29

今の曲…樹生は声が枯れていたかもしれない。

もちろんジャズテイストの入ったクラシックなんぞいくらでもあったし、樹生だってやったこともある。

大抵はこんな似非ジャズでジャズがわかった気になってもらってたまるかよ、と毒づきながらではあったが。

「モーリス＝ラヴェルのピアノ協奏曲。ジャズプレーヤーとして有名な井上樹生くんへ敬意を表してね」

あくまでも爽やかに高臣は言葉を紡ぐ。樹生はためらいつつも彼に視線を送った。

これがおれと同じ日本人なのか。色はあくまでも白く、整った顔立ちに彫りの深いすっとした二重まぶた。まるで彫刻のような表情。手も脚も長くほっそりとして、どこからあの迫力ある音を出しているのか、わかりかねた。

「お、おれはまだプレーヤーでも何でもねえよ。ただの素人のバンドマンの見習いだ」
いつもの樹生を知る者なら驚くほど、おどおど返事をかえす。

樹生はすっかり彼の雰囲気飲まれてしまっていた。

「で？おれに何しろって言うんだよ。まさか今の曲を吹けつつうんじゃねえんだろうな」

樹生は代わりにそばに呑気に突っ立っていた太郎へと文句をふっかけた。

太郎が目を白黒させる。

「違います、違いますよ！だから西原教授にお話ししておいたのになあ」

太郎は大げさにため息をつく。

「これですよ、この曲。同じラヴェルなんですけどね。この小曲を管楽器とピアノのための習作で編曲して書いてみようということに

なって、何の楽器にしようかって先生と相談していたら」

長々と説明を続ける太郎を無視して、ヤツの持っていた楽譜を取り上げる。今と違って音楽用のソフトなんてそうそうない時代だ。もちろん手書きのその譜面は、まだ黒いインクの匂いがしそうなくらい瑞々しかった。

Le Tombeau De Couperin

表題にはそれしか書いてなかった。語学も必修科目だからそれがフランス語であることはわかる。だが樹生に読めるはずもない。

「せっかくラヴェルを取り上げるなら得意とする伊織くんに頼もうかなんて贅沢を言ったら、引き受けてくれたんですよ！」

興奮気味に太郎が熱く語る。ラヴェルも伊織も知らねえよ。第一おれに何の関係がある？

そうすぐに言いたかったのに言えなかったのは、さつき聴いた……あの音。

「僕が言ったんだ。相手が井上樹生ならやってもいい、とね」

高臣は首元までしっかりボタンを閉めたカッターシャツを涼し気に着こなし、微笑んだ。

急に樹生は、自分はえらく場違いなところにいるような気がして落ち着かなくなった。

今の今まで自分は他のG大生とは違うのだと大いばりで主張していたくせに。

「何で、おれ？」

とまどい気味の樹生の声に、鋭くもはっきりと高臣が応える。

「君の音が気に入ったから。それ以上もそれ以下もない。他に理由が必要かい？」

樹生は彼からどうしても目が離せなくなっていた。よく見ればほんの少し青みがかった瞳。

「僕も忙しいんだ。このあとコンクールの練習も入っているのですね。やるのならさっさとやってしまおう」

太郎がいそいそと樹生のために譜面台をセットする。早く楽器用意して、と彼をひじでつつく。

ハツとしたように樹生は言われるがままにアルトサックスの本体を取りだし、ネックを取り付ける。

いつもならそこでジャズ用のメタルピースをこれ見よがしに出すところだったが、なぜか樹生は素直にセルマーのノーマルなクラシック用のマウスピースを手にした。

リードも無難なバンドレン。西原にさんざん叱られ、それでもこの頃は持ち歩くようになったのだ。

試し吹きをする。いつものジャズらしい太くにこった音でなく、さつきまで基礎練習でみっちりしごかれた透明な音。どんな曲かも知らないのに、あのピアノの音にはおれのいつもの音じゃ対抗できない。そう感じたのだ。

太郎が目を丸くする。そりゃそうだろう。井上樹生がこんな音で吹くのは、西原に追い込まれて仕方なく彼の前だけでなのだから。

試験だろうがアンサンブルだろうが、彼は彼の音を通してきた。それが通用しないならいつだってこんな音大辞めてやらあ。それが彼

の口癖だった。もともと親との約束で仕方なく入った学校。もうとつくに飽き飽きしていたのだから。

「じゃあいいかな、テンポは付点四分で九十二。君から合図を出して」

もう鍵盤上に手を置く高臣に、樹生はあわてて問うた。

「待ってくれ、せめてこの曲の題名くらい教えてくれよ」

太郎と高臣が目を合わせる。そして高臣はゆっくり樹生の方へ顔を向けると重大な秘密を告げるかのように厳かに言った。

「ル・トンボー・ドウ・クープラン、日本語で『クープランの墓』という意味だよ」

#30

十六分の十二拍、元が#一つだからアルトサックスでは#四つ。そのくらいの初見はいくらでも樹生は利くつもりだったが、なにぶん、曲も知らなければ雰囲気すらわからない。

おまけに相手は手書きの譜面。ラヴェルなんて作曲家の名前すら初めて聴いた。普段は全くクラシックなんて聴かない。

樹生にとってG大は、サックスを吹くためだけの口実にしか過ぎなかった。

案の定、十五小節目の上昇旋律で引つかかった。高臣が冷たい視線を樹生に送る。

樹生はいつもと全く勝手が違って、とまどい顔を見せていた。両手をGパンにこすりつける。本気を出すときの彼の癖。

「三度目はないからね」

「うるせえ、今度は間違えねえよ」

言い返す言葉が少し和らぐ。それは高臣の声のトーンの変化を敏感に感じたから。

彼は口元をほんの少しゆがめ、遠目で見るとまるで微笑んだかのようだった。

……伊織くんが笑うなんて……。太郎が息を飲む。

樹生はしっかりとアンブツシユアを作って、やや深めにマウスピースをくわえた。そして柔らかなヴィブラートをかけ、澄んだこの美しい旋律を奏で始めた。そこに、原曲よりずっと多くの豊かな和音が高臣によって加えられる。たった二人だけで演奏しているとは思えないほどの音の広がり、太郎は驚きを隠せなかった。

同じ音型のパッセージが続く。そのたびに樹生のサキソフォンがどんどん変化してゆく。自然とクレッシェンド。

自分でアレンジしたはずの音が、それ以上の広がりを見せていく様をまざまざと見せつけられ、太郎にとってもそれはとても新鮮だった。

その横にそつと西原教授が立つ。いつの間に来たのだろう。太郎に向かつてにっこりする。

「早く他の教授たちにも聴かせたいですね」

小声で太郎はささやく。樹生にこんな音が出せるなんて。

「彼には本来、こういう美しい芸術性があるんですがね。本人はとにかくジャズが吹きたくて仕方ない。もちろんその道に進んでも大成するでしょう。でも、せめて在学中だけでもこの才能を開花させて欲しい。私はそう願っているんですよ」

西原教授は穏やかにゆっくりと言った。そしてこうも付け加えた。

「あの伊織くんの表情、彼にとってもいい経験になるかもしれないね」

初めて会う二人、初めての曲。それなのにこんなに豊かに共鳴し合うなんて。

ふと太郎は、なぜ高臣が樹生のことをこれほど理解していたのかとても不思議に思った。

……井上樹生となら、やってもいい……

彼は高臣の言葉を思い出していた。

忙しい二人で有名だった。国内のコンクールで勝ち続け、いつ大きな国外のタイトルに挑戦するのか時間の問題だと言われ続けてきた伊織高臣と、百戦錬磨のミュージシャンに交じってライブハウスどころか大きなステージにでさえも平気で立つてしまう井上樹生。

なのに約束の練習日には、二人とも必ず顔を出した。学内の作曲科発表会まであと二週間。その日も時間に遅れることなく二人は現れた。噂を聞きつけて他の科の教授や学生までもが見に来ることも増えた。誰もがその取り合わせに驚き、樹生の音の変化に目を丸くした。

「おーお、やってるやってる。彼が噂の井上樹生かあ。ねえほら本

物の伊織様だよ、美沙子」

太郎の肩に親しげに手を置き、耳元でぷつつり切った黒髪を揺らして同い年くらいの女性が声をかける。

「和奏さん来てくれたんですか？ いやあ、いいでしょう？ 自分でアレンジしておいて何ですが」

太郎はその柔和な顔をさらにくしゃくしゃにくずして、自分の恋人である和奏に笑いかけた。

黒のワンピースはひざ上丈で、和奏の美しい脚のラインを強調していた。高いヒールが似合っている。

それはとても洗練されていて、どこか垢抜けない国立大のG大にはいないタイプだ。

美沙子と呼ばれた女性は、グランドピアノの方に視線を送ると頬を赤らめた。柔らかな生地ブラウスにフレアスカート。肩から掛けたレスンバックを見なくとも音大生とわかるような雰囲気。長い髪を肩辺りまでたらし、純真そうな表情で高臣を見つめていた。

「この子ね、東條美沙子。太郎ちゃんはまだ会ったことなかったよね。そりゃもう伊織様の大ファンなんだから」

「もう、止めてよ和奏。からかわないで」

美沙子ったらね、伊織様のお写真を部屋に飾ってあるんだから。ふざけて続ける和奏の言葉とそれを否定する美沙子の焦り声。周りから視線が集まり、思わず二人は身を小さくする。

「作曲科二年の坂峰太郎です。今後よろしく」

小声でにっこりと挨拶をすると、美沙子はF女子音大三年ピアノ科、和奏と同じクラスなんですと優しい声でそつとささやいた。雰囲気も洋服のテイストも全く違う。それでも気が合うのだろう。まるでレッスン室の低いステージ上の二人のように。

黙って三人は演奏者の方を見た。樹生のいつもの荒々しい音はなりをひそめ、天使の歌声と称されるクラシックサクソフォンの澄んだ音色を響かせていた。目を固くつぶり、表現することに集中する。

そして、高臣は…。

彼は鍵盤も楽譜も無視して、ただただ、吹き続ける樹生の姿を見つめていた。

指先は正確にその音を奏でる。しかし彼の瞳に映るものは、樹生だけだった。

3 1

練習が終わり、いつものように樹生と太郎が曲の解釈について打ち合わせをしようということになった。

何せ、それまでろくに聴いたことのない作曲家だ。いくら自由度を高くといっても楽譜の指示は絶対だ。

毎回太郎の講義を聞かされる気分で、樹生は渋々ついて行くのだ。

「ねえ、私たちも一緒に行つていい？」

積極的な和奏が気さくに声をかける。その姿を見てあわてて樹生は太郎の袖を引っぱった。

「おい、太郎！何だよあのねーちゃんはや」

もう樹生からすっかり呼び捨てにされていても、彼はニコニコと返

事をした。

「ええまあ、ボクの彼女というかお付き合いさせていただいている
というか」

「おまえそんなガキみてえな顔で、こんないいねーちゃんと付き合
ってるっていうのかよ！どこの大学だ？女子大か？おれにも誰か紹
介しろ！」

樹生は太郎に詰め寄った。その声が和奏に聞こえたのだろう、くす
くす笑い声を立てて自己紹介を始めた。

「私はF女子音大の神崎和奏。ピアノ科なの。噂の井上くんとお会
いできて光栄だわ。こっちは……、ほら美沙子、自分で言いなさい
よ」

和奏に押されておずおずと前に出る美沙子を見て、なぜか樹生は眉
をひそめた。顔がこわばっている。
それを見て、太郎は吹き出した。

「何をそんなに固まってるんですか、井上くん。ものすごく緊張
して……」

「うるせえ！」

やっと美沙子から名前を聞き出すと、樹生はどうしていいかわから
ないといった表情で視線を泳がせた。

ポケットに手をつ込んで、何も言えずにいる。

美沙子もまた、下を向いて黙ってしまった。

「ありや？ 憧れの伊織様を拝ませてあげようと思ったただけなのに、これはいい線いくかもね」

和奏がこつそり太郎に耳打ちする。そうして二人で目を見合わせて微笑んだ。

その四人を、ピアノの蓋を閉めながら冷やかに見つめている高臣。唇をゆがませてほんの小さくため息をつく。おそらく誰も気づかなかっただろう。

「じゃあ、学生協上の『ダル・セーニョ』でも行きますか」

学部生向けの安い喫茶店に向かって四人が歩き出したとき、不意に高臣が声をかけた。

「その打ち合わせ、僕も参加すべきじゃないのかな」

驚いたのは太郎と樹生だった。こんなことを高臣が言い出すなんていつも忙しいからと、練習が終わればさっさと帰ってゆくのが通例だった。

ましてやラヴェルは彼の得意中の得意、今さら太郎に講釈を述べられても、釈迦に説法だろう。

「も、もちろん。君の時間が空いているのなら大歓迎ですよ、伊織くん」

引きつりながらも太郎が応える。

その声を聞いて、高臣はさっさと先頭を歩き始めた。時間がもったいない、早く行こう、と。

喫茶店は中途半端な時間でがらに空いていた。六人掛けのテー

ブルを確保すると高臣はさつと樹生のそばに座り、オーダーをする間もなく楽譜を広げた。

「君のこのリゴードンの入りだけどね」

「ちょ、ちよつと待ってくれ高臣。おれも譜面出すから」

そう言いながら樹生は自分用に書き直した楽譜を取り出した。

そこには自分の字でびっしりとメモが書き込まれている。彼なりに真摯にこの曲に取り組んでいる証拠だった。

のんびりと注文を取りに来た店員にコーヒーとだけ冷たく答え、高臣は熱心に樹生へと音の解釈を語り続けた。

その雰囲気は圧倒されて、あとの三人はしばらく声も出なかった。

「ねえ、いつもこんな感じなの？」

ようやく気を取り直して和奏がささやく。それに太郎は思いきり首を振った。

「ボクはこんなにしゃべる伊織くんを見るのは初めてです。ましてやこの二人が真面目にラヴェルの話をし続けているなんて」

ほんの話のすき間を見て、和奏が二人に声をかける。さすがは物怖じしない性格だ。

「初めまして伊織高臣さん。よくお噂はかねがね。せめて自己紹介くらいさせてもらってもいいかしら。この子なんて伊織さんの大ファンで……」

その言葉に蔑んだ視線を返す。さすがの和奏もぞくつとした。

高臣は何も聞かなかったかのように、再び樹生に向かって話し始めた。
レッスンがあるからと、言いたいことだけを言い切って高臣が立ち上がった。

「お、おい。来週が最後の練習だよな。また打ち合わせ来てくれるか？」

あわてたように樹生が話しかける。

その言葉に高臣は、あきらかにうつすらと微笑み、君が必要と思うなら、と答えた。

彼がドアの向こうに消えたとき、四人はようやく緊張から解き放たれたように大きなため息をついた。

「どう美沙子？あれが伊織様の実体なんですけど、まだファン？」

「でも、ラヴェルの解釈はさすがだわ」

柔らかい声色に、ゆっくりとした口調。しかし樹生は彼女の方を見ることより、さっきまで必死に書き込んでいた楽譜を見直すのに熱心だった。

「井上くん……」

「ちょっと待っててくれ。今あいつが言ってたことまとめてっから」

樹生もまた、少しずつラヴェルに惹かれつつあった。

夢中になっているのは、しかし、本当にラヴェルだったのだろうか。太郎は、さっきまでの二人を思い出していた。

学内で行われるほんの小さな作曲科独自の発表会。

普段など、学部生と教授、無理やり駆り出された研究室の連中が、仕方なく客席に着くという会でしかなかった。

どうしてかって？大学に入ってたかだか二年程度でろくに作曲法も身についていない習作を延々と聴かされる身にもなってみたら、自ずと答えは出るだろう。

だが今回は違った。

噂を聞いた他の科、特に管楽器科の教授陣がずらりと席を埋め、ピアノ科のお偉い先生方ももちろん多くが集まっていた。

太郎はその面子を見て、身が引き締まった。

お目当ては自分のアレンジではない。それはよくわかっている。しかしここに来ている観客の多くが、自分の編曲したラヴェルを聴きに来たこと、それは間違っていない。

演奏する訳でもないのに一番緊張したのは、おそらく彼だっただろう。

どうでもいいようなと言っては失礼だが、前座代わりの三曲が終わった。おぎなりの拍手。

そして、ステージに登場する伊織高臣と井上樹生。

小ホールの空気が瞬時にして変わった。正反対の二人、しかし彼らはどちらとも独自の存在感を示していた。

太郎が舞台に出ていって、たどたどしく楽曲の説明やアレンジの意図を話す。その間にも樹生は何度もストラップを調整して、リードを湿らせた。

太郎がぎこちない足取りで袖に引っ込む。客席にいるはずの和奏や美沙子もはらはらしていることだろう。

樹生は高臣の方を見やった。

高臣が微笑む。

その表情に驚きを隠せなかったのが、ピアノ科の教授たちだった。こんな柔らかな高臣を見るのはおそらく誰もが初めて。好きなラヴェルだからか。それとも。

アイコンタクトを取って、樹生は軽く楽器を上には振りあげた。

二人同時に前奏曲に突入する。樹生が奏でる旋律のあとを高臣が追いかける。直後の上昇旋律。

ふっと緊張が途切れ、ほんの小さなカタルシスを覚える瞬間。

樹生の音はあくまでも澄んで美しく鳴り響いていた。ただ綺麗なだけではない。

その中にエネルギーを内包した豊かな響き。

もともとブロウで激しいジャズを吹くほど音量も音質も太く力強いものを持っているのだ。

それを極限まで抑え、すべて共鳴させる方向へとむけているのだから、そのパワーは計り知れない。

これが井上樹生のクラシック、か。

西原は穏やかな目で彼を見つめ、他の教授たちの驚きやとまどい顔を満足そうに眺めていた。

全部で六曲ある組曲のうちの三曲を選んで編曲された。二人の音はこのホールを満たし、近代フランス印象派音楽の豊かな和音の余韻が、いつまでも残った。

ほう、っと大きなため息をついて、樹生がマウスピースから口を離す。

客席から聞こえ始めたまばらな拍手は、そのうち大きなものへと変わっていった。

学部生の中にはスタンディングオベーションをしている者までいる。ようやく樹生はいつもの表情に戻り、偉そうなそれでいて嬉しげな

笑顔を見せた。

そしてピアノの方に近づくと、大きな手を高臣に差し出した。

高臣はしばらく音の余韻に浸っていたが、その手に気づいて美しい瞳を大きく開け、とまどった様子を見せた。

しかしおずおずと手を伸ばすと、立ち上がった。

樹生はそんな彼の手を握り、ぐいとステージ前に引っぱり出す。拍手は大きくなった。

彼はそこで調子に乗り、まるでジャズフェスのステージでもあるかのように二人手をつないだまま両手を高く掲げた。ひゅーひゅー、そんなかけ声まで聞こえてきた。これ以上放っておくと何をしでかさか、太郎はあわててステージの中央まで駆けより、おとなしく二人に頭を下げさせると自分もぺこりとお辞儀をした。そのまま袖に二人を引っぱってゆく。

拍手の中に若干の笑い声が交じったのも致し方ないのかもしれない。袖にはすでに客席から急いで向かった和奏も美沙子もいて、五人は何となく顔を見合わせて微笑み合った。

言葉がなくても通じ合える、そんな感覚を共有できたような気が、このときには確かに感じたのだ。拍手は鳴りやむことはなかった。

「僕は反省会…」と聞いたのだけだ」

おー、やっと来た、樹生はとまどい顔の高臣を狭っちい玄関から何とか部屋に引っ張り込む。

もうすでに樹生の下宿には他の四人がそろっていた。

小さなテーブル兼こたつの上には、ビールの缶とつまみとケーキ。律儀にもそれらは手をつけられることなく並んでいた。一応高臣が来るまでは、とみんな自制していたのだ。

「おまえ、もう終わったってのに、何こんなに楽譜持ってきたんだよ。重てえだろうが」

「だって、反省……」

高臣にとって自己の演奏を振り返り、次へのステージに生かす。それこそがいつもの反省会のイメージだった。教授と二人、録音を聴き返すこともあれば、楽譜をもう一度細かくチェックしたりするのが常だった。

ところがこいつらと来たら。

「バーカ。反省会つつたら飲みに決まってるだろ？ 飲みに。終わっちまったことを今さらぐだぐだ言ってもしょうがねえつつの。ほら、座って座って」

高臣はどうしていいかわからず、言われるがままにぺたんこのクッションに座った。

高そうなコットンパンツにしわが寄りそうだ。

無理やり和奏がその手にビールを持たせる。飲めねえなんて言うなよ、樹生がドスをきかせる。

「そ、それは飲めないこともないけれど」

いつもの冷静な、というよりも冷酷な仮面がかぶれずにいるような居心地の悪さ。

それをさっきから高臣は感じているようだった。

「それじゃあ、坂峰太郎編曲、伊織高臣・井上樹生演奏、『クープランの墓』の大成を祝って、かんぱーい!!」

すっかり仕切り屋に徹することに決めたらしい和奏が声を上げる。

「今日の約束は、音楽の話をしないこと。いいな！破ったヤツは罰ゲームな！」

調子に乗った樹生がでかい声を張り上げる。

「そんな！じゃあ僕は何も話せない…」

下を向いた高臣を見て、樹生がニヤリと笑う。

「そりゃよかった。罰ゲームはたんまり用意してあるから」

「ずるいよ！そんなこと急に言われたって！！」

思わず大声を出して高臣が抗議する。

四人はそのあわてぶりにくすくす笑い出すと、さっきよりずっと優しい視線を彼に向けた。

「ようやくおまえの本当の声が聞けたな、高臣」

高臣は樹生のその言葉に、照れたような複雑そうな表情でみんなを見返した。

#33

坂峰太郎、井上樹生、そして伊織高臣。

これほど違和感のある取り合わせも珍しいだろう。

しかしあの発表会があってから、三人はよくつるんで大学構内を歩

いている姿を見られるようになった。

その変化を一番喜んだのは、ピアノ科の教授たちだった。

技術的には何の問題もない彼の演奏に、人間的な深みが加われれば。

そんな思惑もあったに違いない。

もつとも、そばにいてその会話を聞いている限り、三人は一緒にはいるがほとんど高臣は黙ってスコアを読んでいるか、難しい原書を広げているが多かった。

太郎と樹生のバカ話を、時折顔を上げて冷笑する。その程度の関わりでもないよりはマシ、か。

「こないだの写真、やっと現像に出したんですね。やっぱりボクが出せばよかった。井上くんに頼むからこんなひと月もかかるんですよ」

「うるせえな、おれはいろいろ忙しいんだよ。でもほら見るよ、この緊張から解放された太郎の顔！」

二人はあの発表会のあと、五人でこっそり撮ってもらった写真を眺めていた。

それなりにみな衣装もセミフォーマルで、体格のよい樹生だけが似合わない。それを指摘すると太郎は思いきりヘッドロックを掛けられた。

「ちょ、ちよつと伊織くん、助けて下さい！」

その太郎の言葉に自然に笑い顔を向ける。確かにあれから高臣の表情は柔らかくなったように感じた。

全く助ける意志はないようだ。

「そうだ、高臣。今度おれライブやるから見に来いよ。おまえの友

達も誘ってさ。券何枚いる？」

何気なく話を向けた樹生に、ぎこちない表情に戻って高臣は答えた。

「友達なんて、僕はいないから」

その言葉に二人は顔を見合わせた。樹生はおずおずと続ける。

「だっておまえ、いつもいいお姉ちゃん引き連れて歩いてんじゃねえか。構内中で有名だぜ？」

勝手についてくるだけだ、僕の友達でも何でもない。
その寂しげな表情に気づかぬふりで、樹生は声を上げた。

「じゃあ、おれたち二人とまあ神崎さんと東條さんを入れて、今は四人もいる訳だ。一気に新しい友達増えてよかったな、高臣」

そう言いながら、彼の背中を大きな手のひらでどつく。太郎もにっこり笑う。

高臣は、その白い頬をうつすら朱に染めながら下を向いて押し黙った。

新しくできたト・モ・ダ・チ。

その響き確かめるように高臣は一人にわからないようにそつと口元をゆるめた。

ぐつと唇を噛みしめて黙って聞いていたかのんは、身体を和奏に預けるようにした。

「仲がよかつたんでしょう？その頃はお父ちゃんも伊織さん、も」

さらさらの髪をかかえ込むように抱き締める和奏は、そうよ、と静かに言った。

事実、あの高臣が笑顔を見せた、しゃべった、原書を手放して会話に加わった。

毎回距離は縮まり、ときには三人だけではなく他の友人たちを交えての飲み会にまで高臣は参加した。

あまりの変化に最初とまどっていたピアノ科の同期たちも、当たり前の高臣を仲間として受け入れるようになっていった。

練習の鬼だった彼が自主練習を怠って課題をあわてて仕上げる様を、樹生と太郎は大笑いして見ていたくらいだった。

二年の夏が過ぎ、秋を迎え、このままの関係がずっと続くのだろう、お互い道は違えども卒業しても長くつきあえる友人として。誰もがそう思っていたのだ。

秋が終わろうとしていたあのときまでは。

和奏がかのんの、きめの細かい陶磁器のような肌をそっと包み込む。話しあぐねてとまどいの表情。

でも、まっすぐ彼女を見つめるかのんの瞳に嘘は言えない。真実を、いつかは誰かが。

だったら変な噂として耳に入れるより、一番そばにいた私が適任なのだろう。けれど。

和奏の逡巡が伝わったのかどうか、かのんは首をほんの少し傾げた。話すの辛い？あたしが聞かない方がいいこと？その言葉で逆に和奏は心を決めたようだった。

「これだけはわかって、かのんちゃん。誰もがあなたを愛している。ご両親も私たちも誰もがあなたが生まれてきてくれたことを喜んだの。それは事実。どうかそれだけは」

「大丈夫。いつも言われ慣れてるよ。あのお父ちゃんですえ、そう言っただよ」

かのんはわざとくすりと笑って見せた。本当に大丈夫、あたしは何を聞いても。

太郎が二人のために飲み物を入れて、そばにそつと置いた。チョコレートを添えて。

和奏にはベルギー産のチョコに合うブランデーを、そしてかのんにはミルクの多いカフェオレ。

「たっちゃんはその頃から不器用でね、美沙子のことが気になるくせにライブにも誘えなかったのよ」

そう、春に出会ってから樹生は美沙子と二人きりで会うことさえできなかった。

いつも和奏に話しかけて、それとなく美沙子へ伝える。彼女はそれを微笑んで聞いている。

そんな関係がずっと続いていた。

「もうじれったいなあ、さっさと告白なり付き合っちゃえばいいのに」

ふくれる和奏に、誰もが君のように積極的にはなれませんよと太郎は笑った。

「でも、そのわりにはしょうもない土産とか買ってくるのよね。何

か子どもっぽいキーホルダーとか。あの豪快な井上樹生がおつかしいわよね」

人の純真な気持ちを笑ったら悪いです。太郎は少し真面目な顔で彼女をにらんで見せた。

「それに……」

太郎には気になっていたことがあった。意を決して美沙子へ近づこうとする樹生を、必ず呼び止める声。

「樹生、このあいだ君の言っていたグラスノフのサキソフォン協奏曲のことだけど」

まるで腕を取るかのように高臣は樹生を連れてゆこうとする。後ろ髪を引かれるように、それでも樹生は逆らうこともせずにレッスン室へと向かう。

何が引き合つのか、樹生にとっては高臣の言葉は絶対だった。それぞれの課題を無視して、サクスの数少ない協奏曲を練習していることすらあった。

一度、太郎は樹生に訊いてみたことがあった。なぜ伊織くんの誘いは断れないのですか、と。

「あいつのあの音。あれを聴いてもおまえは冷静に断れるのか？」

逆に樹生は太郎をまっすぐに見返すと、真剣に問うた。

「ラヴェルなんか知らねえ、今だってよくはわからねえ。だけどあいつのあの音は本物だ。それだけはどんなにおれが鈍感でもわかる。何であいつはあんな音が出せるんだ？」

ふう、小さく息をつくとき太郎は話し出した。噂ですよ、あくまでもそう前置きをして。

「伊織くんのお母様は日本人とフランス人の、というよりバスク人とのハーフだったそうです。フランス留学されていた日本人のお父様と結婚されたとか」

「バスク人？」

モリス「ラヴェルは母親がバスク人なんです。そしてラヴェルはその母を慕っていた。

バスクの血を引くことを誇りに思い、音楽を捧げた。

そんな血が伊織くんをラヴェルに傾倒させるのかもしれませんが。

樹生は太郎の言葉を、こぶしを唇に当てながらじつと聞き続けた。

#35

「バスクって？」

太郎の入れてくれたカフェオレを冷ましながらかのんは訊いた。何度も出てくるその名前、でも社会の授業でもその名を聞いたことなどなかった。

「フランスとスペインの両方にまたがっていてね、バスク語を話す人びとの国よ。」

でも、周りのヨーロッパの文化とは少し違いがあって、わりと独立しているの」

「フランス人とは違うの？」

「ラヴェル自身は、生まれてすぐにフランスへ来てしまったけど、母親とその故郷をとて愛していたと言われているわ」

たくさんの小国がひしめくヨーロッパ。その中でも特異な文化を開花させてきたバスク、そしてバスク人。

著名なサッカー選手、一時期一世を風靡したラベック姉妹、そしてあのフランススコッザビエルもバスク人である。

和奏はほんの少しくすつと笑って、ラヴェルにはね、こんな話もあるのよと続けた。

「ラヴェルの写真とか見たことある？」

首を振るかのんに微笑みかける。

「とても端正な顔立ちで理知的な瞳、世の貴婦人たちが放っておくはずがないわよね。その彼女たちに向かつて『わたしは、綺麗な女性より、綺麗な機関車を好みます』と叫んだ有名なエピソードがあるの」

それって、あの男が言いそうなセリフ。冷酷な瞳を持ち、透き通るような肌のバスク人の末裔。

おそらく誰もが彼を思い浮かべるのだらう。和奏もまた、伊織くんなら言いそうねと付け加えた。

「だってあいつはモテたんでしょう？」

そりゃ、女の子には不自由しなかったようだけど、決して決まった

彼女はいなかった。

というより興味も持てなかったようよ。私たちと出会う前までは。和奏の声がわずかに曇る。

その変化に気づかないかのかんではなかった。

ブランデーをそつと口に含むと、和奏は物語を続けた。

部屋は、太郎のつけたバロック音楽で少しずつ満たされ始めていた。

「定期演奏会に出演してみないかい？」

西原教授に話を振られて樹生は心底驚いた。そんなもの、自分にはとんと縁がないものと思っていたからだ。もちろん見に行ったことなどない。

「オレのサククスで何しろって言うんすか」

もちろん、サキソフォン協奏曲を。につこり笑う教授に引きつるしかなかった。

前ほど抵抗はなくなったとはいえ、卒業後にクラシックなんぞ吹くつもりは全くなかった。

おれはとつとこんなところを出て、正統派のビバップをやるんだと意気込んでいたのだから。

そんな樹生の心を見透かしてか、教授は静かにこう言った。

「君のクラシックの集大成を残しておきたくてね。さすがの私でも一度で選考を通ると思わない。どうだろう、今回は度胸試しで選考会にだけでもエントリーしてみようよ」

ただでさえ少ないサキソフォン協奏曲だ。枠の限られている年に数回の定期演奏会で、サククスコンチェルトをやったという話はここ

何年も聞かない。それこそ全日本管楽器コンクールで一位を取った大里順一ぐらいじゃねえのか。

「まあ、交響曲が管弦楽曲が二、三曲として。そうそう、ピアノ科は伊織くんをぶつけてくるらしいよ」

あくまでも穏やかに付け加えた教授の言葉に、樹生は何かを刺激される思いだった。

あいつがやるのなら。

「じゃあ、まあ、譜面くださいよ。ざっと見てきてやってもいい」

偉そうな樹生の態度に、それくらい自分で買いなさい、と持っていた教則本で教授は頭をはたいた。

樹生はさっきから握りしめた紙片に書かれた数字を見つめていた。後ろで太郎が笑いをかみ殺している。

かけるなら早くかけなさいよ、和奏がせっつくのをうるせえなと言いつ返す。

「たかだか協奏曲の練習伴奏を頼むだけでしょう？そんなの自分でさっさと電話して頼めばいいじゃない」

高臣がピアノコンチエルトを弾くのなら、あいつに伴奏を付き合わせるのは無理だ。

ならばと意を決して和奏に頼み込んだのだ。東條さんをお願いできないか、と。

「べ、別に和奏でもいいんだけどよ。太郎の彼女と二人きりつてもまじいだろ？」

無理やり言い訳をする樹生に、へえーじゃあ美沙子と二人きりならいいんだ、と和奏がまぜっ返す。
もうすでに樹生の顔は硬直していた。

「ごめんごめん。ほらこれが彼女の家の電話。箱入り娘だから十分気をつけてね。第一印象が大事よ。さ、がんばって」

そう言っただけ番号を渡されてからもう数分は経っている。純情にもほどがあるよね、一目惚れらしいから。
後ろで無責任に二人がささやき合う。

ごくつと喉を鳴らしてから樹生は受話器を取った。携帯電話などさほど普及していない頃、家に電話するということはとても敷居が高かった。まず家族が出るだろう、何と言って代わってもらえばいいのか。

「はい、東條でございます」

上品そうな女性の声、母親だろうな。しどろもどろに大学名と名前を告げ、何とか美沙子を出してもらおう。
父親でなくてよかった。心から樹生はほっとしていた。

「私がコンチエルトの伴奏を？」

美沙子の声はやはりいつものように柔らかく穏やかだった。

とまどい気味の声に急いで用件を伝えようと樹生は言葉をつないだ。

「G大の定演に出ないかって言われてんだ、おれ。まあ通ることはないだろうけど選考会だけでもやってみようってことになって。とう、東條さんに、れ、練習のば、伴奏をお願いできないかな」

手をひざ上にこすりつける。しばらく無言が続く。直接こんなに長くしゃべったのは初めてかもしれない。

「……私でよければ」

おっしやあー！

声にならない声でポーズを決める樹生に、太郎と和奏は大笑いした。

#36

レッスン室の一角で、樹生と美沙子がたどたどしい挨拶を交わす。それ以上ものも言わずに彼はすぐに楽譜を広げた。言葉よりも音。それが彼らにとってもっとも楽しい会話。

もとよりサククスという楽器の歴史は浅く、著名な作曲家でも協奏曲を残している例は少なかった。あのドビュッシーは、ある婦人の依頼を断りきれずにいやいや作ったと言われているが本当かどうか。その楽器を、一番効果的に使用したのはやはりラヴェルだろう。展覧会の絵でのソロ、そしてかの有名なボレロ。サキソフォンの音色やある意味ジャズの要素をうまく生かしたそのアレンジ。

クラシックのマウスピースを使うとき、だから樹生はついラヴェルの横顔を思い浮かべ、春のあの曲を思い出すのだった。

……あのとき初めて、東條さんに会った……

いつも控えめで柔らかく微笑む、和奏のそばで穏やかに。それでいて自分を持っていて言うべきときには、そつと相手の目を見ながらたしなめるように伝える。

その心遣いに、芯の強さに、樹生は惹かれた。ろくに話しもしない

うちから彼女は別だと思っていた。そしておそらく美沙子もそう思っ
てくれているのではないか。淡い、何の根拠もない思いこみ。
今回は日本人の現代音楽を取り上げたから、難易度も高かった。そ
れでももう弾き込んであるらしく、美沙子は前奏を軽く弾いてみせ
た。

「テンポはこれくらいでいいかしら」

「え、え、あ、はい。それでお願いします」

いつもよりよほど緊張しながら、樹生はクラシック用にアンブッシ
ュアを作った。

下唇をほんの少しばかり巻き込み、唇全体で優しくマウスピースを
包み込む。できるだけ遠くまで何の機械も通さずに飛ばすために。
美沙子の音はイメージ通りとても素直で、合わせやすかった。何せ
今まではあのアクの強い高臣とばかり吹いていたのだから。

これが伴奏なのか。

彼女はF女でも、合唱や他のソロ楽器の伴奏を頼まれることも多い
という。

自分を抑え、主張せず、相手がもつとも演奏しやすいように。
時折、アイコンタクトを取る。

樹生はそれでもう十分満足だった。

ある日の夕方、樹生が管楽器科の連中とつるんでだべっていたとき
だった。

ピアノ科やヴァイオリン科と違って、あきらかに建物にも差がある
ように感じるのはひがみか。

ドアにはがれや、誰かが書き殴ったあとまでもある、雑多な印象。
でかい声で笑い転げていた樹生のそばへと、高臣はつかつかと足音
を立てて近づいていった。

お、おい。周りの連中が先に気づき、目配せし合う。樹生が気配を察して振り向くと、そこには顔をこわばらせて高臣が立っていた。

「ちょっと来てもらえるかな、樹生」

「あんだよ、用事ならここで言えよ」

あくまでも笑いながら、気さくに樹生はそう言った。おれたち帰ろうか？他の友達らが気を利かせようと腰を浮かせるのを手で押さえる。

「二人だけで話したい」

「今さ、管楽器科バンド祭の打ち合わせしてんだ。あとでもいいか？」

表情が硬い。この頃ずいぶん人間らしくなったと評判だった高臣ではない。

まるで前に戻ったかのような冷酷な瞳。

それにようやく気づいて、樹生は小さくため息をつくと立ち上がった。わりい、すぐ戻る。仲間にそう告げる。

突っ立って腰に手を置き、樹生は高臣に向きあった。

「どこで話せばいいんだ？レッスン室か、ダル・セーニョか？」

「このあいだの店で。いつまでも待っている」

それだけを吐き捨てるように言うと、高臣はもう樹生の方を見向きもしないで踵を返すと足早に去っていった。

このあいだの店？あのバカ高い気取った店のことか。樹生は自分の

穴あきＴシャツを手で引っぱると、これじゃ行けねえなあと独りこちた。

「リュミエールノワール」：白く輝く光という名を持つその店は、入り口はいつもまばゆいばかりのライトに照らされていた。しかし一歩中に入れば、落ち着いた間接照明が出迎える。後方の壁に配列される美しい洋酒のボトルら。

樹生は高級バーでバンドのトラが入ったときにしか着ない、ただ一つのジャケットを羽織ってきた。確か前もこの服で着た。まさか覚えてはいまい。

高臣はもうすでに来ていて、カウンターの一番端に身体を斜めに腰掛けていた。

絵になる男。

樹生から見てもそう思う。ましてや学内の女の子にしたら憧れの対象になっても当たり前だろう。

高臣のとなり、よっ、と手をあげて座る。彼は一瞥しただけでまたすぐにカクテルを口にした。

ギムレット。また格好つけたものの飲みやがって。

いつもの樹生ならそう軽口も叩けただろう。だが今夜の高臣は様子が違う。

まるでときが逆流したかのように、誰をも寄せつけない雰囲気が漂っていた。

バーテンダーが注文を取りに来る。スコッチ、ダブルで。取りあえず言ってみる。それくらいしかこんな店で飲める酒の名前なんて知らない。静かに微笑むとその男は、お気に入りのジャケットですか、お似合いですね、と穏やかに声をかけてきた。

樹生の顔が引きつる。だからこんなところ来るのはイヤだったんだ。

「話ってなんだよ、高臣。なんでこんなバカ高い店……」

「定期演奏会出るんだって？」

唐突に高臣が切り出す。声が冷ややかだった。それに何と答えて良かわからず、思わず口ごもる。

「出るつつたって、試しに選考会に出てみようってだけだよ。おれが受かる訳ねえし」

「なぜ僕に黙っていた！」

黙ってなんかいねえよ、おまえだって忙しそうで言う暇なんてなかったじゃねえか。

その声は心なしが小さかった。なぜか後ろめたい思い。

「伴奏を東條さんに頼んだって本当なの？」

樹生はそのもの言いにだんだん向かつ腹が立ってきた。

なんだこいつ。おれに因縁つけるために呼び出しやがったのか？

「なんでおまえに断らなきゃいけないんだよ」

「なぜ僕を指名しなかった！」

鋭く射るような目。冷酷で人の感情を持ち合わせているかと言われている頃の、あの瞳。

「だって、だっておまえも定演出るんだろ？ピアノコンチエルトをやるんだろ。おまえが

選考会に出ればもう協奏曲の枠は決まったようなもんだ。だからお

れは今回はホントに度胸試しのつもりだと、西原のじいにも言われ」

思わず樹生の言葉が止まった。

高臣のこんな表情は見たことがない。冷たいのでもなく、蔑むのもなく。そう、言ってみればこれは切なくて幼い子どものような。

「僕はもう、いらないのか？」

誰もそんなこと言っちゃいねえ。今回はたまたまだ。いくら言葉を尽くしても伝わることのない上っ面のやりとりがもどかしい。

「君は、東條さんが好きなんだろう？」

違うとすぐに否定するつもりだった。なのに、なぜか喉がからからに渴いて舌が張りつく。

樹生は何も言えなかった。それが答えだと高臣は察した。

高臣は一度固く瞳を閉じた。

そして、次に関けたときにはその口元はほんの少しゆがめられていた。

「相変わらずわかりやすい男だね、君は。でも、彼女の気持ちは確かめたのかい？」

凍り付くほど冷ややかな物言い。

樹生は、次々と変わるそんな高臣の表情に惑わされるばかりで、何一つ彼に声をかけることすらできずに、ただグラスを掴んでいることしかできなかった。

「ごめんなさい、遅くなってしまっ」

美沙子が練習時間に遅れるなんて珍しいことだ。

どうしたの？と訊けるほどには樹生も彼女との二人きりの空間に慣れてきた頃のこと。

これで何度目のレッスンだろう。

美沙子はそのままにしていた長い髪を耳に掛け、すぐにあわていても使っている綺麗な布の髪留めで一つにまとめた。

「ちょっと、楽器屋さんに寄ってきたから」

頬が上気している。

いつもと違うその雰囲気にとまどいつつも樹生は楽譜を取り出した。

気の利いたことなんぞ彼が言えるはずもない。

前奏が始まる。テンポが速い。わずかな差異でも曲想にはかなり影響する。きつちりと伴奏を務めるタイプの彼女にしたらこんなこと珍しい。

樹生は自分のパート部分が来ても吹き出すことをせず、楽器を一度ストラップから外した。

「井上くん？」

首を傾げ、振り向く美沙子だったがすぐに彼から目をそらした。

「今日は何だか、気が乗らなそうだね。止める？」

その言葉に目を見開くが、美沙子の心の動揺はたとえ鈍感な樹生で

あつてさえも見てとれた。

「まだ下練習だし、教授に見てもらうのはもっと先の話だからさ。また今度でも」

樹生の言葉に美沙子は唇を開きかけた。しかし、彼女の口からは何の言葉も出ることはなかった。しばらく無言が続く。意を決して美沙子が顔を上げた。

「井上くん、あのね……」

「今度、ひさしぶりにみんなでまた飲もうよ。このところ練習ばかりで集まれなかったし」

樹生なりに笑顔を作つて美沙子へそう誘いかける。彼なりの精一杯の距離を縮めるための言葉。

彼女はその先、何も言えずに黙り込んだ。ぺこりと頭を下げただけで、彼女は帰つていった。樹生はその後ろ姿をじつと見つめていた。

「たっちゃん！！あんた、ちゃんと美沙子と練習してんの？」

もう、たっちゃん呼ばわりかよ。和奏のキンキン声に樹生は面倒くさそうにハイハイと適当に返事した。

「じゃあ、もちろん自分の気持ちは伝えたんでしょ？」

何だよ自分の気持ちって、とたんに弱気になる樹生に、和奏は背伸

びして胸ぐらを掴んだ。

すっかり自分の音大よりもG大にいる時間の方が長いんじゃないんだろつか、そう思えるくらい和奏はこの大学の背景になじんでいた。協奏曲は現代物だったからよくわからない記号も多い。それを訊きに太郎のいる教室を訪ねた樹生は、いきなり和奏からの襲撃にあって面食らってしまった。

「美沙子に好きだってはっきり言ったんでしよう、って言うてんのよ！私は！」

好きって、そんな。あの強気な樹生が下を向いて居心地悪そうにしているのを見て、和奏はさらに大声を張り上げた。

「何そんな呑気なことしてんのよ！！美沙子が伊織くんときあい始めたつてもっばらの評判よ！！あんたはそのあいだ何してたのよ！！」

「えっ！？」

樹生が顔を上げる。この表情はとまどいと、混乱。

「伊織くんが取り巻き連中の女の子全部追っ払って、美沙子と歩いてたって」

「あ、歩くくらいなら、おれたちはみんな仲間で……」

「あの子の肩を抱き寄せてても？顔を近づけてささやき合っても？二人きりで食事に行っても？」

友達なら、訊いてみればいいじゃねえか。やっとのことですぶやく。

「私にも言わないのよ、あの子。今までこんなことなかった。何でも話して笑い合って、一緒に泣いてきた親友なのに。伊織くんのこととをいくら訊いたって、放っておいてしか」

高臣と東條さんが。樹生はこぶしをぎゅっと握りしめた。強すぎて爪が食い込むほど。

肩で息をしつつも彼は必死に自分を律した。

「彼女が選んだんならいいじゃねえか。おれたちはみんな仲良かったし」

「自分の気持ちも言わないで、それで横からかつさらわれてあんたそれでも男!？」

私たちももちろん伊織くんも、美沙子だってあなたの気持ちなんか丸わかりだったじゃない!!

なのに伊織くんは!!

「それ以上言うな。彼女はもともと高臣に憧れてたんだろ? だって付き合ってたって不思議じゃねえ」

押し殺した静かな声。和奏は思わず黙った。

「それであなたはいいの?」

ようやく和奏が口を開く。

「いいも悪いも、おれが決めることじゃねえだろ?」

樹生はあの夜の会話を思い出していた。美沙子を好きなのかと訊ねた高臣の顔。切なげな幼い子どものような表情。一人にしないでくれと言いたげな瞳。そして瞬時に戻ってしまった無機質で冷酷な…。

「……伴奏、私が代わりにやろうか？」

そう和奏が申し出るのに、本人に確かめてみるとだけ告げて樹生はその場から去っていった。

早く、早く一人になりたい。

のろまにも程がある。自分のことが間抜けでしうがなかった。何も言わなくとも気持ちは通じているなんて、勝手な思いこみにすがっていた。おれはただの大ばかやろうだ。

人には、伝えるべきときには言葉できちんと言わなきゃ伝わらない。ああそうさ、音だけで会話していた気になっていた。おれのサクスを理解してくれる人間はおれをも受け入れてくれるはずだなんて、そんな根拠どこにある？

樹木が色とりどりの葉を散らすメインストリートを、ただ一人歩く。普段でも目立つ樹生のことだ。その雰囲気察して誰も近寄ろうとはしなかった。

かさつ。

木の葉を踏む乾いた音。

ふと樹生が顔を上げると、そこにいたのは高臣と……美沙子だった。美沙子が息を飲む。高臣の手から逃れようとするのをわざと彼は力ずくで抱き寄せた。

「……」

樹生は何も言えない。それでも二人の顔から目が離せなかった。

「東條さんはね、僕の学生コンクールも見に来てくれたくらい前からファンだったんだって。嬉しいよね、そういう理解のある彼女で同じピアノ科で話も合うんだ」

わざとそうしているかのようにいつもより饒舌な高臣の声。できることなら耳を塞ぎたい。

できもしないことを樹生は考えながら必死に耐える。

「彼女の伴奏は続けていいよ。そうだよ東條さん。せっかく息のあったパートナーが見つかったんだから、選考会まで東條さんと樹生のコンビで行けばいいさ」

美沙子は視線を外し、何とか高臣の腕から離れようとしてはそのたびに彼に引き戻されていた。

「一つ……だけ教えてくれ、高臣。いつからおまえは」

いつからって？口元をゆがめるいつもの冷笑。素直で和らげな素の高臣はもうそこにはいなかった。

「ああ、いつから好きだったかって？それが訊きたいの？樹生は」

あごを少しあげ、蔑むような視線。樹生にとってはそれが怒りや恨みと言うよりもなによりも哀しかった。

「もちろん、初めて会ったときから」

耐えきれずに樹生はその場から離れ、唇を噛みしめた。背後から聞こえる高臣のほんの小さな笑い声。

高臣と樹生の間にあった何かが、確実に音を立てて崩れていった。

実際、西原教授とのレッスンは三日後で、今さらパートナーチェンジは難しかった。和奏だつてそれなりの弾き手なのは知っているが、難解な現代音楽を細部まで合わせるには時間がかかる。

けれど、もう樹生には狭いレッスン室で美沙子と向きあう勇氣はなかった。訊きたいことはいくらでもある。でもおそらく何も言えないのだ。

おれは大事なことは何一つ言えやしない。

樹生は自分の中の弱さに直面させられて一人自嘲するしかなかった。なぜ、なぜ高臣は…。

頭を振ってそのことを考えまいと、千番台の目の細かい紙ヤスリでリードの調整をし始めた。

今は単純作業に没頭して、何もかも忘れてしまいたい。

樹生は黙って手を動かし続けた。

「うーん、技術的には問題ないんだけどねえ」

西原教授はあごに手を当てて独りごちた。

レッスンの日が来ても、樹生も美沙子も目を合わせることもしなかった。

もとより、言葉すら交わすこともなかった。

アイコンタクトの代わりに楽器をわずかに振る。あれだけ練習を重ねたのだ。

美沙子にはそれだけで樹生がどこをどう吹きたいのかがよくわかる。ただ、二人の心だけが途切れていた。

「東條さん、とおっしゃったかな？とてもお上手で伴奏に慣れてら

っしやる。おつきになっっている先生は？」

穏やかな西原の声に、あ、あの錦織教授です、と言葉少なに彼女は答えた。

「やはりねえ。F女子音大も最近はかなりレヴェルが上がってきているからねえ。少し休憩しようか」

そう言いつつも西原は樹生を手招きした。

「どうだい？正直なところ彼女の伴奏は。どうも僕はあの伊織くんと共演が強烈だったせいかな、もつと感情のぶつかり合いがあってもいいと思うのだけれど、まあそれは贅沢というものかねえ。確かに彼女は大変技術的に高いものを持っていて伴奏者としては適任だでも、いけなければ学内から探してみるかい？」

普段は物静かな西原が珍しくそんな言葉を口にした。

樹生は、すいません、このところ日程が合わずに練習不足で、と心の動揺を隠そうとした。

いくらF女子音大がG大と協力提携校で大学間相互単位互換制度があると言えども、学校が違えばカリキュラムも違う。練習日を合わせるのも苦労する。

それを理由に美沙子との練習を断ろうか、樹生が弱気な思いでピアノの方をふり返る。

ふと、目が合った。

美沙子の切なげな寂しそうな瞳。

なぜ？君は今、あんなに憧れていたG大一の、いや、もうすぐ世界に飛び出してゆくであろう将来有望なピアニストと付き合っているんだろう？

幸せなはずじゃないか。

一瞬のうちに思いが錯綜する。

二人の会話が耳に入ったのだろうか、あの控えめな美沙子が立ち上がってはつきりと言った。

「申し訳ありません。もう少しだけでも練習をさせていただきませんか？この曲をもっと勉強したいんです。勝手に言って失礼なお話しだとは重々承知しています。でも」

彼女の自己主張に一番驚いたのは樹生だった。美沙子がこんなことを言うなんて。

もう、おれの顔なんて本当は見たくもないだろうに。

美沙子の言葉に、そうですね、まだ一回目だし、と西原は静かに微笑んだ。

一緒に部屋を出る。そしてお互い別々の方向へと分かれる。心は遠く離れて。

そのつもりだったのに、耐えきれず樹生は言葉を掛けた。

「どうして練習を続けようなんて言ったの？」

しばらく無言でうつむいていた美沙子は、唇を噛んで何かを必死に抑えていた。

しかし、そのあとか細い声でこうつぶやいた。

「……伊織くんが、そうしろって」

ほんのひとすじの涙。そう見えたのは樹生の錯覚か。

それだけ言うと、美沙子は足早にその場を去っていった。

後に残された樹生の心を酷く乱していったまま。

君は、高臣の言葉にならばどんなことでも従うのか。

樹生の胸が何かに押しつぶされるようにぎゅうと締め付けられる。
やり場のない感情があふれ、樹生はこぶしで思いきり廊下の壁を殴
りつけた。

痛むのは自分の手。いや、今は痛みさえも感じない。
本当に痛いのは……。

樹生は頭を抱えてその場につづくまっただ。

39

必要最低限の事務的な会話。挨拶すらなく、練習番号と表現につい
てだけ二言三言かわす。

それすらも、樹生にとっては胸を刺すことだった。

……伊織くんが、そうしろって……

彼女の心には、もう高臣しかないのだろう。とても幸せそうに見え
ないと思いたいのはおれのエゴだ。

それでも二人とも演奏者としての意地がある。曲はきっちりと仕上
げていきたい。せめて曲だけは。

ある日、ふと気づくと美沙子の左手首の袖に隠された部分から白い
ものが見えた。さすがの樹生も声を上げる。

「どうしたの、それ。ケガ？まさか腱鞘炎？」

ハッとしたようにその包帯らしきものを右手で隠すと、彼女は何で
もないと言い張った。

「痛むのなら弾いている場合じゃないだろう？」

「大丈夫、本当に何でもないの」

おれには理由も言えないの？樹生の声があまりにも切なかったのか、軽いやけど、大したことないからとつぶやいた。

「最近さー、本当に付き合い悪いのよねー美沙子のヤツ」

誰だよ、和奏に強い酒飲ませたのは。太郎をにらむと彼は顔を思いきりぶんぶんと振った。

「まずね、F女の構内であつても知らんぷり。練習誘つても来ない。もちろんクラスの合コンなんか来やしない。打ち上げ飲み会、全く無視。電話しても、別にの一言で盛り上がり無し。何であそこまで変われるかなあ」

和奏はカウンターに突っ伏してくだを巻いている。腕だけを伸ばして空のグラスを振り、お代わりを催促しているようだ。

「水入れてやれ、水。どうせわかんねえよ」

こっそり店員にささやく。行きつけの居酒屋の兄ちゃんは心得たもので、それでもうまいミネラルウォーターを注いでやってくれた。

「女ってさ、付き合う男であそこまで変われる訳？もうどっぷり二人の世界じゃん」

和奏さん！太郎があわてて背中を揺するが関知しない。樹生の表情が曇る。

「でも、ちっとも幸せそうに見えないのよね。本当にあの二人うま

く行ってるのかな？」

そんな話もしねえのか、よほど訊きたかったが樹生はそれをぐっと抑えた。

「悪いけどあの子に伊織くんは似合わない。美沙子とはね附属の音高から一緒だったの。あの子に憧れてる他校の男どもはたくさんいたけど、誰とも付き合わなかった。美沙子に合うのはあんな冷たくて優しさのかけらもないような高慢ちきの男じゃなくて……」

「それくらいにしろよ、友達の悪口を言われるのは好きじゃねえ」

低い声で樹生がつぶやく。

友達い？あれだけのことでされて、まだあんた友達だなんて言えんの！？

そのときだけがぱっと和奏が起き上がり、出された水をぐいと飲んだ。

「おれたちは友達……だったんだ、少なくとも。今だってケンカ別れた訳でも何でもねえ。おれが、おれさえいつまでもこだわってなきゃ、今だって変わりはないさ」

人が良すぎるにもほどがあるよ。そう言いながら今度和奏はぼろぼろ涙を流し始めた。

「おい太郎、おまえの彼女どうにかしてくれよ！」

太郎は太郎で、深く考え込んでいた。いつもの柔和な笑顔ではなく深刻そうに。

「おまえまで辛気くせえ顔してたつてしょうがねえだろ？おれは別に何も…」

「どうして伊織くんは、急に変わってしまったんでしょね」

厳かな宣告に樹生の顔もこわばった。何もなかったはずだ、おれたちには。

強いて言えば、定期演奏会の伴奏者を美沙子に頼んだこと、それをあいつに言わなかったこと。仕方がないだろう、あいつだってコンチエルトを弾くんだ。

オーケストラをバックに最初から最後までソロを演奏しきるなんて、並大抵のことじゃない。音大も音大生も数あれど、そんな経験できる者の方がほんのわずか。

本当にあいつが言うように、高臣も美沙子を好きだったのか？会話をしている姿も見たことはなかった。おれたちはいつも一緒にいたけれど、それを楽しんではいたことは確かだけでも。

居酒屋での重い飲み会は、誰もがなかなか腰を上げられずにいた。

「美沙子、痩せた？」

最近めつきり笑顔も見せなくなって、もともと物静かな彼女がさらに何も言わなくなってきた。

F女にはただでさえ伊織高臣の大ファンなんぞあふれるほどいる。最初は嫉妬めいた目で見られることも多かった。あんな地味な子がないぜ？と。

それでも、彼女の人柄とピアノの実力を知っている友人たちから話は伝わり、今では美沙子から高臣のことをいろいろ聞き出そうとするファンたちが、やってくるようになった。

でも、何を聞かれても別に普通よ、としか言わない。

和奏はいつもより距離を取りながらそういう彼女を見つめていたが、意を決して近づくと言葉を掛けた。
その声に、びくつと美沙子が反応する。

「ねえ、別にあんたが伊織くんと付き合うのを反対なんてもうしない。でも、何をしているの？どこかに連れて行ってもらったりして？それで楽しい？まさか毎日ピアノの話してんじゃないんでしょうね」

「話なんて…」

そう言うと美沙子は下を向いてしまった。

「噂に訊く防音完備のマンションで、連弾ばかりやってるなんて言ったら吹いちゃうわよ、私」

わざと冗談めいて和奏が言うのにも反応を返さない。
そのままずっと席を立つと、立ち去ろうとした美沙子を、待ちなさいよと和奏が腕を掴む。

「痛っ！」

そんなに力を入れたつもりはなかった。しかし美沙子は左腕を押さえてその場にしゃがみ込んでしまった。

「ちょ、ちょっと大丈夫？ゴメンね、どうしたの？」

柔らかいニットの袖を和奏がさつとめくる。そこには赤黒い大きなアザ。

とてもイヤな予感がした。無理やり、避ける美沙子の右腕もめくり

あげる。

こちらには無数の細かい傷。

「どうしたのよ！何でこんなケガ！」

転んだの、何でもないわ。静かにつぶやく美沙子の視線は、けつして和奏を見ようとはしなかった。

逃げるように走り去る美沙子の後ろ姿。

なぜか和奏は背中に冷たいものがすーっと落ちてゆくようで、追いかけることもできなかった。

#40

…この鍵、もう返した方がいいのだろうな…

樹生は銀色に光るマンションのキーを見つめていた。僕の部屋なら防音設備があるからいつでも練習できる。よかったら使ってよ。もうその声を聞いたのはずっと昔、そんな気さえする。

高臣。

おれたちはどこでずれてしまったんだ？

仲の良い友達でいることはそんなにも難しいことなのか。おれが東條さんに声をかけなければ、せめて学内のピアノ科の子にでも頼めば、こんなことにならずに済んだのか。

何度考えてもわからなかった。もとより樹生には高臣と友達をやめた気などさらさらないつもりだった。そりゃあ、あの二人が一緒にいるところを見るのは辛い。でも、ロシア五人組をもじってG大奇跡の五人組と言われた楽しかった思い出を、こんな形で失うのはあまりに辛すぎる。

高臣から笑顔が消えた。

一度あれだけ人間くさくなったと評判のピアノですら、無機質な音の羅列に戻ってしまった。そう、それは逆に精密機械をこよなく愛したラヴェルの本質をとらえているかのよう。鍵を封筒に入れると、樹生は小さく折りたたんだ。

「今年は留学希望者が多くてね」

樹生が西原教授の部屋へ顔を出すと、教授は多くの書類と格闘していた。

「何やってんですか、西原センセ。留学がどうたらって？」

ああ、見ちゃダメだよ。大事な個人のデータだからね。書類の一つを手にとろうとした樹生に、彼はあわてて声をかけた。

「学内の留学担当責任者を押しつけられてしまってる。普段ならピアノ科かヴァイオリン科の先生がやってくたださるのだけれど、ほら今年は大きなコンクールも多くて」

いつも貧乏くじ引いてんじゃないか、樹生は聞こえないようにつぶやいた。

「君も行くかい？パリコンセルヴァトワールなんてどうだい？」

「それって、ケーキ職人にでもなれるんですか？」

樹生のけつこう真面目な目に、西原は気づかれないようにため息をついた。

「バークリーに行くのもいいけど、金ねえしなあ。ここの学費だっ

てバカにならねえ。アホ親なんか仕送りなんてほとんどくれねえから、バンドのトラで稼いだ金をつぎ込んでんです。おれはこれでも勤労学生ですよ。泣けてくるね」

奨学金ならあるよ、クラシック限定がいくらでもほら。西原は真面目なのかからかっているのか、樹生にパンフレットを渡してにっこり微笑んだ。

「例の彼女、うまくなってきたね。というか君と息が合ってきたというべきか。どことなく伊織くんの弾き方に似てきた気がするの、やはりそうあって欲しいというこちらの幻想かねえ」

ふいに高臣の名前を出され、樹生は持っていたパンフを取り落とした。あわてて拾ってケースの外側に突っ込む。そう、それは樹生も感じていたことだった。ときおり顔を出すあの激しさは、今までの美沙子にはなかったもの。

「…そりゃ、東條さんは高臣の彼女だからアドバイスくらいもらうでしょう」

ふてくされた口調でぶっきらぼうに言う。その表情を西原は温かく見守る。

「おや、そうだったんですか。それは知らなかった。いやあ若い人というのはいいですねえ」

そつと立ち上がり西原は窓の外を見やる。しばしの沈黙。何を考えてやがる。樹生が不安を覚える頃にようやく西原が口を開いた。

「やはり彼女で行きましょう。錦織先生には私の方からもお願いし

ておきます」

受かりもしない選考会。高臣の前で美沙子とコンチエルトを吹く。樹生は目をつぶって余分な邪念を追いつくと、珍しく殊勝に「よろしく願います」と頭を下げた。

たかだか大学内の定期演奏会といえども、なにしろ日本最高峰といわれる国立G音大のコンサートだ。もちろん一般の観客も多い。なあなああの演奏は聴かせられない。

ましてや協奏曲の希望者は年々増え、レヴェルも高くなっている。一度、予選のようにふるい分けてから次はじっくりと審査を行う。G大ではそのようなシステムを取っていた。まあ、今回に限って言えば伊織高臣が出るという段階で、他の出場者はほとんどあきらめムードではあったが。

予選は学科ごとに行く。よかった、今日は顔を合わせずにすむ。ほっとした樹生の前に美沙子が現れた。

白と紺の清楚なワンピースに長い髪を後ろできりりと束ね、彼女はいつもよりずっと輝いていた。

和奏と一緒にいるのが長かったせい目立たぬ印象を与えるが、本来の美沙子はとても品のある美しい女性だ。

それはしかし、高臣によってさらに引き出されたものなのだろうか。樹生の心にほんの小さな棘が刺さる。

美沙子は相変わらず下を向き、目も合わせなかった。

樹生は思いきって声をかけた。

「今日はよろしく、東條さん」

大きな声ではなかったはずだ。しかし彼女はびくつと身体を震わせ、ほんのわずかうなずいた。

「やけど、治った？」

いつも以上について言葉を掛けてしまふのは、緊張感からか、それとも…。

しかし驚いたことに美沙子は、そつと返事をかえしてくれた。もう大丈夫、と。

ホルン協奏曲、オーボエ、フルート、クラリネット。

演奏者が次々と舞台上へとあがる。樹生たちの出番は一番最後。それなりに管楽器科としては樹生たちに期待を持っているのだろう。長いとき、二人はずっと黙って座っていた。まるでコンチエルトの練習を始めた頃のように。ただ黙って、心が通うかのように。

「佐渡聖史作曲、サキソフオン協奏曲op.1。演奏者井上樹生、ピアノ伴奏F女子音大東條美沙子」

その声に、もうすでに袖で出番を待ちわびていた二人はゆっくりと立ち上がる。

樹生が振り返る。美沙子はまっすぐ彼を見ていた。うなづきあい、中央へと出て行く。

美沙子がピアノの椅子の調整を始める。樹生はいつものようにストラップを上げ下げしてからリードを湿らせた。

客席がよく見える。審査員の顔ぶれも、その表情も。

大丈夫、これっぽっちも上がっちゃいねえ。いつも通りに吹くだけだ。

そのとき、そつと小ホールのドアが開いた。視線が思わずそちらに向く。

樹生の息が止まった。

そこには冷酷な微笑みをたたえた高臣が立っていた。

高臣…。

幸い美沙子は気づいていないようだった。調整も終わり、ペダルに足をかける。

樹生は何事もなかったかのように、ピアノの方を振り向いた。

……聴かせてやろうじゃないか……

美沙子の瞳は以前のように柔らかく樹生をとらえた。すうと息を吸い込む。ほんの少し腕を振り上げると、ピアノが力強く重厚な和音を弾き始めた。

変拍子の三小節目から突然サックスが割り込むように入ってゆく。それまでのまるでオーケストラのような響きのピアノを切り裂くかのように。

冒頭はしばらくこの激しさが続くのだ。

しかし樹生は西原に指摘されたように、わざと力をぐっと抑え気味に吹いた。ここでビッグバンを起こしてちゃ、ラストはどうなる？ けれど抑えても抑えても、樹生のアルトは小ホールいっぱい響き渡った。

聴けよ、高臣。これがおれのクラシックだ。

おまえがおれの音に惹かれたように、おれは初めて聴いたときからおまえのピアノに取り憑かれてんだ。

あんな音、今までに聴いたことなかねえ。おれが信じるのは音だ。おまえはそうじゃないのか？

樹生の心の中に嵐が渦巻く。つねに樹生は心の葛藤を、言葉にならない激情を叩きつけるように演奏していた。荒削りの魅力。しかし西原はそれを抑え込むことを教えた。もっと高みに、もっと美しく。そのエネルギーを昇華しなさい、と。

曲は中間部のゆるやかな旋律へと変わっていった。人の声が出せる

限りの美しさを持つ唯一の楽器がクラシックサクソフォン。おそらく知るものもそう多くはないだろう。この素晴らしい音色を。場内からは声にならないため息がもれた。

このままいける、客席でじっと見つめる西原教授は確信した。演奏者たちはもう、評価などどうでもよかった。自分の音楽を、思いのたけを。

最終部分、わずかにピアノがぶれた。

気づいたのか、高臣に。樹生は背中がひやっとしたが半ば強引に曲を元に戻した。

これだけは誰にも邪魔させねえ。おれたちの曲だ。たとえそれがステージの上だけであっても。

高臣は座席に一度も座ることなく、後ろの通路へ立ってひたすら舞台上の樹生だけを見つめていた。

もはや笑顔もなく、その瞳には冷酷さすらなかった。

子どもじみた、哀しみを帯びた表情。おまえはいったい何をそんなに怯えているんだ？

あんがい舞台の上からつてのは、何でも見えるもんだな。ほんの一瞬現実に戻された樹生は、すぐに曲の世界へと戻ってゆく。さあ、終焉だ。すべては焼き尽くされ滅びるという副題がつけられたエンディングへと向かってゆく。細かいパッセージが続くのをシンクロさせ、聴くものに息もつかせない構成。

不意に切り取られる音たち。静寂がすべてを包む。

樹生も美沙子も目を開けることなく、その世界からしばらくは戻っては来られなかった。

ようやく樹生が口からマウスピースを話す。楽器をだらんと下げ、大きなため息をついた。

ただのふるい分けのための予選。それも勝ち目のない戦い。

小ホールは程なく温かい拍手で埋められた。観客すら、言葉を発す

ることさえ忘れていたのだ。

「審査会出場は君たちに決まったよ」

にこにこと西原教授は樹生と美沙子にそう声をかけた。まだ会場の後片付けをしているのに？決まるのは早過ぎやしませんか？さすがの樹生も驚きを隠せなかった。

「満場一致だ。あの演奏を聴けば誰もが納得するだろう。これはひよっとするとひよっとするねえ」

なぜか上機嫌の西原は、笑顔のままそれだけ言うと去っていった。

樹生たちは思わず顔を見合わせた。目と目が合う。ほんの少しの微笑み。

しかし美沙子はすぐに表情を硬くして、下を向いてしまった。

「君のピアノのおかげだ。本当にありがとう」

樹生にしては珍しく、はっきりと自分の気持ちを言葉にした。

実際、あれだけの難曲を弾きこなし、おれのアクの強い演奏に合わせるのは容易ではなかっただろう。

「審査会まで、もう少し付き合ってくれるかな」

美沙子は軽く頭を下げると、じゃあ、と小さく声を発した。

もう会場のどこにも高臣の姿はなかった。待ち合わせでもしているのだろうか。

一人で外へ出るともう風は冷たかった。

彼女は幸せなのだろうか。

そして、高臣は本当に彼女のことを…。

考えても考えても、どうしても出ない答え。

樹生は、胸に凍った大きなかたまりを抱えたまま、メインストリートをゆっくりと歩き出した。

4 2

「留学!？」

突然大きな声を出したものだから、学食にいた連中がみな樹生たちを振り返った。

太郎は思わず人差し指を立て、しーっ、静かに、極秘情報なんですからと樹生をなだめた。

「うちの教授がついそんな話をしているところを聞いてしまったんです。不確定な情報ですから、誰にも言わないでくださいよ!」

太郎は辺りを慎重に見回すと、さらに小声になってそう言った。

「いつからだ、それでどこに行く気だ? 国際コンクールにでもいいよ打って出るのか?」

だからそんな詳しいことはわかりませんってば、太郎はため息をついた。

高臣が留学。

それは考えてみれば当然の話かもしれない。卒業を待つまでもない。あれだけの実力を持っているのだ。何のコンクールに挑戦しようとする入賞は間違いないだろう。

定期演奏会を待って、だろうな。それでG大での活動を最後に飾る

うという訳か。

でも、そうしたら彼女はどうなる。東條さんは。

ついてゆくのか、一人残されて遠距離恋愛を続けるのか。

何バカなこと考えてんだ？おれが気にするこっちゃねえ。樹生はゆつくり頭を振った。

留学なら担当だと言っていた西原のじじいにも聞けば何か教えてもらえるだろうか。

そう頭をかすめたが、あの生真面目で融通のきかない西原教授がそんな大事なことをもらすとも思えない。

聞いてどうする？おれには関係のない話だ。来週の審査会で美沙子とのペアも終わる。

モリス＝ラヴェル、そしてバスクの血。ならば行くのは当然フランス、だろうな。

高臣と逢えない。もうあの音も聴けない。行けばあいつはラヴェルに取り憑かれ、おそらく日本になど帰ってくるはずもない。

ただ一度のあの情熱的なステージ。すべてはあの日に始まり、それで終わったのだ。

クラシックなんぞに全く興味のないおれを惹き寄せたあの、何ものとも違う美しい音色のピアノ。聴くものを氷に変え、粉々に砕く妖魔のように。おれたちは高臣のピアノに群がり、そして魅せられた。取り憑かれてしまった。悪魔の奏でる妖艶な旋律。

普段の樹生にはない言葉の数々が彼を取り囲む。

おれはあいつが好きで友達になったのか、それともあの音に惹かれただけだったのか。

だから高臣は、あんなに切なげな目でおれを見たのか。

ヤツの周りには、あいつの音を聴くものはいてもヤツ自身を見るものはいなかったのか。

残酷な仕打ちをしたのは、おれの方……か。

謝ろつ、今のうちに。あいつがまだ日本にいるうちに。そして人間や友達という言葉に絶望しきってしまわぬうちに。間に合うだろうか。いや、間に合わせるんだ。

おれはおまえの音だけじゃない、おまえ自身と気が合って、それで友達になりたかったんだ。言い訳にしか聞こえねえかもしれねえけど、どうか信じてくれ。

G大奇跡の五人組は、ずっと続くんだ。

樹生がばつと立ち上がる。

太郎はオロオロとそれを見ているばかりだった。黙って物思いにふけたかと思うと何をし始めるのかと。

「おい、太郎。それで高臣はどこにいるんだ？」

「さ、さあ。ただ書類提出日が近いからそのうち西原教授の部屋に行くんじゃないかって誰かが…」

西原のじじいのところだな？よし！樹生が走り出したそのとき、向こうから和奏が何かを叫びながら近づいてきた。

「たっちゃん！太郎ちゃん！美沙子を、美沙子見なかった!？」

彼らのそばまで来ても、彼女は息を切らし、青ざめた顔でその言葉しかくり返すことができなかった。

自販機のコーヒーでようやく一息つくと、和奏は下を向いた。あのおしゃべりな彼女が唇を噛んで何も言おうとしない。

美沙子さんを探していたんじゃないんですか、優しく太郎が問うても、彼女はその言葉すら後悔しているようだった。

太郎が珍しく真正面から和奏に向きあうと、その柔らかそうな手を重ねた。

「何があつたんですか。きちんと話してください」

声は穏やかだがきつぱりと。和奏の身体がびくつと震える。それでも決心したように顔を上げるとようやく口を開いた。

「美沙子が、家に帰ってないって。こんなこと初めてで、両親は警察に行こうかどうかって」

太郎と樹生は思わず顔を見合わせた。ため息をつきながらわざとはすっぱな調子で樹生が吐き捨てる。

「あのなあ、いくら東條さんが箱入り娘でも彼氏のいる女子大生だぜ？一晩家に帰らないくらいで警察行ったら、恥かくのはそっちの方じゃねえの？それこそ高臣んちにでも電話してみろよ！」

「あの子のうちは門限十時なの。一度だって破ったことないわ。もちろん伊織くんのところになんて何度も連絡してみたわよ！！でも誰も出ないし。伊織くんはG大のレスンに出てるって聞いたから探しているけど、ちつとも見つからないし」

和奏が珍しく半泣きの状態で、すでにしゃくり上げている。心配なの、こんなことなかったから。どんだけお嬢さまだよ、樹生のつぶやきは無視だ。

「東條さんだってもう大人だぜ？たまには羽目も外したくなるだろうよ！」

「だから余計心配なんじゃない！！いつもいつも伊織くんと一緒に、あの、今はもう何考えてるんだかちつともわからない彼といて、あの子がどんな思いしているのか、たっちゃん心配じゃないの!？」

左腕の大きなアザ、消えた笑顔、日に日に痩せてゆく身体。それでいて何も言わない美沙子。

もし、こんな状態の彼女を残して一人高臣が留学ということにでもなれば…。

とりあえず西原のところにも行ってみるか、樹生が独りごちる。

血相を変えて押しかけていった三人を見て、西原教授は目を丸くした。

「どうされたんですか。それに今日は三人ですねえ。五人組には少し足りない」

相変わらず穏やかな声。今にも大声でがなり立てそうな二人を何とか抑えて、太郎が一步前に出る。

「先生、突然申し訳ありません。伊織くんは今日こちらへ伺いましたか？」

ええ、と何事もなかったかのように西原はにっこりと笑った。

「それで、何か言っていました？今どこにいるんです？」

和奏のせき立てる声に、驚いた表情を見せる。太郎はまあまあとなだめ、もう一度西原に向かう。

「伊織くんが留学するという噂は本当ですか？」

個人的なことですからねえ、まあ彼ほどの腕前ならいつかは行くでしょうが、卒業後になるかそれはわかりませんねえ。

のらりくらりとかわす西原にとうつしびれを切らせた樹生は、教授の腕を掴んで叫んだ。

「大事なことなんだ！教えてくれ先生！あいつの、あいつの付き合ってる彼女が今どこにいるかわからなくて、ゆうべ家にも帰ってないんだ！！」

西原は真剣な顔を向けた。それはこの間のF女子音大の彼女ですかと。

しばらく誰もが無言だった。

ほんの少し開いた窓から、遠くの楽器の音がかすかに聴こえてくる。ああ、ここは音楽大学なのだ。当たり前のことを樹生は今さらながら思った。

「わかりました。伊織くんなら夕方もう一度ここに来る約束になっていますから、そのときに詳しい話を聞いておきましょう」

管楽器科の西原教授にピアノ科のヤツが来る用事などない。

留学話は本当だったのだ。

樹生はポケットに入れたままだった、マンシヨンの鍵を握りしめた。

#43

もう一度、高臣の部屋に電話を入れようかとアドレス帳を取り出す和奏を、樹生は手で制した。彼女がげんそうに彼を見返す。

樹生はそつとキーを取り出す。どこの鍵？震える声で和奏がつぶやく。

「春のステージが終わってから、高臣がくれたんだ。自分の部屋の

合い鍵だと言って。今まで誰も入れたことはないけれど防音で小さいグランドピアノは入れてあるから、いつでも練習ができるよ、って」

そのときの照れくさそうな、俯きがちの高臣の顔を樹生は思い出していた。

僕がいなくても使ってくれていいから。君の部屋じゃサックスは吹けないだろ？とほんの少し口元をゆるめながら。

「なぜおれに？そう訊いたらあいつ……」

それきり樹生は言葉を失った。顔を覆う大きな手のひらがわずかに揺れている。

あいつは確かに言ったんだ。

……だって君は、僕の友達だから……

「行ってみよう、今から」

「伊織くんの部屋に？美沙子がそこにいるとでも？」

他に考えられるのか？口には出さなかったが、樹生は辛そうな目で和奏を振り返った。

「行つてどうするのよ！まず伊織くん本人に訊かなくていいの？もし、もしあの子が」

幸せそうに高臣の部屋にいたとしたら、それとも留学の話を聞いて一人泣いていたとしたら。

どちらにしても樹生には残酷な話。

つぶやく和奏に、そうじゃねえ、と樹生はそつと言い返した。

「おれたちのうちで、あいつ本人を見ていたのは誰がいる？みんな、あいつの音に惹かれ、離れられなくなった。おれたちだけじゃねえ。ピアノ科の連中も誰も彼も、あいつじゃない、あのピアノにとらわれていた。もしかしてあいつが本当に欲しかったのは、自分自身を見て欲しい存在じゃなかったのか」

それが美沙子だったとでも？そんな……。和奏が首を振る。

「一応ピアノ科のレッスン室を見て回ったけど、いませんねえ」

息を切らせて太郎が駆けよってくる。この男なりに必死に走ったのだろう。この寒さに汗をかいている。

「たっちゃんが行ったことあるの？伊織くんの部屋」

ああ、そこで何度もコンチエルトを。聴いていたかったんだ、あのピアノを。

美しいなんて言葉だけでは足りない、妖艶なあの音を。クラシックなんて何にも知らないおれが唯一認めた高臣の音を。おれはどれだけあいつを傷つければ気が済むんだ。

大学近くの地下鉄に乗って二駅。やや年季の入ったそれだけ頑丈な作りの、音大生御用達マンション。防音完備でどの部屋にもベビコンが入れている。

その三階までエレベーターを待ちきれずに走って上がる。

鍵穴にキーを差し込む樹生の手が震える。何も、誰も、いませんように。そんな祈るような気持ちで。

ドアを開けると、中は静かだった。もちろんピアノの音もしない。入ってすぐにカウンターのあるキッチン。その向こうにはわずかに開きかけたもう一つのドア。そっちにピアノが置いてあるのだ。

「ねえ、なんのにおい？」

敏感なのか、和奏が顔をしかめる。

におい？男たちが目を見合わせる。確かに台所から異臭がする。あの異常なほどきれいな高臣からして、考えられない。

いきなり樹生が走り出した。ガスコンロ！近づく彼が思わずむせる。

「何？どうしたのよ！」

「太郎！どつかからガムテープでもビニールテープでも何でもいいから、早く！」

そう言う樹生は台所の下の方をはいずり回り、元栓を探した。必死にコックをひねる。

ピアノシシモの微かな音。

和奏！窓を開けろ！その声に窓を開けようとするがなかなか開かない。

「これでいいですか、井上くん！」

太郎がテーピング用の白いテープを投げってくる。それで樹生は切れていると思われるガスコードをぐるぐる巻きにした。

和奏はまだ苦戦している。それに、どける！と怒鳴って樹生はいきなり椅子を振り上げ、窓ガラスに思いきり叩きつけた。
がちゃん！！

割れた窓から風が入り込んでくる。異臭はだんだんと薄くなってゆ

く。三人はようやく息をついた。

「何だって、こんな……」

樹生が太郎に話しかける間もなく、ピアノ室から和奏の悲鳴が聞こえる。

あわてて駆けよる。

そこには美沙子がグランドピアノ用の細長い椅子へ座っていた。

「と…東條さん」

樹生の喉が張りつく。

彼女はうつろな瞳でこちらを振り向く。それなのに誰をも見ていなかった。目の焦点が合っていない。

肩を出した黒いイブニング。美沙子の体型に合った光沢のある美しいステージ衣装。

しかし今はその裾がびりびりに破かれ、あちこちから美沙子のすらっとした脚がのぞいている。傷だらけの脚が。

左腕には赤黒いアザ。一つや二つではない。そして右腕についた無数の切り傷。

彼女の左手に握りしめられた細身の……ナイフ。

ああそうだったな、彼女は左利きだ。だからあんなに強いタッチで弾けるんだって誰かが…。場違いなほどどうでもいいことを、回らない頭で樹生はぼんやり思っていた。

誰もが言葉を失い、動くことさえできなかった。

4 4

遮光カーテンが閉まり、室内は暗かった。そのわずかなすき間から

もれる光が辺りを照らしていた。美沙子の視線が宙を舞う。そして樹生の目をとらえた途端、怯えた表情がその美しい瞳に浮かんた。声にならない声が、微かに聞こえる。身体が少しずつ震え出す。それにできるだけ刺激しないように樹生はそつと手を伸ばした。

「…その、ナイフだけおれに。危ないだろ？ね？大丈夫だから。東條さん」

折りたたみのできる細いナイフは、今にも美沙子の手からこぼれ落ちそうなくらいだった。

彼女もまた動くことができず、樹生からも目を離すことができなかった。

彼にしたらまどろっこしいほどの歩みで、彼女に近づいてゆく。大丈夫だから、と何度もささやきながら。

樹生の伸ばした指先が、美沙子の肩に触れた。

その瞬間、彼女はナイフを自分の胸に向けて叫んだ。

「来ないで！！いやあ！！」

樹生の足が止まる。太郎も和奏も動けない。

だが樹生は無理やり腕を伸ばすと、ナイフを握っていた美沙子の左手ごと大きな手のひらで包み込んだ。そして、反対の腕で彼女を抱きしめる。必死に抵抗するのを力で抑え込む。ナイフは、その根本で樹生の力強くも柔らかな手のひらを傷つけ、わずかばかりの血が流れ出す。

「東條さん、大丈夫。落ち着いて」

けっして大声を出すことなく、樹生はナイフをもぎ取った。美沙子は何とか彼の腕から逃れ出ると和奏の胸に飛び込んだ。彼女がその

背中を抱え込む。

「……美沙子……」

声も上げない、泣くこともしない。その空間を支配しているのはただの静寂だった。

美沙子はそのまま、ひざから床へと崩れ落ちた。

とりあえず、ベッドに運び込んで横たえる。シングルの狭いシンプリなモノトーン。

見るのもイヤだが、ソファに寝かせるよりは彼女の身体が楽だろう。和奏がつきつきりで美沙子の頬をなでる。

彼女はまた、あの空虚な瞳に戻り、天井を見つめるばかりだった。

太郎と樹生は、椅子に沈み込んだまま黙っていた。絆創膏など見あたらなかったから、さっきのテーピングで一応手のひらの傷を止める。大丈夫なんですか？太郎のささやきに、かすり傷もいいところだつて、と自嘲めいた苦笑い。

この部屋で何が起こっていたのか、樹生には全く理解も想像もできなかった。

ここはただの練習室。フランスに住み、手広く事業を手がけているという高臣の父にとっては、息子のために家を用意し、大学近くに別に部屋を借りることなど造作もないことなのだろう。

レッスンに次ぐレッスン。国内のコンクール。友達を作る暇もないまま、彼は一人きりでラヴェルと対峙していた。今までは。

彼の中で孤独に調和していた何かをおれたちは壊してしまったんだ。それがよかったのかどうなのか。

けれどどうしてそこに東條さんが……。何度考えてもわからない疑問。

「少し落ち着いて、今は眠っているわ。すぐに美沙子の家に連絡し

て迎えに来てもらう。ここの鍵、もう少し借りていい？」

和奏が静かにこちらへ来てそう告げる。

「警察に連絡しないでいいのですか？彼女をあんな状態にした犯人を見つけないではならないのでしょうか？」

太郎がつぶやく。外部の犯行だと、どこか信じたかったのか。そこにいる誰もが思ってもいないくせに。

「ご両親とも相談してみる。私たちだけで決められることではないわ。大ごとにしたくないかもしれないし」

「でも！」

食い下がる太郎に樹生が手を差し伸べて制する。和奏は涙をこらえながら唇を噛みしめた。

「美沙子ね、うわごとのようにずっと言ってたの。レッスンを続けなきゃ。もっともつと、これじゃダメなの。こんな弾き方じゃとても満足させられない」

言葉を切る。つつつと涙が一筋こぼれ落ちる。

「伊織くんの要求に応えられない。私ではダメ。もっと弾き込まなきゃ…って。だから女はダメなんだ。だから僕じゃなきゃダメなんだ。それをなぜ彼は、樹生はわかってくれないのだろう。おまえなど何の役にも立たないくせに。そうやって何度もつぶやいて…」

和奏はこらえきれずに顔を覆った。

誰もが無言。

ゆらりと樹生が立ち上がる。察した太郎があわてて止めようとするがそれを振り払う。

「和奏！東條さんを頼む。いいな？」

「どこ行く気！？まさかたっちゃん！！」

椅子にかけてあったブルゾンを手に取ると、樹生は足早に玄関に向かう。その前に必死で太郎が立ちふさがる。

「ダメです！落ち着いてください。何があつたかなんてまだわからないんです！ちゃんと事態を把握してから！」

「そこをどけ！もうさっきの言葉で十分だ！！」

落ち着いてください！！悲鳴に近い太郎の言葉を見捨てるかのように押しつける。

「今日こそ、今こそ決着をつけてやるよ。それがあいつの望みなんだろう？」

噛み締めた歯の間から絞り出すように、樹生は言った。

「井上くん！！」

邪魔だ！どけ！！力いっぱい突き飛ばされて太郎は壁に背中をぶつけた。荒々しくドアを開け、樹生は三階の階段を駆け降りて行った。痛みがりつつもあわてて太郎がそのあとを追いかける。

息を切らし、やっとのことで玄関のエントランスに太郎が着いた頃

には、樹生はタクシーに飛び乗っていた。

「G音大東門まで。急いで」

太郎も後続の車を探すが、なかなか見つからない。

どうか、何事もありませんように。どうか、間に合つて。

自分が行ったところで何ができるかわからない。それでも太郎は、そう必死に祈った。

4 5

樹生はタクシーを乗り捨てると、構内の一番奥にある西原教授の部屋まで走った。

もう何も考えられない。思うことは、あいつが、高臣が東條さんを傷つけたという事実だけ。

どんな理由があろうともそれだけは許すことはできない。法的にどうしようなんぞ考えちゃいない。

一発ぶん殴って、その心と身体の痛みをおまえにも味わわせてやる。

ノックすることもなく、いきなりドアを思いきり開けた。

西原教授の姿はなかった。このまま誰もいなければ、そうも思ったが樹生はその狭い教授室を見回した。

ソファに座ってカップを持ち上げていた高臣がこちらを向く。

そっとジノリをテーブルに置き、身体の向きを変えた高臣はどことなく微笑んでいるかのように見えた。

あの、照れくさそうな笑顔をこらえるかのような、はにかむ表情。しかし樹生が齒を食いしぱり、怒りを含んだ瞳でにらみつけるのを見て、すべてを察したのだろう。高臣の顔から表情は消え、一瞬でいつもの能面のような端正なビスクドールへと変貌を遂げた。

血の通わない人形。

樹生だけが怒りを抑えきれず、肩で息をする。
鍛えられたがっしりとした上半身が微かに震えている。

「鍵は役に立っただね」

挑発するような、蔑む笑いを含んだ物言い。
かつとなつて樹生はソファを飛び越すと、ノリのきいた高臣の白い
カッターシャツの胸ぐらを掴んだ。

「てめえ、もういつペン言ってみろ。自分がやったと認めるんだな
？ なぜ！！ なぜ東條さんを！」

「女に何ができる。 どうしてそれが君にはわからないんだい？」

何だと？ 樹生の声はかすれ、ほとんど聞こえないくらいだった。

「女なんかに芸術がわかるものか。 本物の音楽が理解できるのか。
サロンの飾り物と一緒に、どれだけ高くて見栄えのいい物を近くに置
けるか競い合うことしかできなかったじゃないか。 ラヴェル自身、
独身男性のみの『アパッシユ』というグループを作ったことは話し
たよね。 女など精巧な機械の美しさより劣る。 君にも何度も……」

「てめえはラヴェルじゃねえ！！ 芸術家を気取るのもいい加減にし
る！ おまえは伊織高臣だ。 おれたちは友達だったんじゃないのか！
？」

その言葉に一瞬、高臣はひるんだ。 怯えた表情、まるで子どものよ

うに。仮面の破片がひとかけら、床に落ちたかのように。

「……友達なら、なぜ僕を選ばなかった……んだ」

「じゃあ、そう言えばよかっただろ！？一緒に選考会に出ようぜって。おれはおまえが定演に出ると聞いたから遠慮した。ただそれだけだ。なぜその言葉が言えない？」

嘘つきだね、高臣の言葉に冷ややかさが戻る。君は東條さんが好きだったんだろ、と。

「ああ、そうだよ。悪いかよ。だけど彼女はおまえを選んだんだ。ずっと懂れてた伊織高臣を選んだ。しょうがねえだろ？おれはあんなに近くにいて何も言えずにいたんだから。だからそのことで、誰も責めちゃいねえよ。自分の間抜けさにはほとほと参ってるけどな！！だから、だからこそ大事にしてやれよ！！女が嫌いと言いながら何で彼女と！」

何故あんな酷い傷を負わせ、言葉で責め立て、彼女を追いつ込んだんだ。樹生の顔がゆがむ。練習室で見たあの光景が、脳裏に焼き付いて離れない。

高ぶる樹生と反対に、高臣はますます冷酷さを増してゆくようだった。ゆがめられた口元、あざける笑い。樹生が何か言えば言うほど、彼は哀しいほど冷静になってゆく。

「父と、僕の父と同じことをして何が悪い」

どういう、こと、だ？高臣の父親？樹生は混乱した。

「そうさ、自分が弾きたくても弾けなかったピアノを託したいがために家族を求めた。偏愛するラヴェルの血統が欲しいというただそ

れだけの理由で、バスクリ人の血を引く母を選んだ。僕の意志などお構いなしにピアノ漬けの毎日。僕に才能？あるはずなどない。あれだけ弾かされれば誰だって弾けるようになる。父は母個人などほんの少しですら愛してなどいなかった。母はフランスに逃げ帰り、僕は残された。父が欲しかったのはラヴェルを弾く人形。生きている息子なんかどうでもよかったんだ！！」

「たか…お…み」

胸元を握る手が緩む。高臣の音。誰をも引き込む魔性の音色。

「それでもいいと思っていた。人形は人形らしく、精密機械に徹すればいいとね。でも、管楽器科の発表会で聴いた君の音はあまりに自由だった。こんなの音楽でも何でもないと思いたかった。だけど忘れることができなかったんだ」

それでおれを、指名したのか……。あまりに小さい樹生のつぶやき。

「最初は純粹に音楽的に君らに惹かれた。僕とは全く違う表現に。でも君は僕に言ったんだ」

……友達、だと……

「けれど結局、君も僕のピアノしか必要とはしていなかったんだ。発表会が終われば用無しだ。そうだろ？」

「違う！おれは本当におまえのことを友達だって！」

樹生の胸によぎる冷たい思い。魅せられたのは事実だ。引き込まれたのも本当だ。だけとおれたちは。

「東條美沙子になんか興味もなかった。女なんてみんな同じだ。ちよっと甘い言葉をかければすぐに寄ってくる。君は見かけよりずっと臆病でストイックだったんだね。二人であんなに長い時間、レッスン室にこもっていたくせに手も出さずに真面目に練習しかしてなかったなんて、笑えるよ。だから僕が代わりに樹生のアルトの癖も合わせ方も、ちゃんと教えてあげたよ。感謝してもらわなくちゃね」

黙れ。饒舌になった高臣は薄い唇から残酷な言葉を繰り出してゆく。

「僕が今までのレッスンで受けたように、身体で覚えさせなきゃダメなんだ。痛みだけでも人は覚えない。そのあとで優しく愛撫することも抱擁すらあの女は受け入れた。けれど平気で君との練習には参加する。ほらね、女なんてそんなもの」

「黙れ！！それ以上抜かすと！！」

左腕の殴られたあとはおそらく高臣がつけたもの。そして右腕の無数の傷は、辛さから逃げるため、彼女が耐えきれずに切りつけた跡。美沙子を、高臣をそこまで追い詰めたのは、結局おれなのか。

高臣はもう、笑ってはいなかった。唇をぎゅっと合わせ、真っ直ぐに樹生を見つめていた。

樹生の手が無意識にブルゾンのポケットをまさぐる。指の先に当たる、さつき美沙子から取り上げたナイフ。

そっと取り出して折りたたみの刃を立ち上げる。原因はおれなのだろう。

しかしそれで高臣のしたことが許されるはずもない。言いようのない哀しさが樹生を覆う。

おまえとは親友になりたかったよ。口に出せない想い。

「僕が、本当に愛しているのは…」

高臣がかすれた声でつぶやく。

「それ以上言うな！！」

樹生は高臣を一度、壁の方へ突き飛ばしてからナイフを突き出した。高臣の瞳に恐怖の色が浮かぶ。だがそれも一瞬で、もう彼は動かなかった。

「井上くん！！ダメです！！やめてください！！」

そのとき、ドアがバタンと開いて血相を変えた太郎と西原教授が駆け込んできた。

樹生の持つナイフは、高臣の袖をほんのわずかに切り裂いた。だがその勢いが止まらなかったのだらう。樹生の左手は真っ赤に染まっていた。彼は自分の手のひらを傷つけ、その場にうずくまった。

さつきとは見ただけで違う、かなり酷いケガ。出血も止まりそうにない。

高臣は自分のシャツを切り裂くと、樹生に近づいた。傷の手当をしようとするそばによると、樹生は大声で叫んだ。

「来るんじゃないねえ！！これ以上近づいたら、今度こそおまえを刺してやる！」

西原教授は呆然と立っている高臣にそっと寄り、樹生から離れた。代わりに太郎がハンカチで樹生の傷をぎゅっと縛る。

「病院へ、外科へ連れて行ってあげた方が良いですね。お願いできますか、坂峰くん」

西原教授に申し訳ありませんと頭を下げ、太郎は樹生の背中を押し
た。

血はハンカチ程度で治まるようなものではなかった。

仕方なく樹生の着ていたブルゾンでぐるぐる巻きにして、彼を抱き
かかえた。

もう、誰も何も言わなかった。

樹生でさえも…。

4 6

「疲れたでしょう。少し休む？」

和奏は抱きしめていた腕をほどいて、かのんに微笑みかけた。太郎
がカフェオレのお代わりを持ってこようとするのを、もう要らない
よありがとう、とにつこりする。

かのんは涙を流すこともなく、じっと聞き入っていた。

その表情は穏やかで、和奏に身体を預けてまどろんでいた。その頃
の父と母の姿を思い浮かべながら。

「…演奏会どうなっちゃったの？」

わざとあどけない声。意識していた訳ではないけれど、今夜は誰か
に甘えたい。幼い自分に戻りたかった。

和奏は長いまつげを伏せて、薄く笑った。

「結局、西原教授の計らいで伊織くんは定演を待たずに留学。たっ
ちゃんのケガはけっこう深くて、とても吹けるような状態じゃなか
った。半年くらいかかったんだっけ？治るまでに」

そう言いながら太郎に視線を向ける。そうですね、コンチエルトは確かヴァイオリン科の誰かがやったような気がしますね。静かに太郎がそう付け加える。

「演奏会さえなかったら、二人は今でも友達だった？」

かのんは一つだけチョコをかじる。ほろ苦くて大人びた味。

「さあ、どうだろう。時間の問題だったと思うけど。いつかは壊れる関係だったのかもしれないわ。私たちはあんなに近くにいながら、伊織くんを理解してあげられなかった。傲慢だったのは私たちの方だったのかもね」

…君のお父さんの親友だよ。そうかのんに告げたときの高臣はどんな気持ちだったのだろう。

「お父ちゃんは騒ぎを起こしたから大学を辞めたの？」

そっと和奏は首を振る。大人の事情だから私たちにはわからないけど、と言いながら。

「どちらの家も大ごとにしたくないと、すべては伏せられてそのまま。伊織くんはフランスのお父さんの家に住むことを条件に帰って、もう二度と美沙子とは会わないと約束した。たっちゃんが大学を辞めたのはね…」

和奏ちゃん、太郎が止めようとするのを視線で抑える。

「これ以上隠してどうするの？この子には知る権利がある」

「僕らが必要以上に傷つけることもありませんよ」

いつもの太郎らしくない、強い口調。知らないでこのまま蚊帳の外？一生それで苦しめるの？和奏はあくまでも冷静だった。

「できちゃった結婚だって、どっかの雑誌に書いてあった。お母ちゃんもお父ちゃんもそう言ってた。違うの？」

かのんの胸が鼓動を早めた。あのチョコにはアルコールでも入っていたのだろうか。あたしは何？不意に思い出す、あの言葉。

キミハダレダ。

井上の家族の誰とも似ていない美しい少女。違う、あたしは井上かのん。そうでしょ？

「すべてが済み、みんなようやく落ち着いた頃、美沙子のおなかにあなたがいることがわかった。本人を目の前にして言うことじゃないことは重々承知よ。でも、あなたなら大丈夫。そうよね？」

かのんは真剣な眼差しで和奏を見つめてうなずいた。

何を言われても大丈夫。

何も知らされず守られてきた姫君は、いつか自立への殻を破らなければ世の中に出てはゆけないのだ。

「みんな反対した。ごめん、私も。中絶がいいことが悪いことが今は問わないで。事情が事情だから、苦しむのは美沙子だから、と。でもあの子は産むと言い張った。井上くんの子どものよ、愛せるに決まっているじゃないって」

待つて、よくわからない。お父ちゃんとお母ちゃんは付き合ってたの？伊織さんがフランス行っちゃってから？そうなの？

かのんの頭ががんがんする。どれが真実でどれが嘘なのか、ちつともわからない。

あたしが子どもだから？まだたったの十五歳だから？

混乱するかのんの両手を、和奏はしっかりと握りしめた。

「美沙子はね、優しくて繊細で、伊織さんと付き合っていた辛い過去を覚えていられるほど強くはなかったの。いくら医師やカウンセラーが治療を行おうが説得しようが、彼女の耳には入らなかった。ましてや素人の私たちが何を言おうと、彼女の中では伊織くんはただの友人にしかすぎず、それらはすべてたっちゃんに置き換わって記憶されていた。そうでなきゃあの子は生きてゆけなかったの」

穏やかな表情であなたが生まれるのを心待ちにしている美沙子を前に、誰も何も言えなかった。

和奏は唇を噛みしめた。何とえばこの美しい少女にうまく伝えられるのだろう。

言葉を選び、悩みながら、それでも言わなければならない事実。

「そのときのたっちゃん、あなたにも見せてあげたかった。かつこよかったのよ。まだ病室にいた彼女と東條のご両親の前でがばつと土下座までして、『学生という身分もわきまえず申し訳ありません。大学はすぐさま辞めます。幸い仕事のめどはついていきます。どうかお嬢さんと結婚させてください』って」

和奏は微笑んだつもりだったが、それはとても痛々しそうに見えた。事情を知るもの同士の、優しい嘘を重ね合わせた哀しい芝居。

「和奏ちゃん、教えて。じゃああたしの本当の両親は…」

できることなら訊かないで。和奏の瞳がそう訴えている。それでも訊かずにはられない。

「ごめん、かのんちゃん。本当のところなんて二人にしかわからない。ううん、きつとたっちゃんにしか。本人に訊いてみる？」

言う訳ないじゃん、あんなに娘を溺愛している甘いお父ちゃんが。二人でくすりと笑い合う。

「あたしはO型で、お父ちゃんもOだしなあ。伊織さんは？」

「残念でした。少女マンガじゃないんだから、彼もO型よ」

えっ？意外！！絶対ABだと思ったのに。今度は笑い声が大きくなる。

「でもみんな、あなたを愛してる。あのとき、あなたが生まれてくることを選んでよかったと誰もが思ってる。それだけは忘れないで」

和奏の優しい瞳。いつものセリフ。ほら背中がくすぐりたい。

「わかってるって。もうみんなそう言うんだから。かのん様がつけあがるのも無理ないよ」

かのんはにつこりした。大好きな言葉。悲しみも辛さもすべて消えてしまう魔法のような。ひとしきりしゃべり続け、疲れたのか、かのんは制服のままソファに横になってしまった。

すべてを話し、それでよかったのだろうか。和奏の逡巡は話し終えた後も続いていた。
かのんのためにタオルケットを持ってきた太郎は、何か飲みますかと和奏に声をかけた。
それに返事をするともなく、そばにあったブランデーをグラスにつぐと、まるで水のように和奏は飲み干した。

「和奏ちゃん…」

彼女は両手で顔を覆い、しばらくじっとしていた。
その肩を太郎はそっと引き寄せて、自分の体温で彼女を癒すかのように抱きしめ続けた。

47

「ぎゃー！！お父ちゃん！あれほどあたしのブラウスとお父ちゃんの靴下、一緒に洗わないでって言ったじゃん！！」

日曜の朝に、かのんの叫び声が響き渡る。恒例と言ってもいいほど、一日に何度かはこの声が狭い家を駆け抜けるのだ。

「あん？だつておまえ、白いもんは白いもん同士で洗えって…」

普段のステージからは想像できないほど、おろおろと樹生がその大きな身体をすくめる。

もういい！自分でやるから！かのんは洗濯槽に入っていた水浸しのブラウスを軽く絞ると、別の洗面器に放り込んだ。

ごめん、小さい声で樹生が言うのに、ちよつと大声出し過ぎたかな

と反省する。

……お母ちゃん、いつになったら……。

どちらもそう思いながらも、言えない言葉。

樹生はただでさえ新しいアルバム制作に入ろうかという時期なのだ。本来ならオフなど取っている暇などない。それを無理やり頭を下げて、こうしてかのんと過ごす時間をできるだけ作ろうとしていた。

「お母ちゃん、まだ会えない？」

「だいぶ落ち着いてきたみたいだ。もう少しすれば会えるさ。我慢できるか？」

かのんはこくんとうなずいた。食欲もだいぶ戻り、話しもあるようになったという。そして樹生が病室を訪れるのを、とても楽しみにしている、と。

かのんは、慣れない手つきで洗濯機に自分の服を入れる父親の手をそっと触った。

「なんだ？どうした」

彼女は黙って父の左手を持つと、手のひらをじっくりと見つめた。今まで気にもしていなかったからわからなかったが、言われてみればその大きな手のひらには縦に長く白いすじが残っていた。人差し指の付け根から斜めに手首の方まで。

あの話が現実であったという証拠を突きつけられたようで、彼女は息を飲んだ。

かのんのきょうしやな手がそこに重ねられる。首を曲げ、彼女は父親に寄り添った。

しばらく無言でされるがままになっていた樹生は、軽くため息をついた。

「誰かに聞いたのか。和奏…か？」

うつん、かのんが首を振る。何にも聞いてない。何も知らない。そう言いたかったし、戻せるのなら時を戻して、今までの守られていた殻にもう一度入りたかった。

けれど、時の流れは止められない。もうあたしは知ってしまったのだ。

「痛く…なかった？」

つぶやくようなかのんの言葉に、樹生は微笑んだ。

「昔のことだからな、忘れちゃった」

かのんは父を見上げた。昔のことなんかじゃない。あたしにとっては今も続いていること。

「お父ちゃんに黙ってた。ごめんなさい。お母ちゃんの事故の前に、あたし、一人で伊織さんに会ったの。写真を見せてくれるって言うから」

樹生の顔から笑顔が消えた。

「怖くなつて逃げ出したの。追いかけてきたあいつとお母ちゃんが会ってから、ずっとお母ちゃんが変で。どうして？そのときお父ちゃんに伝えておけばこんなことにはならなかった？全部あたしのせい？」

「違う、それだけは絶対違う。おまえは何も悪くない。おまえのせいである訳ねえだろ？」

樹生の大きな手がかのんを抱きしめる。いつもホツとする父の腕。幼い頃から安心しきって身を任せてきた父親のその大きな抱擁。

「もう会うな、関わるな。あいつとおれたちは何の関係もない。おまえはおれの大事な娘だ。わかるな、かのん」

和奏から何を言われても泣きもしなかったくせに、かのんは初めて涙をこぼした。あとからあとからそれは流れ続け、止まることがなかった。子どものように泣きじゃくり、樹生にしがみつく。樹生の手が力がこもる。

かのんは声を上げていつまでもしゃくり上げていた。

「上達早いわねえ、本当に今まで一度もピアノに触ってなかったの？ さすが美沙子の娘というか、若いからというか」

和奏はかのんの演奏に驚きを隠せずにいた。

ちよつと得意げな顔で振り向いたかのんは、早く次のところ教えてよ、と催促した。

「でも、本当にこの曲を弾く気なの？ もう伊織くんとは会わないってたっちゃんと約束したんでしよう？ だったら…」

そんなことは全然関係ないの！ 語気を荒くしてかのんは言った。

「ただ好きなだけなの。この曲が気に入ったの。一つくらい弾けて

もいいでしょ？」

ならばもつと易しくて聞き応えのある曲はいくらでもあるわよ。おそらく善意で言ってくれている和奏にむつとした顔をわざとする。

「そんなにあたしがこの曲弾くのがいや？」

しばらく黙っていた和奏は、そうね、少なくとも私たち四人にとっては複雑な思いね、とつぶやいた。
沈黙が続く。ピアノの音も止んだ。
不意に和奏が顔を上げた。

「ねえ、カノンの意味をあなたは知っているの？」

えっ？急に話題が変わってかのかんは面食らった。
突然セレブ相原の顔が目には浮かぶ。なんかパッヘルベルのカノンの授業で力説していたような気が…。

「カノンって、追いかけてこの曲でしょ？カエルの歌とか」

ふふ、ツと笑って和奏が代わりにピアノに向かう。
途端に流れ出す豊かな響き。

悔しいけれどかのんのたどたどしいクープランの墓とは全く違う。

「これがバツハのカノン。そしてモーツァルトのカノン。ベートーベンもあるわよ。それ以降はあんまりないけど、ヒンデミットなんていかが？」

和奏はそう言いながら、次々と美しいメロディーの曲を奏でてゆく。

「そんなにあるの？」

「クープランの墓は別にカノンでもなんでもないけれど、確かに最初のフレーズは追いかけてこね、あなたの言うとおり。たっちゃん
が吹くフレーズのあとをピアノが追従して。どれだけあの音色の重
なりに、心を動かされたことか」

くり返すくり返す、何度も同じ旋律を。そう、時が流れても人はま
た同じ間違いをくり返すんだわ。

かのんには聞こえないようにつぶやいたはずの和奏の言葉は、なぜ
か彼女の胸にそのまま伝わってきた。

私たちはまた、同じ光景を見続けるのだろうか。カノンのように。

「断ち切るの、あたしが」

えっ？驚く和奏にかのんは言葉を続けた。

「あたしはこの曲を弾く。伊織さんは約束してくれた。あの人より
上手に弾ければ、もうあたしたち家族には近づかないって。誰も信
じなくてもあたしは信じる。お母ちゃんもあたしも、今までずっと
たくさんのものに守られて傷つけられずに暮らしてきた。でもそれ
じゃダメなの。傷ついてもいいから、現実を見るの。そうしたいの
！いつまでもくり返すカノンなんてもう終わりにしようよ。そうで
しょ？和奏ちゃん！そして…」

かのんはここで言葉を切り、唇を噛みしめた。

和奏が優しく見守る。温かい視線。

そう、いつもあたしはこうやって守られてきたんだ。たくさんの愛

情に囲まれて、ふわふわのコットンにくるまれて。

もう、それも終わり。あたしはあたしの足で歩いてゆく。たとえその先に何が待っているようにも。

「あたしが、お母ちゃんを助けるの。みんなを、助け出してみせる」

和奏はもう何も言わずに、そっとうなずいた。

48

音楽室の脇の練習室。そこに置いてあるのはぼろくて調律もしていないアップライトのピアノ。音が外にもれないために、弦のところに古くさい毛布が押し込められている。響きを殺して、ほんの小さな音を丹念に拾う。でももうかのんには、この曲全体を暗譜してしまったので、指さえ動けば何とか練習にはなるだろう。

夜、和奏が帰ってきてからの練習では物足りなくて、かのんは誰にも言わずにこっそりこの部屋で練習を重ねた。どうせもともと楽譜なんて読めないんだから、指が覚え込むまでくり返しやるしかない。かのんはあまりに夢中になっていて、背後に人が立っていることすら気づかなかった。くもったピアノに映る人影。あわててかのんは振り向いた。

「うわ！セレブー！じゃなかった、相原先生。ごめんなさい、すみません、あのそのだから。どうか許してください！」

はずに構えた相原がかのんを見下ろす。かのんはありったけの言葉で必死に謝った。誰にも断らずピアノを弾きまくっていたのだ。彼女に叱られても仕方のないシチュエーション。

しかし相原は何も言わず、かのんの目の前にぴかぴか光る長い鍵を

差し出した。

「はい、これ。どうぞ」

「へっ？」

よほどかのんが間抜けな顔をしていたのだろう。あのセレブがこらえきれずに吹き出した。

「それからこっちの鍵も。これが講堂の入り口の合い鍵。私が作らせてもらったものだから大丈夫よ」

かのんは本当に何が何だかわからず、きょとんとした。セレブは何を言っているんだろう。

「聖上講堂のグランドピアノを使ってもいいと言っているのよ。ただし昼休みにね。それなら他の先生方にも見つからないでしょうし、まあちよつと、ばれるとややこしいから気をつけてね」

「講堂のグランド…って、めちゃくちゃ高いピアノなんですよ？」

「そうよ、ベーゼンドルファー。もう会社自体がつぶれてしまつて新しいものは手に入らない。あの舞台でどれだけのピアニストがあの楽器を奏でたことか」

どうしてあたしが？一瞬イヤな想像が駆けめぐる。

「まさか、まさかそれも伊織さんの差し金ですか？」

そう言うとセレブは気分を害したふうでもなく、コロコロと笑った。

「差し金なんて難しい言葉ご存じなのね。違うわよ、これは単純にわたくしからの好意。そのピアノじゃせっかくの『クープランの墓』が台無しよ」

聴こえてたんだ。ばつが悪い思いでかのんは首をすくめた。

「あなたはピアノを演奏する人。音楽をやらざるを得ない人。それくらいわたくしにだってわかるわ。どれだけあなた本人がそれを認めようとしなくともね。見届けたいと思っではいけないかしら？」

セレブラしからぬ優しい声。かのんは不思議な感情に包まれて彼女を見上げた。あたしがピアノを弾き出したら、世界がどんどん変わってゆく。もつと変わるんだろうか。あたしの力でみんなを変えられることができるんだろうか。

かのんは震える手で、光り輝く二つの鍵を手を取った。

あたしが自分の足で歩き出すための、秘密の鍵。

そんな気がして、しばらくじっと彼女はその鍵を見つめていた。

「だからってどうして私まであなたに付き合わないといけないの？」

大島はかなり不機嫌そうにステージ上のかのんへ冷たい言葉を投げつけた。

恭平はもうすっかり、探偵かボディガードにでもなったかのように、それらしくドアに耳を当てて外の様子をうかがっていた。

「ゴメン、大島さん。何となくあなたがいてくれると安心していうか」

これはかのんの本心だった。和奏から細かい指示はいくらでも聞け

る。教え方だつて解釈だつて一流の講師だ。でも、一人で練習しているとかとても心細いのだ。これでよかったんだろうか、合ってるんだろうか。不安ばかりが押し寄せる。

「大島さんはラヴェルを弾いたことある？」

かのんの質問に、大島はふんと横を向いた。

「小曲には興味ございませんから。私が弾くのはショパンやベートーベンやシューベルトといった作曲家の大曲が主なの。そりゃあ、ラヴェルにも名曲は多いけれどけっして主流じゃないわ」

じゃあどうして伊織さんも彼のお父さんも、ラヴェルに取り憑かれてしまったんだろう。人の運命を変えるほどのことをしてまでも。

「ほらさっさと弾きなさいよ。時間がなくてよ！」

口で言うほど大島が意地悪でも何でもないことは、最近かのんにもわかってきた。現にこうして突然の無理なお願ひも素直に（？）ついてきてくれる。

かのんはそれがうれしくて、ちょっと笑顔を取り戻すと、「クープランの墓」を弾きだした。途端に大島の表情が変わる。恭平にいたっては口をぽかんと開けている。

ほんのちよつと前までたどたどしかった旋律は、流れるようなそれに変わっていた。

指遣いはもうすっかり覚えている。テンポはもちろん遅めではあるが、かえってそれが叙情を醸し出すかのうように、かのんの良さを引き出していた。

かのんの一番好きな上昇旋律。三連符が延々と続き、ふっと頂上から降りてくる。

その瞬間、背中がぞくつとした。あるとき聴いた伊織高臣のピアノ。同じカタルシスを自分のピアノで再現しているのかと思うと、かのはほんの少しどきどきした。私にも弾けるのか。あの音が。大島が舞台上がってくる。かのはピアノに近づく。閉じられた譜面を開けて指をさす。

「ここ見て、スラーがかかっているでしょ？忘れないで」

音を止めて彼女を見上げたかのは、楽譜をのぞき込む。

「スラーって、何？」

はあ、大島がため息をつく。おかしい人ね、あなたって。呆れたようにつぶやく。

「今までピアノが弾けなかったんでしょう？それなのに今ではこんなに上手に、いいえ上手とかそういう言葉とは違う。人の心を打つ演奏ができる。なのにスラーも知らないの？」

ピアノがいいからなー、いくらするんだろ。おちゃらけたかのは言葉に、びしっと大島は言い返す。

「スラーは音をつなげるという記号！そこをぶちつと切ってはダメ！わかった？じゃあもう一回その前のところから」

大島って実はオニ講師かもしれない。かのはちょっとだけ顔をひきつらせるとあわててピアノに向かった。昼休みは短い。

中学生三人は、ピアノの特訓という秘密を共有しつつ、少しずつ大人の顔へと変わってゆくのだろうか。誰もが真剣で、誰もが音楽に

対して真摯だった。
変わってゆく、何もかもが。
かのんの周りの空気が動き始めたのを、黙って大人たちは静かに見守っているようだった。

#49

淀んだ空気が眠気を誘う退屈な午後の授業、総合とは名ばかりのパソコンのお勉強。かのんはさっさと課題を調べ終わると検索サイトにいろいろな文字を打ち込んで、ぼけっと見つめていた。
もちろん、すぐに履歴を消すのを忘れずに。

流行りのバンドのチェックとマンガの新作と、それからちょっと気になる俳優のプロフィール。ここからはメールもコメントも送れないから、我慢しながら読むだけ。家に帰ったらすぐさま同じサイトにアクセスしてやる。

思いつくものは全部入ってしまった。ふと、かのんは頭に残っていたバスクという言葉思い出していた。

バスク、バスク人。それがいったい何なのよ。

国の名前なら先生に見つかったところで何も言われまい。

それでもおそろおそろ、かのんはその文字を検索にかけた。

白い壁が印象的な建物一面に小さな窓がついている。。なんて綺麗な青空だろう。

『バスク地方、イベリア半島にあるピレネー山脈の付け根にあり、そこに住んでいる彼らバスク人の民族形態は近隣の諸地域とはあきらかに違って彼ら独自の文化、慣習が残っている』

フランスとスペインの国境にある地方、けれども双方の文化をも吸収しながらそのどちらとも違う独立した気高さ。

まだ見ぬヨーロッパに思いをはせながら画面を見続けていたかのんは、次の記述に愕然となり、思わず立ち上がった。

がたっ！椅子が倒れ、視線が集まる。

それにごめんなさいっ！と頭を下げながらも、かのんの動悸は治まらなかった。

『ケルト人は血液型においてはA型が非常に多い。一方バスク人は……』

バスク人は、そう、彼らは…。

O型が人口の大多数を占め、その八十五%が……Rh-。

バスクの血を引く者に最も多いのが、Rh-O型。あたしと、同じ。

もうかのんはいても立ってもいられなかった。あっけにとられるクラスメートと教師をその場に残し「すいませーん！具合悪いんで早退します！」と叫ぶと、急いで自分の教室に走って行く。

最低限の荷物を持ち、部屋を飛び出そうとすると誰かにぶつかった。やべー！！担任？

「どこ行くだよ！！まさかおまえまた！」

その声はいつもより低かった。聞き慣れたはずの声がだんだん男っぽさを増してゆく。顔を上げるとそこにいたのは恭平だった。

「またって何よ。恭平とは関係ない！」

「伊織高臣のところになんか、行かせねえ」

恭平の瞳はいつもと違っていた。ものすごく真剣で、射るようなそのまなざし。

「手を離してよ！行かないわよ！それに…もし行くとしたって恭平には！」

「関係あるよ！！もうあんな思いはゴメンだ。おまえを助けられなかった。苦しんでるのに気づけなかった。おれはずっとそばにいたのに、おまえのこと何にもわかんなくて、それで何もできなかった。おれは！」

ちよつとあどけなさを残した声に戻って、まるで今にも泣きそうなの。恭平。

かのんはすう、と息を吸うと穏やかに話し出した。

「違うの。伊織さんのとこになんか行かない。和奏ちゃんそこ行って教えてもらおうと思ったことがあるの。だから心配しないでよ」

恭平は制服の袖で目をこすった。泣いてなんかない、そうポーズを取ろうとしたみたいだけど、まるつきり失敗してる。

心配に決まってんじゃない、おまえ何するかわかんねえし。そうつぶやく恭平にかのんは思わず口にした。

「恭平は、あたしが井上樹生の娘だからそういつぶうにいつも心配してくれんの？」

井上樹生の娘、もし…もしそれが。

「バーカ、鈍感。逆だよ」

ふてくされた顔で恭平が面を上げる。へっ？どういうこと？

「おまえ初等部の頃、これあたしのお父さんのCDなんだ、恭平にもあげるねって。わざ

わざサイン入りのヤツ、すっげえうれしそうに。覚えてねえだろ？」

「恭平…まさかあんた、だからジャズのバンド組んで？」

恭平は答える代わりにそっぽを向いた。口をとがらせ、ほんのりと頬を朱に染めて。

かのんはそんな彼に向かって、そして自分自身に言い聞かせるようにきっぱりと言った。

「はつきりさせるの。もう、よくわかんない亡霊みたいなヤツに取
り憑かれたままにいるのはイヤ。あたしはあたし。井上かのん。そ
うだよな？恭平」

恭平は彼女の言葉が理解しきれずに、目をぱちくりさせた。

それにほんのちよつと吹き出して、じゃあ一緒に来る？とかのんは促した。

戦うのだ、これから。たとえ結果がどうであろうと。たとえ、たとえ家族がそのためにばらばらになろうと、かのんが生き続けてゆくためには必要なこと。

すべてを断ち切って、自分が自分であり続けるために。

まるでロールプレイングゲームの女主人公になったがごとく、かのんは威厳を持って歩き出した。

ただの廊下が、重厚な歴史あるバスク地方の城内にでもなったかのように光り輝いていた。

国立京成病院のエントランスは、天井が高くまぶしかった。ステンドグラス様の飾り窓が光をたっぷり注ぎ込む。病院とは名ばかりのホテルのような内装。それだけで中学生二人は完全に萎縮してしまっていた。

「どうする？ やっぱり止める？」

和奏がわざと挑発するかのようになり、微笑む。

「ここまで来て…」

かのんの声は震えていた。あの事故以来、この病院には来ていなかったのだ。母にも一度も会えずじまい。会えばイヤでもあの声を出す。拒絶されたあの態度を。

「和奏さん、いいんですか？ 井上とお母さんを会わせるなんて大事なことで、彼女のお父さんに言わなくて」

ふふ、和奏は意味ありげに笑って視線を恭平に向けた。彼は美しげな瞳にドギマギしつつも不安を感じていた。

「医師からもカウンセラーからもね、再三会わせるように言われたのよ。現実を受け止めさせる時期が来ているとね。それをたっぷりやんがどうしてもまだ早いって。彼には私から言っておいたわ。任せる、ってたった一言のメール。あいつらしいわよね」

ふつと言葉を切ると、和奏は恭平に向かって、あなたがかのんちゃんのナイト？と訊いた。

「あのね、和奏ちゃん？変な誤解しないでくれる？恭平はただの同級生で…」

「おれが、井上を守りますから」

きつぱりと恭平は言った。かのんが目を丸くする。でもそれは不思議といやな感じはしなかった。

いつのまにか二人は、そつと手を握り合っていた。触れ合っていたという方が正しいのかもしれない。威圧感に負けぬように、これから何があっても大丈夫なように。

美沙子はあえて個室に入っていた。昼間は一人。それが落ち着くようだからと樹生は手配し、日当たりのいいこぢんまりとした部屋を選んだ。

ダイバージェンスは確かに人気のあるグループではあるけれど、週刊誌に名の載るような一般受けするバンドではなかった。テレビのBGMにもCMにも、ばんばん使われていたが、彼らのバンド名を知るものはかなりのマニアだけだろう。井上樹生はある意味、閉ざされた世界のヒーローなのだ。

マスコミ対策はだから、すべて矢崎に任せ、美沙子は一人静かな空間で療養することができた。何も気づかなければ。何も知らなければ。

なかったことにしてしまえばいい。

和奏は彼女が最初に遭った事件を一人反芻していた。あのとき無理にでも真実を伝えていれば。でもそうしたら、ここにかのんが居ることはなかったのだ。

複雑な、あまりに重すぎる思いを和奏はため息とともに吐き出した。

白い廊下を黙って三人は歩いた。どこまでも続くかと思われた。

続けばいい、かのんはそう願った。メビウスの輪のように、歩いても歩いても病室へはたどり着かない。それでもいいとさえ祈った。けれどいつしか、角を何度も折れ、まぶしいほどのナースステーションを過ぎると、そこは母の病室だった。とうとうここまで来てしまった。

あんなに偉そうなことを言っておきながら、かのんの胸ははりさけそうだった。

また拒絶されたら、あたしはどうしたらよいのだろう。

思わず恭平の手をぎゅっと掴む。彼も力を入れかえし、かのんの左手を包み込むようにした。ほっとする。人の温かさはいつもこうやってほっとさせてくれる。

お母ちゃんが抱きしめてくれた。お父ちゃんの背中に抱きついた。いつもいつもあった井上の家での当たり前前の光景。

かのんは唇を噛んだ。

和奏が連絡を入れたのだろう、いつのまにか柔和な女性カウンセラーがかのんたちの後ろで微笑んでいた。ちらっと振り向くとにこやかにうなづく。

みんなの柔らかな視線に背中を押されて、かのんはドアをノックするとためらいがちに真っ白なドアを横にスライドさせた。

母は、美沙子は窓の方を向いていたが、そっと振り返る。和奏を見て笑顔を浮かべたが、その後ろにかのんの姿を認めると、途端に顔をこわばらせた。

カウンセラーが母の背中を優しく抱きとめる。身体を震わせる彼女に、和奏が言い放った。

「よく見なさい美沙子。この娘は誰？あなたの大切なかのんよ！」

両手で顔を覆うのにずかずかと近づき、その手を払う。

「まだ逃げるの？いつまで逃げ続ければいいと思ってるのよ。現実をしっかりと見て！この子はあなたが生んだ娘よ！」

「和奏ちゃん！」

耐えきれずにかのんは彼女の腕を引っぱった。無理に言わなくていい。焦らせなくていい。永遠に言わなくなつていい。お願いだからお母ちゃんを苦しめないで。あたしは、あたしはいいから。

震え続ける母は、それでも手を下ろしこちらに視線を送った。

目と目が合う。お母ちゃん。かのんの切れ長でそれでも大きな瞳から涙があふれる。

その様子をじっと見つめていた母は、辛そうにこうつぶやいた。

「ごめん…なさ…い。伊織くん」

母は事故以来、初めて泣き崩れた。

「おれ、外に出てようか？」

そつとささやく恭平に、かのんは逆にしがみついた。手を離さず体重をかける。今は誰にすがればいいのか、彼女自身にもわからなかった。

来客用の小さなソファ。そこへ若い二人が座る。カウンセラーは窓際の事務用の椅子へ、そして和奏は美沙子に寄り添うように同じベツドへと座り、彼女の背中をなで続けた。

泣けるのなら泣いてしまえばいい。悲しみを押し込めるのが一番辛いこと。

顔を和奏の肩に押しつけて美沙子は泣き続けた。ただ、そこにもう前のような激情も恐怖もおびえもなかった。あるのは純粹な悲しみだけ。

ゴメンナサイオリクン。

どういう意味なんだろう。

かのんの頭の中をさっきのセリフが駆けめぐっていた。

母はまだ彼を忘れられないんだろうか。

もう、大人の事情なんてわかりたくもない。

けれど否応なしにあたしたちはいつまでも小さな子どものままでは
いられないんだ。

母の混乱のようにかのんの胸の中も嵐が吹き荒れていた。

5 1

誰もが無言だった。話のきっかけをあたしが言い出すべきなんだろうか。かのんはさっきからずっと迷い続け、それでも何も言えずにいたのだ。

真実、ただ一つの事実。それをはっきりさせるのが怖かった。変わらない、何も今まで変わらないと信じたくても無理かもしれない。そうなったらあたしはどうしたらいいんだろう。

息継ぎをするように口を開けたかのんに、美沙子は目を向けた。
びくつと身体をはじけさせて、かのんは硬直した。とても、とても
寂しそうな瞳。

「お母ちゃんは、あたしが嫌い？」

思わず口にしてしまった言葉。そんなこと言うつもりもなかったのに。

しばらく母は黙っていた。いつもの微笑みは今はない。

「ずっと、ずっと伊織くんに憧れてた。でもそれはアイドルを追いかけるような気分だった。あの人を声をかけてくれるなんてあり得

ない。だからどうしていいかわからなかったの」

微かな声で言葉をつなぐ。母ではない、女として。和奏と同じ歳でタメ口だつてきけるはずでも、母は母だった。でも今は彼女は東條美沙子。時をさかのぼっている。それだけはかのんにもわかった。

「練習室のドアを開けてもらったときから、もう元には戻れないと思った。井上くんが私のことを思ってくれていることは知ってたわ。とても嬉しい好意。きつと華やかな伊織くんに憧れながら、井上くんと穏やかな生活を送れたら素敵だなんて。でもあの瞳に逆らうことはできなかった。言われるがままに部屋に入って、ピアノを弾き続けて、そして……」

和奏が美沙子の肩をぎゅっと抱きしめる。

美沙子は言葉を切った。

それでも顔を上げて、声はますます小さく、聞き取れないほどかすれ。

「彼のあの淡いブルーの瞳は私など見ていなかった。それはすぐにわかった。伊織くんは遠くを見ている。いつでも私を通して……井上くんを。ああそうか、彼は私を憎んでいたんだ。ようやく気づいた。それでも叩かれても殴られても、どんなにアザが増えてゆこうと、彼から離れられなかった。伊織くんもまた、離そうとしなかった。私がここにいれば樹生が苦しむ。僕はそれがうれしいんだといいながら。そう言っただけで本当に苦しんでいたのはあの人の方だったの」

こほ、こほと咳き込む。

カウンセラーがずっとペットボトルの水を差し出す。

全部今言う必要はないのよ、穏やかな声。

「思い出すこともなかった。伊織くんのことなんて。私にとってはただの友人としてしか思い出になかった。心にずっと蓋をして気づかぬふりをしていた。でもあの日から、十五年ぶりに逢った伊織くんは何一つ変わってなくて。そして私には、かのんがいた」

真つ直ぐ見つめる目。かのんも見つめ返す。唇をぎゅっと噛み、手を握りしめて。恭平がその手の上に自分の手を重ねる。

「あの人と同じ薄茶色の柔らかな髪、あの人と同じ抜けるほど白い陶器のような肌、あの人と同じ…青く輝く瞳」

「だから憎かったの？あたしは憎い憎い伊織さんとの子どもだから、お母ちゃんはあたしを殺そうとした…の？」

不思議と涙すら出なかった。

誰もが知っていたことなのだろう。

柔らかい羽毛で包み込むようにかのんを守り通したかった周りの大人たちは、いつだって彼女を愛し続けてくれた。

でもそれは、ただ一つの悲しい嘘の上に立つ砂上の城。母が記憶を取り戻せばすべて終わること。

辛い思いを押し殺してまで、自分の子どもとして愛し続けてくれた父はどんな気持ちだったのだろう。

美沙子は目をつぶった。

それまで弱々しく和奏の肩に預けていた身体を起こし、そっと目を開けると立ち上がった。

そしてかのんの座るソファまで来ると、彼女を優しく包み込んだ。

「私はね、お母ちゃんはあるあなたを失いたくなかったの。なんて傲慢で酷い母親だと思うでしょう？でも、もし新しい命が生まれてきたら私はあなたを愛し続けられるだろうか。不安で不安で仕方なかつ

た。お母ちゃん、あのときどうかしてた。誰が生まれようがあなたはお母ちゃんたちの大切な娘で、お父ちゃんの子で、何も変わらないのに。いつも逃げ続けていた罰が当たったのね。とにかくその場から逃げたかった。伊織さんのあの瞳から、寂しげな辛そうな思いから。また、お母ちゃんの大切なものを取られるくらいならいっそ」と

おかあ…ちゃん。かのんは言葉にならなかった。涙が次から次へとあふれてくる。

母は、新しい命と引き替えにあたしを選んだ。
重い重い罪。

それはこれからずっとあたしたちが背負ってゆかなければならない罪。

けれど、母は生きるにはあまりに辛い現実の世界へと戻ってきてくれたんだ。

それがよかったことなのか、どうなのか。答えは今わからない。でもまぎれもなくあたしはお母ちゃんの娘。そして…。

伊織高臣。

あの人が母の前に現れなければ、幸せは続いた。でも、それは偽りの幸せだったのか？

真実を知らなければ、いつかはこうなっていたとでも言うのだろうか。けれども、こんな方法じゃなくなっていくらでもやり方はあったはず。

かのんは関わり合う人すべての幸せを壊してゆく高臣に対して、今さらながら激しい怒りを抱いた。

「ねえ、お母ちゃん？あたし和奏ちゃんにピアノ習ってんだよ」

「えっ？和奏に？」

懐かしいくすぐったそうな母の笑顔。和奏はちょっとだけばつが悪そうな顔をした。

「現役の人気講師を前に恥ずかしいんだけどね。どうしてもってかのんちゃんに頼まれて。筋はいいわよー。さすが美沙子の子だと思っただわ」

「それで、ツエルニーから真面目にやってるの？」

ようやく和らいだ空気が病室に流れた。

できるならこのまま、何も告げずにこのままでいたい。和奏の気持ちもかのんのそれも同じことだった。でも、言わずにはいられない。

「かのんちゃんが弾いてるのは、『クープランの墓』よ」

美沙子の顔が凍り付いた。

「お母ちゃん聞いて！あたしこれでちゃんと決着つけるから！あの人と戦うって決めたの！もう絶対にあたしたちに近づかないでって、約束させたんだから！！」

幸せは自分を守る。家族はあたしが守る。かのんが真実を知ったとわかれば樹生と今までのように暮らしてゆけるのか、彼女にはとてもそんな自信はなかった。

でも、カノンの連鎖なんて絶ちきってやる。

かのんの決意が伝わったのか、母は彼女の髪をなで、もう一度しっ

かりと抱きしめた。

5 2

ダイバージェンスのチケットなんて、欲しければいつでも手に入る。それはわかっていた。券なんかなくなつて、矢崎さんに一言声をかければすむこと。

でもかのんは、電話をかけまくってなんとか当日券を手に入れた。二人分。東京コンチネンタルホール。できたばかりの新しいイヴェント会場で追加ライブをするからと、急遽売り出されたチケット。お父ちゃんには内緒で見してみたかったのだ。幼い頃の大きな音とか覚えのない音楽ではなくきちんとした形で。

恭平はＴシャツの上にラフなジャケットを羽織ってきた。ステージ衣装なんだ、耳元でささやく。少しでもいっさんに近づきたくて、彼はそう言うところとにはいかんだ。

うちにいるときの井上樹生は、ジャージ姿の親父だよ？笑って言おうとしたけれどかのんはどうしても微笑むことができなかった。

この間の話はまだ誰も樹生に伝えていない。知っているのかわからないのか、父は変わらずに接してくれていたけれど、かのんはこれからどうしたらいいのかわからなくなっていたのだ。

戦いは戦い。けれど父親は、本当の父は……。だからこそ、井上樹生の音楽を聴きたい。かのんはそう思った。できればクラシックヴァージョンのラヴェルを聴きたいところだけれど、樹生が吹く訳がない。だからせめて。

当日券にも関わらず、思いがけなく前方の席だった。キャンセルでも出たのだろう。

会場は熱気であふれていた。着くのが遅かったせいかな、もうあらか

た客席は埋まっっていて拍手が起こり始めていた。

リズムミカルな手拍子、あおり立てるような開演前の音楽。

ふっと、客電が消えた。

うおーっと地鳴りがするような声。何事？と思わずかのんは振り返った。

女の子より、男子が多いんだ。いやどっちかつつとおじさん？

乾いた音でカウントが四つ。途端に大音量が流れ出す。

拍手と騒ぎ声と、それに負けないほどのドラムスのキック音とギターのカツティング。

ベースが前に来て、よく指先が見えないくらい速いフレーズを弾くと、場内はわあっと盛り上がった。一斉に客が立ち上がる。かのんたちもおおずとそれに従った。

かのんがテレビで聴くような歌手の音とは全然違う。それぞれの楽器が自分の腕前を競うかのように次々と技を繰り出す。恭平は興奮していたけれど、かのんの目は必死に広いステージの上をあちこち探しまくっていた。前の人の背が高すぎてよく見えない。

お父ちゃん？父は？いや、井上樹生は？

曲は中盤にさしかかっていた。舞台の中央に一段高く設けられた台上に人影が見えると、客席のボルテージはさらに上がった。

「いっさん！いっさん！」

客の声は止まらない。隣で恭平までが大声を張り上げている。

いっさんと呼ばれた彼は左手を高々と上げた。右手には光り輝く楽器。

あの人は、誰？見たこともない人。あたしの、知らない…人。

ようやくステージまで降りてくると彼は合図を出した。リズム隊がすっと静かになる。

チキチキ刻むハイハットの音だけが響く。樹生はマウスピースをくわえ、正面を向いた。

わずかにアルトサクスを振り上げ、下ろした瞬間！！

バンドが炸裂した。

さっきまでの音とは全く違う。ずしりと身体中に直接響く音。でも速度は決して落ちてない。なんて速いパッセージを、いとも簡単にこの人たちはやってのけるんだろう。

そしてセンターの樹生は、リズム隊の軽やかな音とは正反対の太い芯のある音色で同じフレーズを吹いていた。同じはずなのにあきらかに違う。パワーとかエネルギーとか、そういうもので言い表せばいいのだろうか。

引き込まれる。

他の音が耳に入らなくなる。

全員が同じメロディーで音を重ねているはずなのに、アルトサクスの音しか聴こえない。

なんて存在感。

そのままアルトのアドリブソロに突入する。

「これだよ、これ。なんてったって最高だぜ」

恭平が耳元でけっこう大きな声を出す。そうでなければ聞こえないでもかのんの耳には入ってもいなかった。目が離せない。

前に言っていた恭平の言葉が突然思い出される。

…リズム隊は軽いんだよ、でも井上樹生はそうじゃない…

確かに違う。クラシックもジャズも音楽なんて何も知らないかのん

にでさえ、違うことがわかる。

不協和音的にぶつかり合うフレーズ同士が、なんでそんなふうにくまぐますり抜けてゆくのか？

まるでぎりぎりのところで、音同士が重なり合ってハーモニーを作る。それも一瞬一瞬。だから聴く方も気が抜けない。まさかと思うようなアプローチの仕方では音が迫ってくる。

なのにバックイングとシンクロしているのは変わらない。

そして、何よりもその音色。

父が家で楽器の手入れをしているところなんか見たことない。練習するところだって一度もない。高いアメセルとかいう高級品を持っている人も多いらしいのに、お父ちゃんときたら、高校のころ受験用にしぶしぶ買ってもらった古くさい国産品を使ってる。

ここの楽器とは相性がいいんだ。職人肌で作ってるところがさ。そんなふうには言いながら。

そのヤナギサワのアルトが、今こうして重く太い豊かな音を響かせている。

圧倒される。

ようやく長い長いオープニング曲が終わった。

ほっとしてかのんは息をついた。

「おまえ、ちゃんと息しろよ。今からそんなじゃこのあと酸欠になっちゃうぞ」

恭平はステージを見るよりもかのんの様子に心配になったらしい。まめに声をかける。

声援は止まない。ステージの上の樹生は楽器を一度外すところぶしを突き上げた。

息を整えてマイクに向かう。

「おーい！おめえら！！よくまあこんな平日に集まったもんだなあ！！！」

いつさーん！それは見知らぬ誰かが父を呼ぶ声。かのんの知らない別人の井上樹生を皆が憧れの目で見つめ続ける。

ハイテンションな声、明るくにこやかな笑顔、そして楽器を吹くときの引き締まった表情。

どうして、どうして大人はこんなにもたくさんの顔を持っているのかのんは急にとらわれたその想いに、やりきれなくなった。

太郎ちゃんだってそう。あんなに普段から変わらないような優しげな彼だって、学生の前では准教授。そして素晴らしい曲を書く評価の高い新進現代作曲家。そんな姿、あたしは見たことなんてない。和奏ちゃんだって、さぞ高級ホテルのラウンジが似合うことだろう。そして、母も美しい男の子に憧れる少女から女へ。おとなしい控えめな女性と誰もが言う彼女の内に秘められた激しい感情。

列の一番端に座っていたかのんは、その場の衝動からとっさに出口へと駆け出そうとした。

彼女の腕を恭平がしっかりと握りとめる。

「離してよ！」

「最後まで見る！！井上樹生のステージを見るよ。そうすればどうしておまえのお父さんがこんなに人気があるか、よくわかるよ」

「わかりたくない！お父ちゃんはお父ちゃんで、ダイバージェンスのリーダーなんかじゃない！」

みんなが変わってゆく。すべてが形相を変えてゆく。信じられるも

のが何もなくなつて、あたしは一人放り出される。

ああ、本当にあたしは何も知らされず、ただただ堅い殻に守られていたんだと思うと、いたたまれなかった。

「それでも戦うんだろ？井上は。おれはいつでもそばにいるから。見てやるから。助けがいるときはおれに言え。絶対大丈夫だ、井上なら」

「……井上、じゃない」

恭平は目を見開いた。

「あたしはかのん、ただのかのん。戦うよ、みんなを守るために。それは誓うから。でも……」

戦いのあと、あたしたちはどうなるのだろう。

下を向いたかのんの顔を、恭平は無理やり右の手で上げると瞳をのぞき込んだ。

「かのん。おれが守る。だから遠慮なく戦え」

恭平……。

あたしのピアノを父にも母にも聴いてもらうんだ。

そう、過去にとらわれて縛られもがいているあの五人をみんな集めて、まだ若かったあの頃にきっちり決別させてやるんだ。

中学生に何ができる？伊織さんなら鼻で笑うだろう。でもあたしはもう子どもじゃない。

音楽は遙か彼方の遠いものじゃなくてあたしの味方。

そしてあたしには恭平がちゃんと手をつないでいてくれるから。

盛り上がるライブ会場の暗い客席で、二人は肩を寄せ合った。恭平はしっかりとかのんを引き寄せ、力いっぱい抱きしめた。

#53

国立G音大小ホール。ここを借り切ったのは今日は太郎の口利きだった。他の誰も入れたくない。スタッフでさえ断った。最初のセッティングだけでもえばいいから、と。

小ホールと言えども音響は素晴らしく、独奏曲のレコーディングにもよく使われる。

四方の壁は年代を感じさせる木目の美しさが光っていたし、その独特の反響を計算した形状が、ここを音楽ホールなのだと意識させていた。

かのんはわざと制服を着てきた。あたしは中学生で高等部はまた微妙に制服の型が違う。もうじき別れるこの服で、あのピアノに向かいたかった。

あたしに合わせてくれたのだろう。恭平も詰め襟の学生服だった。今どき珍しい昔ながらの形。わずかに青みがあった色だけが聖上学園をアピールしていた。

そして、かつてG大奇跡の五人組と呼ばれた大人たち。

美沙子は和奏に肩を抱かれて、ストールの前をしっかりと握りしめていた。

その横に樹生が座る。彼一人、事情を直前まで知らされていなかったとさんざんここに来ることをごねたのだ。

なぜ今さら高臣に会わなくちゃいけない？

それも何でかのんがピアノを弾かなければならないんだ？

バカバカしい。何の茶番だ。こんなことに付き合ってられるか。

そう吐き捨てた樹生に向かって、和奏は厳しい言葉を投げつけたの

だ。

「いいこと、たっちゃん。あなたが見せた美沙子への優しさのつけを、今かのんちゃんが必死で取り返そうとしているのよ!？」

「……優しさの…つけ？」

樹生は言葉に詰まった。

「どんなに残酷であろうと、美沙子がどうしても現実を受け入れな
かろうと、この事件はあのとときにきちんと解決しておかなければな
らなかった。そうでしょう？ 事實は事實、現実は変えられない。そ
の上であなたがかのんちゃんを自分の子どもとして受け入れたのな
らいい、でも実際は！」

「かのんはおれの娘だ!！」

低く唸るような声で、樹生は怒りを抑えながら和奏に食ってかかっ
た。

その場にいた全員が、息を止めた。子どもには聞かせたくねえ、も
うこれ以上は。そうつぶやく樹生に、通路を歩いてきた太郎がはっ
きりと言った。

「かのんちゃんも、彼女を支えてくれている恭平くんも、もう子ど
もではありません。歳月は流れ、いつか皆、成長してゆくんです。
かのんちゃんの苦しみを考えたことがありますか？」

お父ちゃんを責めないで。かのんは恭平に指を絡めてそう祈った。
でもとても口に出せるほどの余裕はなかった。あたしの戦いはこれ
から。今はただ聞くことしかできない。

「優しさからついた嘘の上に、幸せは築けない。じゃあなぜ美沙子は薬を飲んだの？ガスをひねったの？」

美沙子が目をつぶる。樹生はそちらにそつと視線を送ってから、辛そうに言葉をつないだ。

「美沙子さんだけじゃねえ。おれも自分の子どもができたと聞いて、どうしていいかわからなかった。ああそうさ、その気持ちを察してしまったんだろう。おれが迷っている。いや、拒否している。欲していないと、否定している。おれが…悪いんだ」

樹生の大きくてごつごつとした指が、今は彼の顔を覆っている。

誰もが黙って彼の言葉を待つ。

言いたくなければ言わなければいい。もう十分だ。それでも樹生は話すのを止めなかった。

偽りの優しさがどれだけ残酷で人を傷つけるのか。

たとえそれがまるっきりの善意から出たものであっても。

「おれはかのんがかわいいんだ。おれの娘だ。大事に大事に育てた。けれども、血のつながりの前で自分の子どもが目の前にほら、と差し出されたら。かのんを失うのが怖かった。最低な親だよ、おれは」

母と同じセリフをつぶやく父の姿は、この間のライブとは全く違つてとても小さく弱々しく見えた。

「血のつながりって、そんなに大事？」

思わずかのんがほんの小さな声でささやく。それは小ホール特有の

反響によってその場の誰の耳にもはつきりと聞こえた。

「そうじゃねえ。いつか、いつか高臣が目の前に現れて、おまえを
かつさらっていくんじゃないかねえかって。おれはずっと怯えていた。だ
から音楽にさえ近づけさせなかった。わかっていたさ、おまえには
才能があるだろう。そしてそれは、ラヴェルの、バスクの血がもた
らしたものだと言われてしまうのではないかってな」

黙って聞いていたかのんはすくつと立ち上がると、神々しいまでの
張りのある声ではつきりと言いつつ切った。

「あたしもずいぶん見くびられたもんだね、お父ちゃん。あたしの
ことはあたしが決める。そうでしょう？」

かのん……。誰もが彼女を見つめた。

音楽の神、ミューズ。

そして戦いの女神、それは彼女自身。

うら若きミューズの神託は続く。かのんは手をぎゅっと握りしめて
ステージの方を向いた。

「隠れてないで出てきなさいよ！伊織高臣さん！」

その言葉に、袖の上手からまるでリサイタルを始めるかのように優
雅な足取りで高臣が登場した。

樹生が顔を上げる。その目が見開かれる。

高臣と目が合う。片方には怒りが、そしてもう片方には冷酷な光が。

「約束でしたよね。あたしがあなたなんかよりプレリユードをちゃ
んと弾けたら、もうあたしたち家族には近づかないって。あれは嘘

じゃないでしょう？子ども相手の冗談でもないですよね！？」

高臣は口の端をゆがめると、皮肉気にこう言った。

「ああそうだ。確かに僕は約束した。そして君が決して僕にはかわないことも。十五年間も家族ごっこができたんだ。さぞ楽しかったことだろう。樹生にもその女にも誰にも似ていない美しい娘、井上かのん。君の姿を見た瞬間、すべてがわかったよ。樹生は僕の娘を大切に育ててくれたんだってね。こんなに愉快なことがあるだろうか？」

彼なりの精一杯の笑い顔なのだろう。なんて冷たくてなんて、哀しい。

「さあどうぞ、お嬢さん。それとも我が愛娘と呼んだ方がいいのかい？」

イヤなヤツ。あんななんか大嫌い。かのんはありったけの侮蔑の視線を高臣に送った。

もうかのんの指先は緊張で冷え切っていた。和奏の方をちらっと見る。彼女は深くうなずいてくれた。ちよっとほっとする。

父、母、太郎、そして最後に恭平を見る。

ガッツポーズなんてこの場に似合わないでしょうが。ほんの少し頬が緩む。そうしてから

椅子に座ってそれを引き寄せる。がたがたっという音が現実感を少しだけ呼び覚ます。

とっておきのハンカチで手をそっと拭くと、最初の鍵盤に指を置いた。

ゆっくりゆっくり、急ぐことなんてない。あたしだけのプレリウド。

かのんは頭の中に豊かに広がる響きを思い浮かべた。

5 4

最初の一小節近くは右手だけ。すうつと息を吸い込むとかのんはその旋律を弾き出した。

左手は軽く音を添える。響かせて、鳴らせて。音楽を表現することが、あなたにはできるのよ。和奏の声が思い出される。

誰もがそのピアノの音色に息を飲んだ。これが、つい最近まで楽器など触ったこともなかったかのんの演奏なのか。メロディーはよどみなく流れ、旋律はだんだん盛り上がってゆく。三連符が続く。正確なのに表情豊か。細かな装飾音も華やかさを添えている。

高音部から低音部まで、レンジを広く使い、音がホールいっぱいに広がる。

樹生はとても聴いていられないとでもいうように口元を押さえた。

これがかのん。彼女本来の力。おれたちは彼女を狭い世界に閉じこめていただけだったのか。バスクの、高臣の音楽を継ぐ者。かのんはおれたちから……。

太郎が沈み込む樹生の肩を叩くと、わかっているとも言うようにそつと首を振った。

違います。かのんちゃんが戦っているのはそんなことのためじゃない、と。

最後の、管弦楽版で言えばハープをかき鳴らす場面が終わり、ようやくほうつとかのんは息を吐いた。

そう言えばどこで息を吸ったんだろう、それすら覚えてない。

とにかく最後まで弾けた。それでいいや。

立ち上がったお辞儀をしてみせると、それまでとまどい顔の客席から大きな拍手がわいた。

たった五人の客。でもみんな精一杯の拍手をくれた。嬉しくて思わず微笑んでしまう。

ただ一人硬い表情をして、高臣はステージ上にいた。拍手する余裕もないかのように顔をこわばらせて。

かのんがここまで弾くとは思っていなかったのだろうか。それでも皮肉屋の口は減ることはなかった。

「こんな茶番劇はさっさと終わらせてしまおう。次は僕だね。なにを弾いて欲しい？リゴドンでもメヌエットでも……」

「同じプレリユードを！」

そう言い切るかのんは、もう決して弱々しい子どもでも樹生に抱きついて甘える少女でもなかった。

あたしが断ち切る。カノンなんて。

ふっとため息をついて椅子の調整をする高臣はそれだけで絵になるほどの美しさだった。ああそうだ、みなそれに引き込まれる。彼自身が一つの芸術品のような。

膝の上にいったん手を置き、呼吸を整える。そして彼はおもむろに鍵盤に指を添えると最初の音を弾き出した。

ああ、この音だ。ころころ転がる光の粒。涙が出るほど美しい音。

しかし、樹生も太郎も一瞬にしてその表情を変えた。もちろん他の二人でさえも。

かのんはキツと壇上の高臣を見つめて動かない。しかし恭平は大人たちの変化にとまどいを感じていた。十五年経っていたとしても聴

き慣れたはずの音だろう？なぜ今になって驚くのだろう。
かのんですら、途中から不思議そうな顔をした。

違う、なにか違う。どうして？あたしがこの曲を弾き込めば弾き込むほど、伊織さんの音が色褪せてゆく。そんなはずなのに。彼はラヴェル研究家の第一人者で一流の演奏家で。

最後の音を弾き終わると同時に、樹生はたまりかねたように舞台に駆け上がった。

そして、高臣の胸ぐらを掴むと食ってかかった。

「どういうことだ、高臣！！子ども相手に手を抜いたのか！？」

高臣は目をそらした。気位の高い彼にしたらめったにないことのはず。

太郎が厳かに宣言する。

「勝負はありましたね。あきらかにかのんちゃんの演奏の方が素晴らしいかった。伊織くん、負けは負けです」

わざと、負けてくれたって…こと？

「そんな！あたしは真剣に弾いたのに！！」

かのんは叫んだ。恭平が近づいてそつと腕を取る。

「違うわよね、伊織くん。さっき弾いたプレリユードが今のあなたの実力。そうでしょう？」

ヨーロッパの情勢に詳しい和奏は、そつと言葉を添えた。
何だど？樹生が唸る。高臣を押さえつけていた手が緩む。思わず彼

はごほごほと咳をした。

気高い彼が初めて見せる、弱々しい表情。誰もがなにも口にできずに、彼を見つめた。

「何があつた、高臣。てめえに何が起こつたんだ」

ほとんどうなり声としか思えない、樹生の苦しげな言葉。

しばらく沈黙を通していた高臣はようやく少しだけ顔を上げると、口を開いた。

「君らも知ってるだろう？ 晩年のラヴェルは交通事故の後遺症で記憶障害になり、あふれるほどの音楽を記譜することすらできなくなつた。頭の中に音楽は鳴り響くのに、それはどうあがいても表現することが…」

「てめえはラヴェルじゃねえ！！何度言えばわかる！！おれは、おれたちはおまえの本当のことが知りてえだけだ！！」

樹生の悲痛な叫び声。

そのあとに続く、ほんの微かなつぶやき声。

……おれたちは確かに友達だつた…はずだ……

友達、その言葉を聞いた途端、高臣の陶器のようなビスクドールの仮面にひびが入った。

それはぱらぱらと崩れ落ちてゆき、彼のむき出しの表情を表に出していった。

おそらく人前で流したことのないであろう涙が、高臣の薄く淡い青い瞳から一筋流れ落ちる。

「……父が、死んだ。母ももう亡い。僕はこれから誰の指示を仰ぎ、誰を憎みながらピアノを弾けばいいんだ？」

「高臣……」

樹生の言葉は続かなかった。

その代わり、自分でも思いがけなく彼は高臣の肩を引き寄せた。

「僕に最初から家族なんていなかった。そう思っていた。愛情のかけらもないラヴェル狂いの父と、顔も覚えていない母。それでも僕は、僕がピアノを弾き続けることだからうじてつながっていた。すべてを失い、それがようやく……わかった」

「それで日本へ、帰ってきたのか」

僕には何もない。友人も家族も。音楽さえも僕の手から離れてゆこうとした。

高臣の声は、静かだった。十五年を埋め尽くすかのように、穏やかに。

「みんな不幸であればいいと思っていた。それならば報われると。樹生も東條も坂峰も神崎も、すべて苦しさを背負っていればいいとそれがわかれば安心して僕は不幸にひたろう。自分を慰めつつ孤独に生きよう。それは日本でもフランスでもいい。たった一人で、そんなことは慣れている。けれど……」

日本には、かのんがいた。僕によく似た美しい娘。そして幸せそうな井上の家族。誰もが笑顔の日常生活がそこにはあった。

「すべて壊してやりたかった。僕と同じ苦しみを味わわせてやると

ね。でも、かのんは僕の娘なんかじゃない。井上かのんだ。そうだろう？」

ああ、そうだ。樹生の声にももう激しさはなかった。

「高臣。音楽はな、憎しみから生まれるもんじゃねえ。人と人とを結びつけるもんだ。違うか？おまえと初めて大学の練習室で会ったとき、おれはそのときクラシックってすげえと思ったんだ。確かに辛い思い出には違いがないさ。でもそこには笑顔もあつたろ？おまえが初めて外の世界に触れて、たくさんの友達ができて、あの時間は嘘じゃねえだろ？あのときだつてできたんだ。今からだつてできるさ。人を信じることも愛することも、音楽を続けることも」

うん、うん。まるで子どもみたいに高臣はその言葉を聞きながらうなずき続けた。

そつと足音も立てずに美沙子がステージに上がる。かのんは母を見つめていた。あのとき見せた怯えも震えもはやなく、彼女は静かに高臣に近づいていった。

「東條……」

高臣の声はかすれていた。「伊織くん。あなたに逢えたこと、ほんのわずかでもあなたを愛していたことに私は感謝しているの。本当にありがとう」

その言葉を聞いた彼は、舞台の床にひざをつくと肩をふるわせて泣き続けた。

かのんは恭平の腕にすがりつくと、その肩に頭を乗せた。

音楽は戦いじゃない。人の凍り付いた心を溶かすもの。ここには誰

の中にも音がある。

だからこそ、わかり合える何かがある。

カノンの連鎖も呪縛も、もう終わり。

今はただ、父と高臣が演奏したという「クープランの墓」が聴いてみたいと無性に思った。

思い出の中に存在する、至高の佳曲。いつかまた、再演できたらいいのに。

かのんの心は、温かいものでいっぱい満たされていた。

#55

「ふあああ」

大口を開けているところを、よりによって恭平に見られてしまった。呆れ顔で頬を引きつらせるとヤツは、ため息をついた。

「おまえってさ、見るたんびにあくびしてんのな。お気楽でいいよなあ」

その物言いにかちんと来て、かのんは思わず大声で言い返した。

「やなヤツ、恭平って。何よ急に高等部の特進クラスに進路変えたからって勉強ばっかこれみよがしに始めちゃって。うちの高校から国立の医学部になんて行けた先輩いたっけ？」

いないならおれが第一号になってやるさ。恭平は変な自信とともに、また問題集に取り組み始めた。

「ホントに医者になるの？」

単純な恭平は、弁護士をしながらプロのバンドマンとしてCDも出しているサックスプレーヤがいることを知り、じゃあおれは木島医院の医者をやりながらデビューしてやると息巻いているのだ。

「医者と弁護士じゃえらい違いだと思うけどなあ。弁護士って夜中に急患で呼び出されたりしないでしょ？」

「そういうおまえは何になるつもりだよ？ピアノだってあれ以来弾いてねえんだろ？」

そう、習う機会はいくらでもあった。お母ちゃんは退院して講師に復帰したし、他の先生を紹介してくれると言ってくれたけれど、何となく気後れして弾こうという気にならなかったのだ。

大島はさっさと音高の推薦を決めてしまっていたし、真由と二人でのんきに高等部に内部進学しようねとは言っていたのに、彼女も実はと言いながら偏差値の高い高校へ進むことが決まった。

ゴメンねと真由は泣いていたけど別にショックなことじゃない。進路なんて人それぞれ、あたしがまだぐずぐずしているだけ。

「じゃあさ、おまえ看護師か薬剤師になれ。そしたら木島医院で雇ってやる」

「はあ？何それ？それを言うんだったらねえ、恭平より先に医学部に受かって女医になってみせるわよ、女医に」

高らかに宣言したかのんの言葉を聞いて、彼女の成績を知るほとんどのクラスメートが一斉に大笑いした。かのんは、笑うとこじやな

「い！！と怒ったけれど、普段を考えれば仕方ないだろう。」

笑いながら恭平がかのんに言う。

「おまえはさ、音楽をやれよ。いつからだっていいからさ」

おれは何でもわかってんだぞ、そう言いたげな温かい笑顔だった。そうだね、それが一番あたしに合ってるかもね。本当は心の中でそう思ってるんだ。

これは口に出さずにしまっておいた。何だかとても照れくさくて、ちゃんと言えそうになかったから。

もうすぐ季節が一回りする。あのときから。

もう、遠い遠い遙か彼方のことのように思えるのに、音だけはまだかのんの胸にある。

だからきつと、いつかはきつと。

太郎ちゃんは相変わらず准教授兼作曲家として飛び回ってるし、和奏ちゃんは何だか太郎ちゃんの秘書みたいな仕事を始めた。それでもときどきはあの豪華なマンションに遊びに行っではおいしいチョコをごちそうになっている。

春めいた風を受けながら家に帰ると、珍しくぼろっちい車が車庫に入っている。お父ちゃんが帰ってきてるんだ。

急いで玄関のドアを開けてローファアを脱ぎ捨てると、走って台所に飛び込む。

「何だよおい、ただいまくらい言えよ」

「お父ちゃんお帰り！ツアーどうだった？」

樹生は答える代わりにVサインを出した。今どきVサインはないんじゃない？つつこみを入れると、じゃあどうすりゃいいんだよ？と父はむくれた。

相変わらず家ではジャージとサンダルのむさい親父だ。あの熱狂的なファンたちに見せてやりたい。

「何？この手紙」

横文字の国際郵便がダイレクトメールの山に混じっていた。

「あん？そんなの入ってたか？」

お父ちゃん読める？なんて訊く方が時間の無駄だ。ネットで調べようかなと思いつながら何気なく差出人に目をやる。

T・Iori

「お…父ちゃん、伊織さんから…」

樹生の顔がほんのちよつと緊張する。ペーパーナイフで、中を傷つけないようにそつと開ける。

出てきたのは、いつか学校のPCで見た、高くて青い空。小さな窓と白い壁の南欧の風景と、そこに写る二人の写真。

清楚な丈の短いウェディングドレスが似合う美女と、となりにいるのは……。

「えーーーーっ、これまさか伊織さん！？」

「……………!?!」

樹生は絶句したまま、写真を持ってひっくり返りそうになった。そこに写っていたのは確かに、笑顔とはほど遠い緊張しきった顔つき、はにかむような。

……………あのやろう……………。

中身はフランス語でも何でもなく、タイピングされた日本語。

『出会って二ヶ月で決めてしまった。僕にはどうせ失うものなど何もないし、まあいいかと……』

何がまあいいか、だ!!こんな極上の美人つかまえやがって。絶対、大学時代の同級どもにネット配信してやると心に固く決め、樹生はそれを目立つところにマグネットで止めた。

そこだけ南ヨーロッパの風が吹いているみたいで、かのんはうつとりと眺めていた。

「いいなあ、あたしも進学とか就職とか考えてないで結婚しちゃおうっかな」

「お、おい。止めてくれ。心臓に悪い」

「でもさ、来年になったら結婚できるんだよねー、確か。早くおじいちゃんにしてあげようか?」

かのんの悪ふざけに、樹生の顔が蒼白になってきた。からかいすぎ

たかな？かのんはふふつと笑った。

かちゃ。ドアの開く音。お母ちゃんだ！！
どたどたと足音を立ててかのんが玄関に急ぐ。

「ねえねえ、大ニュース！！伊織さんがねー！」

「こつちも大ニュースよ。ほら」

美沙子はそつとかのんの手のひらに、幾枚かのモノクロ写真を置いた。

「これって、もしかして？」

答える代わりに母はにっこり笑って見せた。母をかばうように背中から優しく抱きつく。

「お母ちゃん！！やったあ！！」

何だ何だ？樹生が大騒ぎしている玄関までやってくる。今度は言葉も説明すらも要らなかった。くすぐったそうな複雑そうな、それでいて本当に嬉しそうな笑顔。

「今度こそちゃんとお祝いしようね。お父ちゃんも手伝うこと！！いいね？」

かのんの周りに柔らかな風が集まり出した。

季節はめぐって、穏やかな春はまた姿を見せ始めている。

十五年分の氷が溶け、みなの上に暖かい想いがふわりと届いていった。

かのんの踏み出したあの勇気が、すべてを変えていったのだ。いつか、かのんの元へ音楽が戻ってくるそのときまで。

春はそこまで、ほら、近づいているから。

> (了) <ご愛読ありがとうございました

<カノン> 北川 圭 Copyright? 2009 - 2010
keikitagawa All Rights Reserved

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180m/>

カノン

2010年10月9日14時06分発行